



「感じの良さ・悪さ」に着目した相づちの研究－現代日本語と現代中国語の対照を通して－

羅， 希

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2017-03-25

(Date of Publication)

2018-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6805号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006805>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

「感じの良さ・悪さ」に着目した相づちの研究
—現代日本語と現代中国語の対照を通して—

平成 29 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

羅 希 (LUO Xi)

博士論文

「感じの良さ・悪さ」に着目した相づちの研究
—現代日本語と現代中国語の対照を通して—

審査委員：友定 賢治教授

定延 利之教授

林 良子教授

平成 29 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

羅 希 (LUO Xi)

目次

＜本稿における表記法＞	iv
第1章 序論	1
1.1 問題提起	1
1.2 研究手法	3
1.2.1 質的分析と量的分析	3
1.2.2 実例と作例	4
1.2.3 観察と実験	4
1.3 データの概要	4
1.4 本稿の構成	4
第2章 相づちをめぐる先行研究	6
2.1. 欧米圏における相づちの研究	6
2.2. 日本語の相づちに関する研究	7
2.2.1. 相づちの定義	8
2.2.2. 相づちの「機能」について	9
2.2.3. 日本語母語話者の相づちのバリエーション	10
2.2.4. 相づちに関する対照研究	11
2.2.5. 日本語学習者の相づち	12
2.3. 工学への応用	13
2.4. 問題点のまとめ	14
第3章 本稿の枠組み	15
3.1. 本稿の立場	15
3.1.1. 従来の「機能説」に対する反論	15
3.1.2. 発話の「三位一体」という考え方	16
3.2. 本稿で使用される相づちの定義と研究範囲	17
3.2.1. 本稿で使用される相づちの定義	17
3.2.2. 本稿における相づちの分類：「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」	18
3.2.3. 本稿の研究範囲	18

3.3. 本稿の枠組みと到達点	19
第4章 「相づちは理解あるいは賛意を意味する」に関する検討	21
4.1. 先行研究に対する問題意識	21
4.2. 相手の発話に対する理解度と態度に関する実験	22
4.3. 遅延した相づちの韻律パターン	28
4.4. 各韻律パターンの遅延した相づちの文脈	30
4.4.1. 「新規話題・新たな概念が提示された際」に現れた遅延した相づち	30
4.4.2. 「相手の発話が1つの見解として完結した際」に現れる遅延した相づち	32
4.4.3. 「相手の発話に問題が生じた際」に現れる遅延した相づち	35
4.5. 非常に早いタイミングで打たれる相づち	38
4.6. 考察	39
4.7. まとめ	40
第5章 「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」に関する検討 ...	42
5.1. 問題提起	42
5.2. 相づちの頻度と相手の発話速度に関する実験	43
5.3. 実際の会話データの観察	47
5.4. まとめ	51
第6章 「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」に関する検討	52
6.1. 問題意識	52
6.2. 話芸「相声」における言語行動	54
6.3. データの概要	57
6.4. 天津方言話者の会話における相づちの現れ方	57
6.5. 考察	61
6.6. まとめ	62
第7章 「相づちは相手の発話の進行を促すためである」に関する検討	64
7.1. 問題提起	64
7.2. 天津方言に「感じの悪い相づち」は存在するか	65
7.3. 天津方言における感動詞「啊」について	66
7.4. 現代日本語の「うん」「はい」と天津方言の「嗯」「啊」との比較研究	70
7.4.1. 独り言で発せられる際の容認度の比較	70

7.4.2.	肯定応答とする際の比較	74
7.4.3.	発話途中、発話末尾で話し手によって発せられる際の比較	78
7.4.4.	感動詞としての「うん」「はい」「嗯」「啊」の共通点と相違点に関する考察 82	
7.4.5.	相づちとしての「うん」「はい」「嗯」「啊」の共通点と相違点に関する考察 84	
7.5.	両言語社会の相づちに関する総合的考察	90
7.6.	まとめ	92
第 8 章	結論と今後の課題	94
8.1.	第 4 章から第 7 章までの結論	94
8.1.1.	第 4 章の結論	94
8.1.2.	第 5 章の結論	95
8.1.3.	第 6 章の結論	95
8.1.4.	第 7 章の結論	96
8.2.	本研究の問題点と今後の課題	99
	謝辞	100
	参考文献と資料	102

＜本稿における表記法＞

- (1) 本文中の会話データのトランスクリプトは、筒井（2012）を参照し、次の記号を用いて転写したものである。

[	複数の参与者の発する音声为重なり始めている時点
]	重なりの終わりの時点
[[	2 人の話し手が同時に発話を開始する時点
(m.n)	音声途絶えている状態があるときの秒数
(.)	0.2 秒以下の短い間合い
言葉：	直前の音が延ばされていること (コロンの数は引き延ばしの相対的な長さ)
言 -	言葉が不完全なまま途切れていること
言(h)	笑いながら産出される発話
,	発話の語尾の音が少し下がり弾みがついている箇所
.	発話の語尾の音が下がり区切りがついた箇所
?	発話の語尾の音が上がっている箇所
↓↑	音調の極端な上がり下がり

- (2) 会話のトランスクリプトに「→」が付いている行は、「ここで特に注目すべき」ことを示す。
- (3) 出典を付していない例はすべて作例である。
- (4) 会話、引用例、作例に、直接の分析対象となっている語は下線 で示す。
- (5) 作例の容認度に用いた発話冒頭の「？」の記号は、その表現や発話が不自然であることを示す。
- (6) 注は脚注にする。

第 1 章 序論

1.1 問題提起

「コミュニケーション」という言葉は近年、様々な分野でますます広く使われるようになってきている。インターネット上でも「良いコミュニケーションを達成する手段」や「悪いコミュニケーションの特徴」などがしばしば取り沙汰されている。では、「良いコミュニケーション」はどのような形で現れるのであろうか。この問題に筆者は以前から、興味を抱いてきた。しばしばこの問題と絡めて論じられる現象の 1 つに相づちがある。相づちの定義は、後述するように研究者によって様々だが、いずれの定義に従ってもまず間違いなく相づちに含まれると思われる言葉はある。メイナード (1993) は相づちを定義する際に、次のように述べている。

- (1.1) 「あいづち」とは話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語行動を含む）、…（後略）

[メイナード 1993 : 58]

研究者によっては、より拡大した形で様々な定義されるが、それでもしばしば中心的位置を占めるのは、やはりこのような「相づち」である。このような言葉について、従来の相づち論で繰り返しに述べられていることは、次のような 4 点にまとめられる。

- ①相づちの意味について。相づちは理解あるいは賛意を意味する。
- ②相づちの頻度について(a)。日本語社会において相づちは高頻度で打たれることが好まれる。
- ③相づちの頻度について(b)。中国語社会において相づちは高頻度で打たれることが好まれない。
- ④相づちの印象について。相づちは相手の発話の進行を促すためである。

以下、例をそれぞれ示す。まず①については、次の(1.2)は、相づちは理解あるいは賛意を意味することが述べられている。

- (1.2) 聞き手は、ただ話し手の言うことを聞いて理解するだけではなく、相づちを送ることによって、聞いている、理解した、あるいは興味、共感を持っているなどの態度を示し、話し手に積極的に働きかけていく。

[窪田 2000 : 76]

また、②について、次の(1.3)は日本語社会において、相づちの頻度が高いことが述べられている。

- (1.3) 日本語のあいづちは他の言語に比べ、質、量ともに多く、日本の文化や価値観を反映した特徴的なものである

[辻本 2007 : 33]

③については、次の(1.4)は、中国語の相づちが少ないことが述べられている。

- (1.4) Mandarin interactional style favors conversational participants not infringing on the other's 'turn space'.

[Clancy et al. 1996: 382]

④については、次の(1.5)を見られたい。

- (1.5) あいづちは、「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入れるもの」

[水谷 1988 : 4]

しかし、以上の4点は常に正しいのであろうか。そのような思いから筆者は、相づちを研究するようになった。修士論文(羅 2014a)では日本語を学習する中国語母語話者の相づちを調べた。学習者が日本語会話で打つ相づちは、最初は少ないが、日本語を学んでいるうちに自然に多くなるのではないかという発想から、4人の学習者が日本語母語話者を相手に行

う会話を1年間にわたって調査した¹。観察の結果、4人中3人が1年で相づちの頻度が高まり、また、4人とも相づちのバリエーションが豊かになった。では、相づちが頻度とバリエーションの両方で母語話者の相づちに近づいて、その3人の日本語会話は「良いコミュニケーション」になっていたのであろうか。母語話者の評価によると、必ずしもそうではないという結果が出た。6人の母語話者は1人の学習者と母語話者の会話を「良いコミュニケーション」とは認めなかった。

このように、従来の計測(相づちの頻度とバリエーション)からこぼれ落ちる何かは、我々のコミュニケーションの良し悪しに直結しており、無視することができない。言い換えると、単に「高頻度で非単調に打つこと」が必ずしも「感じの良い相づち」、そして「良いコミュニケーション」につながるとは限らないということである。

本稿は、この方向をさらに推し進め、以上4点を批判的に検討し、これらのいずれも必ずしも成り立たないことを示し、コミュニケーションに対する我々の理解を深め、新たな相づちの展開をするものである。以下、その手法について紹介しておく。

1.2 研究手法

本稿の主張は、「質的分析に集中し、量的分析を行わない」「実例だけではなく、作例も分析対象とする」「観察記述にとどまらず、実験をも行う」の3点の特徴を持つ。以下、それぞれについて紹介する。

1.2.1 質的分析と量的分析

一般に会話の分析方法としては質的分析と量的分析の2通りの手法がある。量的分析は、観察結果を数値化し、客観的な記述に適しているが、十分なデータがそろわない限り、存在するが、単に検出できないものなのか、それともそもそも存在しないものなのかの区別がつけられない。会話分析は20世紀70年代に H. Sacks、E. Schegloff、G. Jefferson によって生み出された分野だが、そのうちの Schegloff(1993)は、量的分析の効果を認めながらも、我々は量的分析の効果を利用できるような段階はまだ至っていない、我々は会話に対してまだ様々なことが分かっていないので、量的分析を行うには未熟 (premature) な段階にあるということが述べられている。筆者は、Schegloff の主張に深く共感するものであり、量

¹ 観察された会話は計4時間である。相づちとして扱ったのは、(i)発話に挟まれる「うん」「ええ」「はい」などの「相づち詞」、(ii)相手発話の繰り返し、(iii)相手発話の言い換え、の3種類である。

的分析の価値を否定する意図はないが、本稿では主に質的分析に集中する。

1.2.2 実例と作例

相づちの研究者は会話分析の教義に沿い、実際にある現実のデータのみを用い、作例観察を行うことはほとんどない。しかし、先ほどの小節で述べたように、現実のデータでは検出できないものを潜在的にあると認めることは、すでに作例を用いていることになる。本稿では、実例を重視するのはもちろんだが、実例と共に作例を用いる。

1.2.3 観察と実験

相づちの研究の中では、相づちの観察にとどまるものが多い、実験まで行うものとしては塚原他（1997）、稲井（2005）が見られるが、構築した仮説を検証するには、実験は効果的な手法と考えられる。本稿では、相づちの実例、作例の観察にとどまらず、実験を行う。

1.3 データの概要

本稿で用いる日本語の自然会話のデータは、ネット上で無料で公開されている文字・音声情報付きのデータベース KOBE Crest FLASH²から数例を無作為に選出した。このデータベースには、1対1の会話が多数収録されている。対話する2人の話者には、課題が一切与えられていない。また、データは対面式録音ブースで収録したため、相手の声と混ざることなく取り出せるという特徴がある。第4章の実験は、この機能を生かして作成したプログラムを用いて行った。

また、第6章から第7章の考察で使用する中国語の天津方言の会話のデータは、筆者が2016年2月に天津で収録したものである。収録時間は約210分であり、会話の協力者は、中高年層の人が多く、また、収録する際に、協力者に天津方言で話すように指示し、課題は設定しなかった。

1.4 本稿の構成

本稿では、次の第2章で相づちをめぐる先行研究を包括的にまとめたうえで、その到達点と限界について述べる。第2章ではまず、相づちの研究の出発点、その後の発展、さらに

² <http://www.speech-data.jp/ta/kobedata/>に参照。

会話分析、第二言語習得研究、工学などの分野での展開について紹介する。その後、先行研究の問題を提示する。

第3章では、本稿の立場と研究の枠組みを紹介する。まずは、従来の研究で安易に認められてきた意図を前提とするコミュニケーション観と「機能説」の限界を指摘する。そのうえで、本稿における相づちの定義、そして相づちの体系を作成するには非常に重要な概念「感じの良い相づち」「感じの悪い相づち」を紹介する。さらに、本稿の研究範囲について述べ、枠組みと到達点を提示する。

その後の第4章から第7章では第1.1節で提示された「相づちは理解あるいは賛意を意味する」「日本語社会において相づちは高頻度で打たれることが好まれる」「中国語社会において相づちは高頻度で打たれることが好まれない」「相づちは相手の発話の進行を促すためである」の4点を批判的に検討する。

まず第4章では、相づちの意味を検討する。従来の研究では、相づちの「理解」あるいは「賛意」といった肯定的な側面が強調されてきたが、第4章で実験と会話分析の手法で、相づちは打たれるタイミングによって「理解していない」「賛成しない」といった否定的な語用的効果が生じる可能性があることを提示し、そのような相づちは「感じの悪い相づち」と指摘する。

第5章と第6章では、相づちの頻度について検討する。第5章では「日本語社会において相づちは高頻度で打たれることが好まれる」という見方が全面的に正確ではなく、相づちが打たれる頻度は、話し手の発話速度と発話量にどのように関わっているかを明らかにする。

第6章は、第5章の続きで「中国語社会において相づちは高頻度で打たれることが好まれない」という考えを検討するために、現代中国語の天津方言の会話を観察し、天津方言の会話における相づちの頻度は非常に高いという事実を示す。

第7章では、相づちの印象について検討する。相づちは従来「相手の発話の進行を促すためのものである」と言われてきたが、日本語の「うん」と「はい」、中国語の天津方言の「嗯」と「啊」を比較することで、この考えの限界を述べていく。さらに、総合的な考察を行うことで、日本語社会と中国語の天津方言におけるそれぞれの「感じの良い相づち」「感じの悪い相づち」の体系を作成する。

第8章では、第4章から第7章の結論をまとめたうえで、本稿の限界と今後の課題について述べる。

第 2 章 相づちをめぐる先行研究

本章では、まず第 2.1 節で、相づちの研究の出発点である、欧米圏における相づちの研究についてまとめる。その後、第 2.2 節で、日本語における相づちの定義、「機能」、母語話者の相づちのバリエーション、他の言語との対照研究、日本語学習者の相づちといった 5 つの側面から日本語の相づちを概観する。第 2.3 節では、相づちの研究成果の工学への応用の現状を示す。以上の 3 つの節で先行研究の到達点について言及した後、第 2.4 節ではこれまでの研究の問題点を指摘する。

2.1. 欧米圏における相づちの研究

電話会話で、話し手が発話している途中に、聞き手によって発せられる “yes”、“uh-huh”、“I see” のなどの短い感動詞が、Fries(1952)で言及され始めた。彼は、このような発話を「自由に発せられる短い発話 (single free utterance)」と呼び、聞き手が話し手に対して注意を払っていることをほのめかしていると指摘している。その後このような現象は、会話分析や社会心理学などの分野の数多くの研究で取り扱われてきた。

現在、相づちという用語は英語圏の “backchannel” という表現に対応するとされることが多い。この用語は、Yngve(1970)によって提示されたものであり、当初は言語現象ではなくコミュニケーションのチャンネルを指すものとされていた。Yngve(1970)では、会話の際に、主要な情報を載せて流す経路は “main channel” であり、それに対して、主要な情報を受けて、話し手に送り返す短いメッセージ (short message) を流す経路は “backchannel” であるとしている。また、これらの短いメッセージを発することで、聞いているだけではなく、会話に参加していることをほのめかしており、コミュニケーションの質をモニターするのに重要だと提示している。短いメッセージとするものは具体的に以下の 6 種類の表現形式がある。

- ① 応答詞 “yes” “uh huh”
- ② 言い換え saying in other words
- ③ 注意と興味の態度 an attitude of attention and interest
- ④ 短い評価 short comments

⑤同意 agreement

⑥短い質問 short question

Yngve(1970)では、これらの短いメッセージを受けることで会話の主導権(メインフロア)の所有者が話し続けられると主張されている。その後の研究でも、backchannel という用語が広く使用されているが、コミュニケーションのチャンネルではなく、言語現象やジェスチャーを指すものと定義が修正されている。例えば、Duncan(1972)では、Yngve(1970)で指摘されている 6 種の短いメッセージ以外に、文完成 (sentence completions)、頭の縦振りと横振り (head nods and shakes) が付け加えられ、この類の表現を “backchannel response” と呼んでいる。

また、会話分析の領域では、Sacks(1992)で相手の語りを聞いている途中に発せられる “uh huh”、“mm hm”、“oh”などの感動詞・応答詞は、相手に対する「注意」「話がまだ完了していないことの認識」「ポーズの満たし」「催促」などをほのめかすものであると主張している。それに類似した視点で、Jefferson(1983/1993, 1984)は、“uh huh”、“mm hm”、“yeah”を「受領のしるし (acknowledgement tokens)」としており、「現在の話題の続きの促し」や「話題転換の予告」の語用的効果があるとしている。また、“uh huh”、“mm hm”はメインフロアを取ろうとしない「消極的聞き手性 (passive reciprocity)」を持っているが、それに対して「yeah」は聞き手の役割から話し手の役割に変更する準備ができたというシグナルになると指摘している。

2.2. 日本語の相づちに関する研究

日本語における相づちの研究は 80 年代以降盛んになってきた。その中で、日本語の相づちが他の言語に比べて質的・量的に異なった特徴を持っていることが多くの研究で指摘されている。質的な特徴とは、日本語の相づちは他言語のように賛意の現れである場合だけでなく、相手の話をただ「聞いている」「理解している」という際にも打たれる(水谷 1984; 杉戸 1989 など)ということである。(量的な特徴については第 2.2.4 節で述べる。) このような特徴は英語、中国語などの言語にはなかったため(水谷 1984; 楊 1999, 2006)、相づちは日本人のコミュニケーションにおいて大変重要な役割を果たしていると主張されるようになり、日本語学習者は如何に母語話者のように相づちを打てるかが「良いコミュニケーション」につながっていると暗黙のうちに認めるようになった。すなわち、相づちはコミ

コミュニケーションを「円滑」にするための「道具」として捉えられるようになったのである。このような認識は現在広く浸透していると言える。この節では、80年代以降の日本語の相づちの定義や、「機能」、バリエーション、他言語との対照研究、日本語学習者を対象とする相づちの研究を整理していく。

2.2.1. 相づちの定義

相づちの定義は、研究者によって異なっており、一定のものはないが、共通点もある。この小節では、代表的なものを取り上げ、紹介した上で、共通点を明らかにする。

小宮（1986）では、相づちを「応答表現の中で、話し手の発話に対し、自由意志に基づいて、肯定・否定の判断を表明することなく、単に『聞いている』、『分かった』という意味で用いられるもの」と定めている。

また、黒崎（1987）では、相づちを分析する際に、「話者の発話に対して、肯否等の判断を表明することなく、ただ単に『聞いていますよ』『分かりますよ』という信号を送る段階の応答表現」を対象とすると述べている。

水谷（1988）では、相づちを「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入れるもの」(p.4)に限ると述べている。

杉戸（1989）では、対話する際の発話を「実質的な発話」と「あいづち的な発話」の2種に区別している。「あいづち的な発話」は「ハー、アー、ウン、ソーデスカ、ソーデスネーなどの応答詞を中心にした発話。先行する発話をそのままくりかえすオーム返しや単純な聞き返し。エーッ、マアー、ホーなどの感動詞だけの発話。笑い声。つまり、実質的な内容を表現する言語形式（中略）を含まず、また、判断、要求、質問など聞き手に積極的な働きかけもしないような発話」（杉戸 1989 : 50）と定義している。それ以外の発話を「実質的な発話」とみなされている。

メイナード（1993）では、相づちを「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語行動を含む）」という性格を持ったものと定義し、また「短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる反応を示したものを相づちから排除した。

本田（1997）では、相づちを「発話の途中に聞き手がおこなう『ああ』、『はい』、『ええ』などという、話を聞いていることを示すという機能しか持たないような短い発話」(p.198)と定義している。

堀口（1997）では、相づちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から

送られた情報を共有したことを伝える表現」(p.42)と定義している。

以上のような研究者間での相づちの定義の違いは、十分に意識されず、異なる定義に基づく相づち論が、同じレベルに立つとされてしまうこともある。例えば、柳(2003)は、「台湾人日本語学習者の相づちの表現」を考察する際に、「小宮(1986)とメイナード(1993)の定義」に従い、また、相づちの分類は小宮(1986)の「感声的表現」「概念的表現」に基づくとしている。ここには問題が2つある。1つは、先の紹介から明らかなように、小宮(1986)とメイナード(1993)の定義には大きな違いがあるということである。小宮(1986)とメイナード(1993)の定義は異なる以上、同時にこれらに従うことはできないということである。もう1つは、観察範囲の問題である。小宮(1986)の「概念的表現」には、「意見の表明」になる「ソーソー」などが含まれていないのだが、柳(2003)では「そうですね」「そうそうそう」といった「意見の表明」も「概念的表現」という類に入れられているということである。

このように、相づちの定義は様々である。だが、「聞き手によって発せられる」「実質的な意味を持たない」といった点では共通している。

2.2.2. 相づちの「機能」について

相づちの「機能」に関しては次のような指摘がある。一部の研究者は、相づちは賛意があるかどうかに関わらず、単なる「聞いている」「分かっている」際のシグナルであると指摘している(黒崎 1987; 水野 1988)。それに対して、メイナード(1993)、ザトラウスキー(1993)、堀口(1997)などの研究者は、相づちの「機能」に関してはより広く捉えており、「聞いている」「分かっている」以外に、賛意の現われ、感情の表出、催促なども取り上げている。このように、研究者間で相づちの「機能」に関する結論は統一されていないが、多くの研究によって言及されている「機能」は主に次のようなものである。

① 聞いている機能(メイナード 1993; ザトラウスキー 1993 など)³

② 分かっている機能(堀口 1988, 1997; メイナード 1993; ザトラウスキー 1993 など)

³ ただし、一部の研究者(今石(1993)など)は、「聞いていることだけを伝える相づちは存在しない」、「聞いている機能」を「理解している機能」にまとめるべきという主張をしている。というのは、「聞く」というチャンネルで、相手の発話を理解しているかどうかを伝えるのがフィードバック情報(相づちあるいは聞き返し)であるからだと述べられている。

- ③ 同意している機能（堀口 1988・1997；メイナード 1993；ザトラウスキー1993 など）
- ④ 強い感情を表出する機能（堀口 1988；ザトラウスキー1993 など）
- ⑤ 相手の発話の進行を促す機能（小宮 1986；水谷 1988；メイナード 1993；黒崎 1987 など）

ただし、本稿では「機能説」を支持しない。この点については第 3 章で詳細に論じる。

さらに、相づちの重要性として、様々な記述がある。例えば、「話し手は、聞き手の巧みな相づちにより、話を続ける意欲を得るのである。相づちは、談話の進行を促す上で重要な役割を果たしている」（小宮 1986：43）、「相づちは『聞き上手』の重要な条件の 1 つであり、日本語の談話の進行には、欠かすことのできないものである」（黒崎 1987：122）、「あいづちが円滑なコミュニケーションに果たす役割」（村田 2000：241）は大きい、「あいづちはこのように話し手と聞き手とのコミュニケーションを円滑に進行させるための重要な働きをしている」（中島 2003）などがある。

このように、ほとんどの研究において、相づちは「理解・賛意を示す」「相手の発話を促進する」「コミュニケーションを円滑にする」と位置付けられていることが分かる。

2.2.3. 日本語母語話者の相づちのバリエーション

相づちの頻度、形式に関して母語話者の中でも男女差、世代差、話題差が見られる。相づちの男女差については黒崎（1987）、大浜（2006）、辻本（2007）などが挙げられる。それらの研究において、男性より女性の方が高い頻度で相づちを打つことが報告されている。その上、女性は男性より相づちの形式のバリエーションに富んでいる（辻本 2007）。さらに、同一人物が女性の相手に対しては「ホント系」⁴、「ソウ系同意型」⁵を多用する一方で、男性の相手に対しては「ア系」や「エ系」⁶を使用する傾向があるという結果が出ている（大浜 2006）。

年代差については少年層より中年、老年層の方が相づちの頻度が高いことが指摘されて

⁴ ここの「ホント系」というのは「ほんとう」「ほんま」などである。

⁵ ここの「ソウ系同意型」というのは「そうですね」「そうよね」など、相手の意見に賛意を表すものである。

⁶ ここの「ア系」というのは「あ」「あーあー」、「エ系」というのは「ええ」のようなものである。

いる（黒崎 1987）。また、大浜（2006）の調査によると、同世代の相手に対して「ン系」⁷、「エ系」「ソウ系主張型」⁸が多く使われているが、年上の世代に対しては「ア系」「ハ系」⁹、「ソウ系同意型」「ホント系」を打つことが多い。

その他、話者間の親疎関係も相づちの頻度に影響を与え、会話する相手との関係がさほど親しくない際に相づちの頻度が増加するという傾向があり（杉戸 1987）、「気楽に思い出を語る」場面では「自己の好みや意見がお互いに主張され合う」場面に比べてより頻繁に打たれる（黒崎 1987）ことなども調査で明らかにされている。

2.2.4. 相づちに関する対照研究

相づちの対照研究は数多くなされており、とりわけ日本語と英語、中国語、韓国語の話者との比較が代表的である。

まず、頻度に関しては、電話での相づちの調査により、中国語母語話者の相づちの使用頻度は日本語母語話者のそれより低く、かつ個人差が大きい（劉 1987；呂 2010）と報告されている。劉他（2010）は日本と中国のテレビのインタビュー番組における会話を観察し、劉（1987）、呂（2010）と同様に中国語母語話者は日本語母語話者ほど相づちを打たず、かつ2つの相づち間の間隔時間が長いと指摘している。また、日本語、英語、中国語の話者の中で、日本語母語話者が最も相づちを打ち、中国語母語話者は最も相づちを打たないことが明らかにされている（Clancy et al.1996）。英語母語話者が日本語母語話者ほど相づちを打たないことは、White(1986)、大浜（2006）によって、韓国語母語話者が日本語母語話者ほど相づちを打たないことは、金（1994）によっても証明されている。

形式のバリエーションについて、日本語の相づちの表現形式は英語、中国語、韓国語より豊かである（大浜 2006；劉 2012；金 1994）。水野（1988）は主に日中間で相づちの形式を比較し、たとえそれぞれの相づちの形式が類似しているとしても、日本語の相づちには待遇性があるため、中国語を母語とする日本語学習者には習得しにくい可能性が高いと指摘されている。さらに、日本語の「うん」「はい」などの相づち詞の使用範囲は中国語の「嗯」より広く、中国語母語話者には理解しがたいことも指摘している。また、楊（1997）の調査により、中国語母語話者が多用する中国語の相づちは「啊」と「嗯」であるが、日本語母語

⁷ ここの「ン系」というのは「うん」「うーん」などを指している。

⁸ ここの「ソウ系主張型」というのは「そうだよ」「でしょ」など、相手の意見と自分の意見が一致している際、同感を表すものである。

⁹ ここの、「ハ系」とは「はい」や「はーはー」のようなものである。

話者は「エ系」「ハ系」を多く使用することが分かっている。その他、中国語母語話者が中国語で談話する際の「繰り返し」の相づちは日本語母語話者が日本語で会話する時より多く使われることも分かった。

また、相づちが打たれるタイミングについて、日本語の相づちは、相手の発話と重なっているところや文中のポーズ（窪田 2000）、特に相手発話のイントネーションが上昇あるいは下降する場所（メイナード 1987；水谷 1988；今石 1994）で、相づちが多数打たれるが、中国語や英語の相づちは主に文末（劉 1987；Clancy et al.1996；楊 1997, 2006）か、1つのまとまった意味のあるところ（劉他 2010；呂 2010）で打たれると報告されている。さらに、文末においても日本語の会話のほぼ全ての文末で相づちが打たれるが、それに対して中国語の会話では約 3 分の 2 の文末でしか相づちが打たれないという指摘が見られた（呂 2010）。

相手発話と重なるかどうかに関して、日本語の相づちは相手発話と重ねて打たれるが、それに対して韓国語の相づちはポーズに入るとほぼ同時に打たれるという報告がある（金 2004）。

これらの研究結果が示すように、日本語の会話における相づちは他の言語に比べて頻度が高く、形式のバリエーションに富んでおり、相手発話に重なって打たれる。このことからすれば、日本語学習者は「高頻度で非単調な相づち」を打てば日本人と良いコミュニケーションが出来るのではないかと研究者が考えても無知はないであろう。実際、そのような研究は少なくない。次の第 2.2.5 節では、それを具体的に紹介する。

2.2.5. 日本語学習者の相づち

日本語学習者を対象とした研究は、打たれる相づちの形式、頻度、タイミングを計算する量的研究が圧倒的に多い。学習者が「日本人のように」相づちを打てるかは日本人と「良いコミュニケーション」ができるかを判断する 1 つの基準とみなされているようである（大河原 1989）。

中国語を母語とする学習者を対象とする横断的研究は楊（1997）、今石（1998）によってなされており、どの日本語レベルの学習者も母語話者とは、相づちの出現位置が異なっており、母語話者より頻度が低い（楊 1997；今石 1998）ことと、好まれる形式が異なる（楊 1997）ことが明らかにされている。さらに、相手の意見にさほど賛成しないという状況において韓国語母語話者の学習者は相づちを打たなくなるが、日本語母語話者は相手の意見

に対する賛否に関わらず頻繁に相づちを打つ傾向があると指摘されている（李 2000）。

また、縦断的研究は英語を母語とする学習者（登里 1993）と中国語を母語とする学習者（藤井 2001；寺尾 2008；山中 2012）の研究がある。いずれの研究においても、学習者は滞日期間が長くなるにつれて相づちの頻度が増える傾向があるという結論が報告されている。また、学習者間の形式のバリエーションの変化にはかなり個人差があることもこれらの研究で共通して指摘されている。

これらの研究結果から、学習者の相づちに関する研究は、いずれも如何に母語話者と同じ頻度、形式、タイミングで相づちを打てるかを基準としており、学習者が打つ相づちの適切性を会話の細部まで分析する質的研究は村田（2000）以外はほぼ見られないことが分かった。

2.3. 工学への応用

90 年代後半から、音声対話システム、音声合成の発展につれて、相づちを生成する機能が備わった対話システムを開発するために、会話における相づちの適切なタイミングを予測する研究が数多くなされるようになってきている。その中には、会話分析の研究成果を利用して相づちのタイミングに関する規則を作成するものが多くみられる。例えば、塚原他（1997）は、相づちの生成ルールに関して、700ms 以上の発話において低いピッチが 150ms 以上続いた場合、低いピッチの始まった時点から数えて 300ms 後に相づちが打たれやすいと予測している。このようなルールを実際の会話コーパスを用いて検証し、約半分の再現率を得ている。

また、特定のルールを設定せず、相づちの生成に適した位置に網羅的なタグ付けを与える相づちのコーパスも作成されるようになった（大野他 2010、神谷他 2010・2011）。具体的には、作業者が話し手の発話を聞き、相づちが打たれる可能性があるタイミングがみつければ、その位置にタグを付け、その後、タグ付けされた相づちのタイミングが自然かどうかを 1 名の被験者に判断してもらったという手法が使用されている。

さらに、相手の先行発話の韻律的特徴を用い、相づちの韻律的特徴を予測する実験も行われており、「あー」や「へー」などの感情表出系の相づちの一致率が高く、韻律的特徴に先行発話と同調しやすい傾向があることが報告されている（上里他 2014）。一方、「うん」などの応答系の相づちはあまり先行発話の韻律に影響されず、さほど同調しないことが明らかになっている。

2.4. 問題点のまとめ

先行研究を振り返ってみると、少なくとも3つの疑問が感じられる。

第1の疑問は、これまでの機能説的な考え方によって相づちは「良いコミュニケーション」を達成するための「道具」と捉えられてしまっていることに関係している。「相づちは良い印象を与える」「日本語社会において、相づちを高頻度で打つべきである」と考えられがちである。しかし、果たしてこれらの考えは本当なのであろうか。

相づちは、確かに数多くの場面で「理解」「賛成」に捉えられやすい。これまで数多くの研究で論じられてきたのは、あくまで相づちの「プロトタイプ的な」、あるいは「マジョリティ的な」側面であり、形式、出現位置が類似しているが、「理解」「賛成」を意味すると言い難いものに関する論述はほとんど見当たらない。より全面的な「相づち観」を構築するためには、「理解」「賛成」以外の面にも注目すべきだと考えられる。

2つ目の疑問は、「日本人は相づちを高頻度で打つ」「中国人は相づちを打たない」といった考えが広がっていることに関係している。これまでの研究では、共通語の会話をデータとして用いることが多く、方言による会話のデータを用いられることは非常にまれであった。しかし、共通語で会話をする際と方言で会話をする際の言語行動は、果たして問題はないのであろうか。とりわけ中国語では、共通語の文法、発音と大きく異なった方言が数多く存在する。また、「日本語社会で期待されている相づちの頻度が高いので、日本人とコミュニケーションする際にできる限り相づちを高頻度で打つべきだ」ということが安易に認められており、日本語教育の現場で、相づちを高頻度で打つことができるかどうか、学習者の日本語能力を判断する1つの基準になった（大河原 1989）。しかし、「日本語社会において、相づちを高頻度で打つべき」という考えは、果たして問題はないのであろうか。

3つ目の疑問は、相づちは「相手の発話の進行を促すためのものである」という考え方に関係している。相づちは、確かに、話し手が話している途中聞き手が発するものだが、それは、果たして「発話の進行を促す」という目的で発せられるのであろうか。

本稿では、まず第3章で「機能説」の限界を述べる。その後、第4章から第7章にわたってこれらの疑問点を解決し、相づちという現象をより詳細に観察、分類を行い、体系を作り上げる。

第3章 本稿の枠組み

本章では、まず第3.1節で本稿の理論的立場を紹介する。本稿では、従来の研究で暗黙のうちに認められている、意図を前提とするコミュニケーション観¹⁰と「機能説」の限界についてを述べる。そのうえで、第3.2節では、本稿における相づちの定義、分類、研究範囲について述べ、「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」という新たな概念を紹介する。最後の第3.3節では、本稿の枠組みと到達点を提示する。

3.1. 本稿の立場

3.1.1. 従来の「機能説」に対する反論

従来の研究では、相づちを考察する際に、「機能」という用語が非常に高頻度で現れている。筆者は、この用語の使用にはさほど賛意を示しがたい。というのは、「機能」という用語を使用するには、我々のすべてのコミュニケーションには意図・目的があり、『発話とは、発話者が何らかの目的達成の意図を持ってなすものである』という目的論的発話観や、『言語とは、そのために発話者に使われる』という道具論的な言語観の形をとって現れる（定延 2016: 162）からである。このような意図を前提とするコミュニケーション観によれば、我々は会話する相手に何かを表そうという意図で相づちを打っているということになる。しかし、果たしてそうであろうか。実際の会話において、多くの場合に我々は意図なく発話・行動し、意図的に「そろそろ相づちを打たないと」考えて打つということはあまり起こらないであろう。従って、会話で打たれる相づちが「何を意味するか」は、打つ人が決めることではなく、受け手の解釈によると考えられる。

これに関して、定延（2016）では、「クマの知恵」と「狩人の知恵」を例とし、次のような論述をしている。

- (3.1) クマを狩って何十年という狩人がいるとする。いま、狩人はクマの足跡を目にして、地面へのめり込み具合や指の跡の太さなどをつぶさに観察し、「この足跡は、このクマの肉がいま最高にうまいことを示している」などと言ったとする。ここで

¹⁰ 「意図を前提とするコミュニケーション観」という表現は、定延（2016）を参照したものである。

披瀝されているのは狩人の知恵である。それは当たっているかもしれないし、外れているかもしれない。が、いずれにせよ、この発言は狩人の知恵を披瀝する発言として十分に自然なものである。だが、たとえこの狩人の知恵が当たっているとしても、「このクマはこの足跡で、自分の肉がいま最高にうまいことを示している」と言うのはおかしい。当のクマは足跡と肉の味の相関など何も知らないだろうし、知ったとしても、自分の肉が最高にうまいなどという危険なことは他者に知らせたくないだろう。狩人の知恵をクマの知恵と同一視してはならない。

[定延 2016 : 212]

このように、我々は、狩人のように、他者の行動を観察し、それに基づいて推論することができるが、「彼は何々の意図があるからこうした」と断言してはいけないということである。ここで定延（2016）の言葉を借りると、我々は言語やコミュニケーションを研究する際にあくまで「外部の観察者」という役割を担っているのであって、我々の記述は当事者の「内部状態」に完全に還元できるものではない。以上の理由で、本稿では、「機能」という用語を最大限に避け、「相づちによる語用的効果」や「相づちの聴覚印象」などの表現を使うことにする。

3.1.2. 発話の「三位一体」という考え方

言葉がなぜ 1 つの形式に複数の意味を持っているかという問題について、これまで意味論、語用論などの分野で盛んに議論されてきた。

筆者は本稿で相づちの語用的効果を検討する際に、Sweetser(1990)の発話内容・話者の認識・言語行動という「三位一体」という発話観をとる。ここでは、「三位一体」の基本的な考え方を、澤田（2000）の日本語訳を借りて紹介する。

- (3.2) 私たちが論理・思考のプロセスをとらえる場合、そのとらえ方は、社会的・物理的世界に基づいてなされている。同時に、言語表現そのものも、(i) 記述（世界のモデル）として、(ii) 認識的・論理的実体（推論世界における前提や結論）として、(iii) 行為（記述されている世界における行為）として、形作られている。

[Sweetser1990 : 21 ; 澤田 2000 : 32]

Sweetser(1990)では、この「三位一体」の考え方で「知覚動詞」「モダリティ」「接続表現」「条件文」といった 4 つの領域の考察が行われているが、他の領域への応用は管見の限りないと思われる。本稿では、この「三位一体」という概念を使用し、現代日本語と現代中国語の天津方言における一部の感動詞を考察することで、これらの感動詞が相づちとして発せられる場合に、どのように話者の認知状態を反映し、さらにどのような語用的効果をもたらすかを明らかにする。本稿では 1 つの感動詞を分析する際に、まずその感動詞の形式を記述し、その後、その感動詞が発せられる際に、話し手がどのような「内的状態」あるいは「心的状態」にあるかを考察する。最後に、感動詞が発せられたことでどのような言語行動が遂行されたのかを明らかにすることで、その感動詞が相づちとして発せられる際の語用的効果を解明する。

3.2. 本稿で使用する相づちの定義と研究範囲

3.2.1. 本稿で使用する相づちの定義

相づちの定義に関して本稿では、メイナード（1993）の定義に沿い、「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現」を選択する。先行研究の一部は、相づちを「理解していること、賛成することを示す表現」などで定義するものもある。しかし、（特に意味論的「意味」のない感動詞の場合）「理解している」「賛成する」はどのように判断されるかについて明確に記述していないものが多い。従って、先行研究の記述の当否には慎重な検討を要すると見て取り、ひとまず相づちをメイナード（1993）に倣い、形式的に定義する。また、これらの表現は、命題の真偽の判断に関わらないものである。その一例を、(3.3)に示す。

(3.3)

A 昨日私が欠席したことに気づいた？ 実はね、 私はね、 朝早く起きて…

B うん うん うん

(3.3)のBの発話に3つの「うん」がある。その中で、1つ目の「うん」は相づちではないが、2つ目と3つ目の「うん」を相づちと見なす。その理由は、1つ目の「うん」は、話者Aの「昨日私が欠席したことに気づいた?」という質問に対する応答だからである。一方、後続する2つ目と3つ目の「うん」は、命題の真偽に対する判断ではなく話者Aが自分のエピソードを話している途中でBがその情報を受け入れた際に自然に発したものである。

これから本稿で言及する相づちは、(3.3)の2つ目と3つ目の「うん」のような発話である。

3.2.2. 本稿における相づちの分類：「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」

本稿では、相づちを「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」に分けて考察する。従来の研究では、相づちを相手に対する理解あるいは賛意と考えており、相づちの会話における肯定的な側面ばかりが強調されている。しかし、果たして相づちには、相手の発話に対する否定的な効果がないと言い切れるであろうか。

確かに会話する際に、相づちが完全に打たれない、あるいは非常に低い頻度で打たれる場合、相づちの受け手が「この人は私の話を聞いているのか？」という不安な気持ちを引き起こしてしまう可能性がある。適切なタイミングで一定の頻度で相づちが打たれれば、話し手は聞き手が自分の話を聞いている、あるいは賛成すると解釈でき、続けて発話することができる。本稿では、このような「理解」あるいは「賛成」といった語用的効果を帯びている相づちを「感じの良い相づち」と定義する。

さらに、本稿では「感じの悪い相づち」をも検討していく。「感じの悪い」という表現は、一般用語として使用される際には、「人に不快な印象を与える」という意味合いがあり、様々な場面で使用されているが、本稿における「感じの悪い相づち」は、従来の定義で言及されてきた「ここまで理解した、続きを言ってください」「円滑なコミュニケーションにつながっている」「会話の雰囲気をもっとよくする」といった積極的な側面とは反対の、つまり、「あなたが言っていることを実は理解していない」あるいは「あなたの意見に賛成しない」といった語用的効果に結びつく相づちである。話し手の発話に興味を示すために大げさな声質や身振りで相づちを打ち、「やりすぎ感」で不自然（Goffman(1967)による「不誠実（insincerity）」なイメージを与えてしまうような相づち、あるいは日本語学習者が日本語の待遇性を習得していない段階で目上の人に対して使う間違った相づちによる不快感は、一種の「感じの悪さ」と考えられるが、本稿の研究対象からは外れる。

3.2.3. 本稿の研究範囲

本稿では、現代日本語と現代中国語の天津方言の会話における相づちを研究対象とする。天津方言を対象とする理由は、第6章で提示するように、日本語と同様に、非常に高頻度で打たれるため、日本語の相づちとを比較すれば、現象の解明につながると考えたからである。

また、本稿では、特に日本語の「うん」「はい」と天津方言の「嗯」と「啊」に関して考

察を行う。これらの形式を取り上げるのは、従来の研究で、これらの形式が意味論的「意味」がないとされてきたため、相づちとして真剣に検討されなかったからである。また、考察する際に、相づちに限らず、これらの表現が感動詞としてどのような場面で発せられるか、どのような場面で発せられると不自然になるかという点にも注目する。というのは、ある表現が相づちとして発せられる場合も、その表現の感動詞の用法とは完全に切り離しきれないからである。

3.3. 本稿の枠組みと到達点

本稿では、第 2 章で提示された従来の研究で強調されている「相づちは理解あるいは賛意を意味する」「日本語社会において相づちは高頻度で打たれることが好まれる」「中国語社会において相づちは高頻度で打たれることが好まれない」「相づちは相手の発話の進行を促すためである」の 4 つの主張の限界を指摘したうえで、より相づち、さらにコミュニケーションの研究に便利な修正案を示す。図 3.1 に、本稿の考察の枠組みを示す。

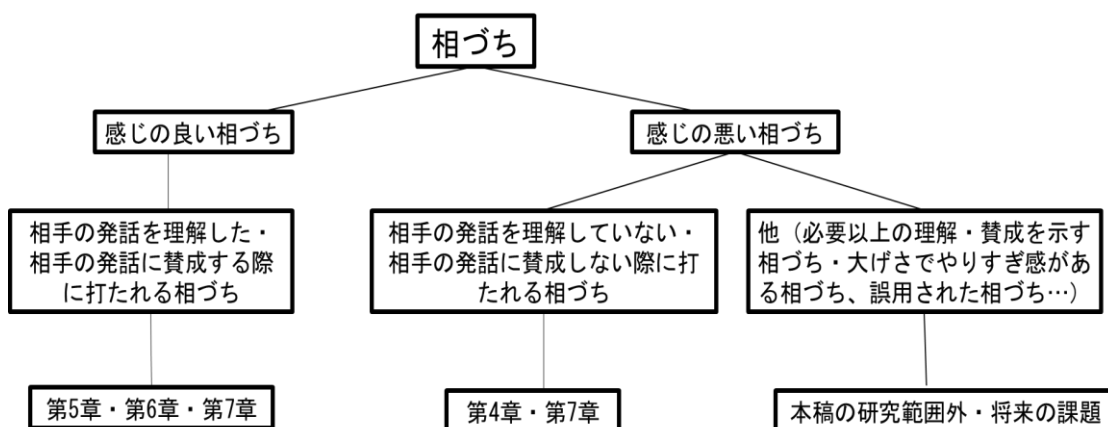


図 3.1 本稿の枠組み

図 3.1 のように、本稿では主として相手発話を理解したあるいは相手の発話に賛成する際に打たれる「感じの良い相づち」と、相手の発話を理解していない、あまり賛成しない際に打たれる「感じの悪い相づち」のあり方を解明する。第 5 章から第 7 章では現代日本語、現代中国語の天津方言における「感じの良い相づち」に関する記述および検証を行う。第 4 章と第 7 章は、この 2 つの言語社会における相づちの比較研究を行うことで、それぞれの言語社会の相づちの共通点と相違点、さらに「感じの悪い相づち」の現れ方について記述する。

本稿の独自性は、以下の 2 つである。

1 つは、従来の研究で言及、記述してこなかった「感じの悪い相づち」の存在を提示し、それと「感じの良い相づち」とはどのように異なっているかを解明する点である。

もう 1 つは、相づちを通言語的に考察する際にも、それぞれの言語において「感じの良い相づち」「感じの悪い相づち」はあるかどうか、あるとすればどのように現れるかといったことを明らかにする点である。

第4章 「相づちは理解あるいは賛意を意味する」に関する検討¹¹

本章では、相づちには「理解」「賛成」などの良い側面だけでなく、「理解していない」あるいは「賛成しない」といった否定的な語用的効果も帯びていることを提示したい。それを検証するために、実験心理学と会話分析の手法で確かめる。

第4.1節では、問題意識を述べ、日本語母語話者は相手の発話を理解していない、あるいは賛成しない際にも相づちを打つことがあるのだが、それらの場合に打たれる相づちのタイミングはそうではない場合に比べて遅いという仮説を立てる。

第4.2節から第4.4節までは実験とその結果を報告したうえで、会話における遅延した相づちを抽出し、それらの韻律と発せられる文脈を考察し、分類する。第4.5節では、非常に早いタイミングで打たれるが賛意を意味しない相づちについて検討する。第4.6節では日本語社会における相づちは必ずしも理解あるいは賛意を意味するとは限らず、「理解していない」「賛成しない」などの語用的効果も生じうるということを総合的に考察する。第4.7節で本章をまとめる。

本章では、従来の研究で強調されてきた相づちの「理解」「賛意」といった「感じの良い」側面の反面にある、「理解していない」「賛成しない」といった語用的効果を帯びている「感じの悪い相づち」の存在を提示し、そのあり方を解明していく。

4.1. 先行研究に対する問題意識

従来の研究では、相づちの良い側面に関しては数多くの研究で報告されている（例えば水谷 1984；杉戸 1989；堀口 1997 など）ため、相づちが多いほど、より良いコミュニケーションが達成できるという主張が安易に認められがちである。しかし、相づちは、果たして「理解」「賛成」だけを意味するのであろうか。

これまでの対照研究の結果を見ると、日本人は中国人や韓国人とは異なり、相手の意見にさほど賛成ではない場合でも頻繁に相づちを打つ傾向がある（李 2000；Endo2010）。しかし、相手の意見に賛成していない際の相づちは、賛成する際と必ずしも同じタイミングで発せられてはいない。Pomerantz (1984) は、英語母語話者は相手の先行発話に非選好的反応

¹¹ 本章は羅 (2016a) に基づいて作成したものである。

¹²をする際に、その反応が遅延する傾向があると述べている。従って、相手の発話を理解していない際、あるいは賛成しない際に日本人が相づちを打つ可能性は高いが、その際の相づちと、相手の意見に理解したとき、あるいは賛成する際の相づちのタイミングが異なる可能性があるかと推測できる。この仮説を確かめるために、実験心理学の手法で検証する。

4.2. 相手の発話に対する理解度と態度に関する実験

相手の発話に対する理解度と態度が異なる際に、相づちの打たれるタイミングに差があるかどうかを検証するために、実験を行った。実験は 2015 年 3 月～4 月に神戸大学国際文学研究科、工学研究科の研究室あるいは自習室で行った。被験者は 20 代～30 代の日本語母語話者計 16 名である。実験の方式は、いわゆる「刺激－反応」式であるが、研究の目的に応じて改善した部分もある。以下は、実験の刺激である。

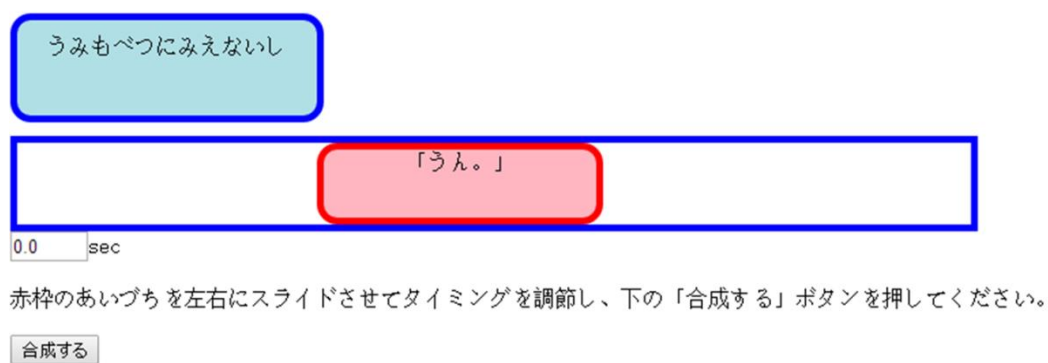


図 4.1 実験の被験者に呈示された、相づちのタイミング調節画面

(<http://www.speech-data.jp/timing/>)

図 4.1 は実験で被験者に呈示したパソコンの画面である。図で示しているように、画面には青色発話（普通の発話）と赤色発話（相づち）がある。青色発話の部分は固定されているが、赤色発話の部分はドラッグ操作で自由に移動させることができ、したがって青色発話とのタイミングが自由に調節できる。移動させた赤色発話は、左下の「合成する」ボタンを押すことによって試聴・確認ができる。最適と思われるタイミングができるまで被験者は調節を何度繰り返しても構わない。

¹² 相手の意見を否定する際や、相手の誘いを断る際の反応を指す。

課題としては、青色発話（話し手の発話）に対する理解度・態度に関して 4 つの状況を設定し、発せられる赤色発話（相づち）のタイミングを被験者に調節してもらった。話し手の発話に対する理解度や態度に関しては、図 4.2 に沿って設定した。

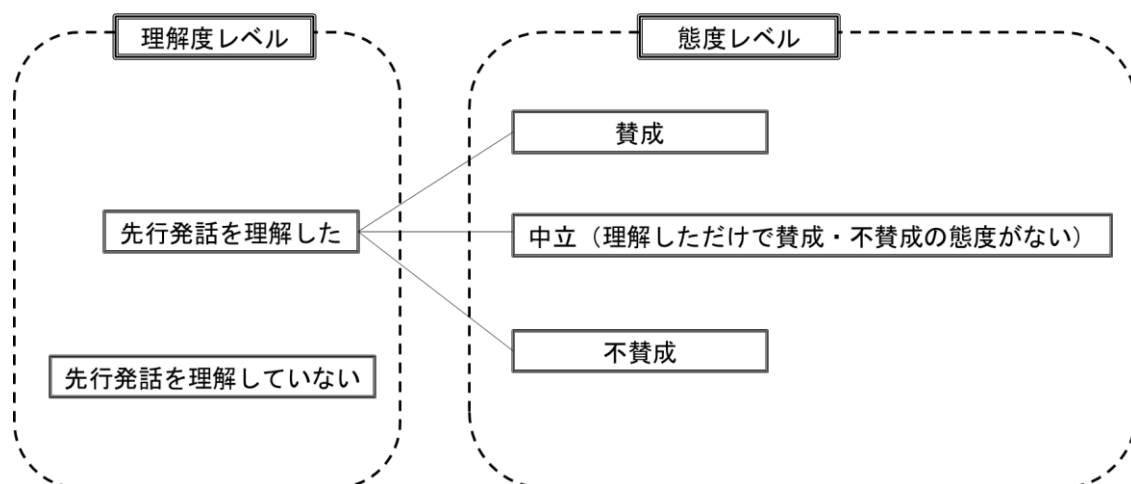


図 4.2 先行発話に対する理解度・態度の階層

人間は、相手の発話を聞く際に、まず理解度レベルにおいて大まかに「理解した」と「理解していない」といった 2 つの状況に分けられる。理解度レベルをクリアしない限り、態度レベルに進むことができず、理解度レベルにとどまる。理解度レベルをクリアすれば、相手の発話内容に対して「賛成」「中立」「賛成しない」といった 3 つの状況に分けられる。それに基づき、被験者に赤色発話（相づち）を調整してもらう際に、次の 4 つの状況に設定した。

- ①青色発話を理解し、さらにそれに賛成する状況（以下、「賛成」と呼ぶ）
- ②青色発話を良く理解したがそれに賛成・反対するきもちは特に沸かない状況（以下、「中立」と呼ぶ）
- ③青色発話を理解したが、あまり賛成できない状況（以下、「不賛成」と呼ぶ）
- ④青色発話を理解していない状況（以下、「不理解」と呼ぶ）

被験者にはこのような調節を、図 4.3 に挙げる 7 つの異なる発話ペアに対して行わせた。

TEST01	「うみもべつにみえないし」 「うん」
TEST02	「なんかねびょうぶみたいなので」 「うん」
TEST03	「とくにねやすみのひってね」 「うん」
TEST04	「なつやすみにきたときにね」 「うん」
TEST05	「すごいよこうこうぐらいからかみそめたりとか」 「うん」
TEST06	「わたしびびあんすうすきなんですよ」 「うん」
TEST07	「おねちゃんいまいちやったみたいやけど」 「うん」

図 4.3 実験の発話ペア

また、8 人の中国語母語話者に同様な指示をしたが、「理解していない」あるいは「賛成しない」際に相づちを打たないという理由で実験を断られた。

実験の結果に、「賛成」と「中立」の状況において、話し手の発話が終了する前に相づちが打たれることがあり、その場合、赤色発話は青色発話と重なるように調整される。その際、相づちは先行発話が終了する前に発せられるように調整されたため、話し手の発話と相づちの間合いは、負の数値になる。また、赤色発話と青色発話が重ならないように調整された際に、正の数値が出てくる。

t 検定や分散分析を行う際には、負の数値と正の数値を同時に処理することができない。従って、本稿ではデータを分析する際に相手の発話の終了する前に（赤色発話は青色発話と重なって）発せられる相づちを t 検定で、相手の発話の終了後に（赤色発話と青色発話が重ならない）発せられる相づちを分散分析で統計処理を行った。このようにすれば、統計処理を行う際に負の数値がなくなる。

相手の発話と重ならない場合において、一要因分散分析における多重比較を行ったところ、1%水準で主効果が有意である。「賛成」「不賛成」「不理解」の間に、また、「中立」「不賛成」「不理解」の間に有意差が見られた ($F(3,346)=87.67, p<.001$)。また、相手の発話と重なる場合 t 検定を行ったところ、「賛成」と「中立」の間に有意差が見られた ($t(94)=3.09, p<.01$)。

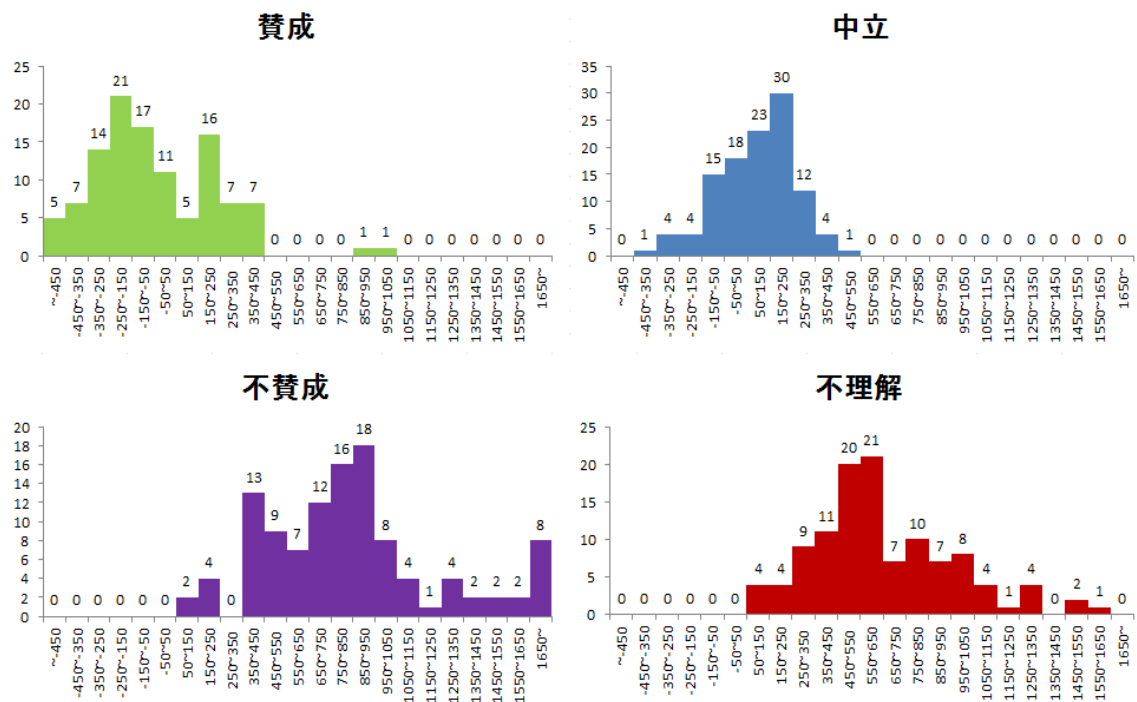


図 4.4 実験結果

図 4.4 は各理解度・態度において相づちの打たれるタイミングの区間とその頻度分布数を示している。横軸はタイミングの区間であり、縦軸はそれぞれのタイミングの区間内における相づちの分布数である。図 4.4 に示したように、相手の発話の終了時から 350ms 経過時点の前に打たれる相づちは、相手の発話に対して「中立」あるいは「賛成」の可能性が大きく、350ms 経過時点以降に打たれる相づちは「不理解」か「不賛成」に結び付く可能性が大きいという結果が出た。より分かりやすくするために実験の結果を図 4.5 にまとめた。

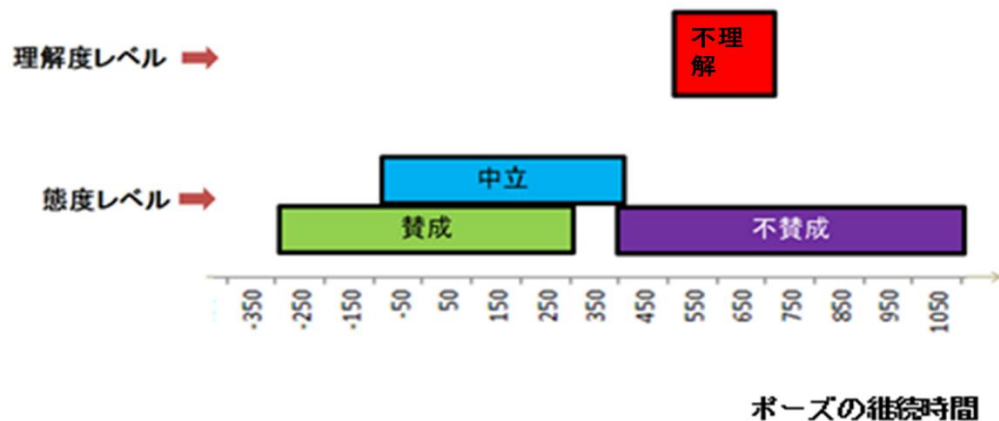


図 4.5 実験結果のまとめ

図 4.5 には、実験の結果をまとめたものである。理解度レベルをクリアしていない「不理解」場合では、相づちは相手の発話の終了時から 450ms から 650ms という区間に打たれ、理解したが相手の意見に賛成しない「不賛成」の場合では、相手の発話の終了時から 350ms から 1050ms の区間に打たれることが多い。また、態度レベルにおいて、理解しただけで、特に賛成・否定のない「中立」の態度の場合では、相手の発話の終了する前の 150ms から相手の発話の終了後の 350ms という区間、相手の意見に賛成する場合、相手の発話の終了する前の 350ms から相手の発話の終了後の 250ms という区間に打たれることが多い。このように、相手の意見を理解していない、あるいは相手の意見に賛成しない場合、相づちのタイミングはそうではない際に比べて遥かに遅れることが分かった。

但し、以上の実験には、次のような問題点が考えられる。まず、1 人の被験者に 4 つの状況における相づちのタイミングを全て調節させるという設定において、タスクの負担が大きすぎる恐れがある。また、全ての被験者は「中立」→「不理解」→「賛成」→「不賛成」という順番で調節したため、順番を変えれば、実験結果も変わる可能性がある。これらの問題を解決するために、追試を行った。

追試では、本実験と異なり、1 人の被験者は 4 つの状況における相づちのタイミングを全て調節するのではなく、ランダムに選ばれた 1 つの状況におけるタイミングだけを調節する。

被験者は 20 代から 30 代の日本語母語話者計 26 人である。追試と本実験の被験者は重なっていない。追試の結果を図 4.6 と図 4.7 に示す。

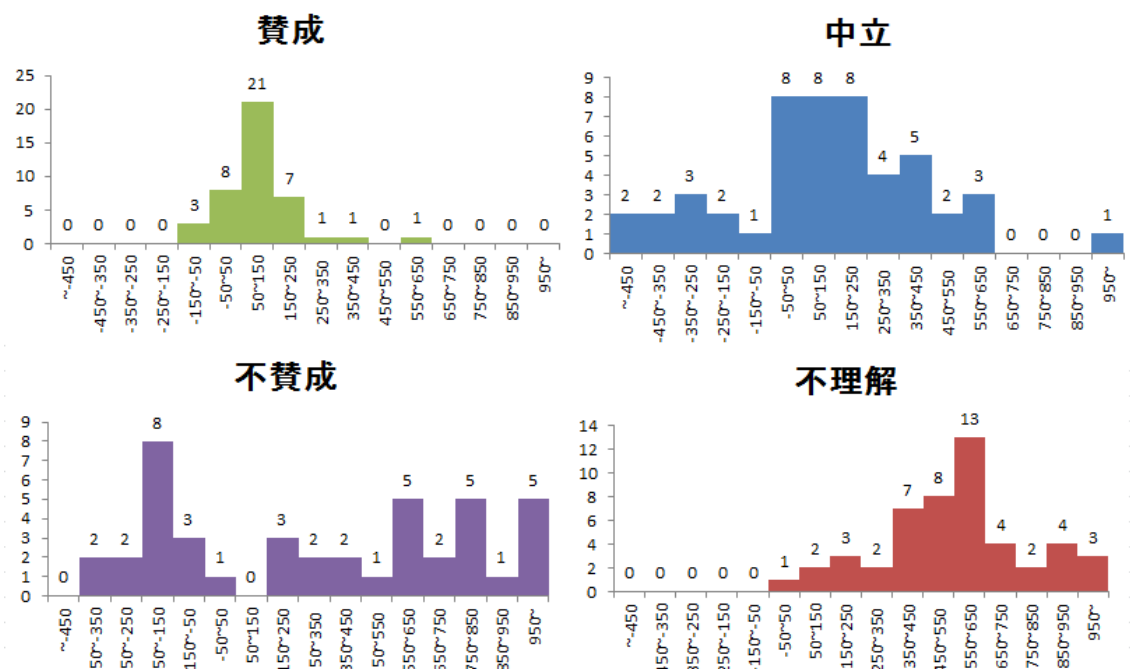


図 4.6 追試の結果

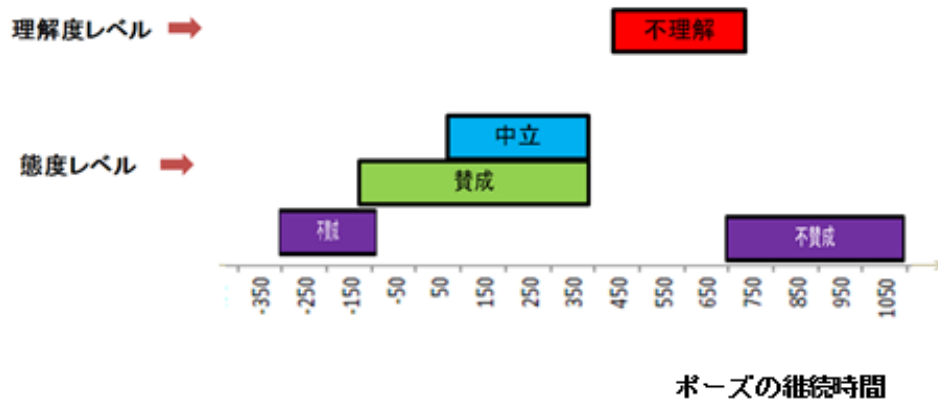


図 4.7 追試の結果のまとめ

図 4.6、図 4.7 も図 4.4、図 4.5 と同様、各理解度・態度において相づちの打たれるタイミングを示している。横軸はタイミングの区間であり、縦軸はそれぞれのタイミングの区間内における相づちの分布数である。図 4.7 にあるように、「中立」「不理解」「賛成」の 3 つの状況における相づちのタイミングは、本実験とほぼ同じ傾向が見られた。それに対して、「不賛成」の状況における相づちのタイミングは、本実験の結果との間に大きなずれが生じた。本実験において「不賛成」の状況における相づちのタイミングは、ほとんど 650ms から

1050ms という区間に調節されたが、追試ではそうではなく、非常に早いタイミングか、非常に遅いタイミングかという分極化した傾向が見られた。相手の発話に対する中立・賛成の相づちは早く打たれ（相手の発話の終了時から 350ms 経過時点の前）、不理解の相づちは遅く打たれる（相手の発話の終了時から 350ms 経過時点の後）と言えるが、不賛成の際の相づちは一定の傾向がなく、話者によって非常に早く打たれるか、遅く打たれるかのどちらになる。中立・理解していない・賛成の相づちのタイミングはある程度共通するが、賛成しない際の相づちは個人ごとに異なる。つまり非選好的な反応をする際に、Pomerantz (1984) が述べているように遅れて相づちを打つ話者もいれば、相手の発話が終わっていないうちに打つ話者もいる。

この章の続きは、第 4.3 節から第 4.4 節までは前者のような、「遅延した相づち」を詳細に考察する。後者のような非常に早いタイミングで打たれる相づちは、第 4.5 節で検討する。

4.3. 遅延した相づちの韻律パターン

前節では、実験で相手を理解していない、あるいは相手の発話に賛成しない際に相手の発話終了後の 350ms 以降に発せられる可能性が大きいという結論にたどりついたことを述べた。本節では、KOBE Crest FLASH というコーパスから、「遅延した相づち」を抽出し、それぞれの韻律パターンを分析する。

筆者は KOBE Crest FLASH を用いてダウンロード可能な会話の中から、遅延した相づちを 27 例発見した。発見した相づちの形式は全て「うん」である。音声解析ソフト Praat を使用してその中の 17 例において F0 曲線が抽出できた。それらを分析した結果、主に「下降調」「緩やかな下降調」「平坦調」の 3 種類の韻律パターンが見られた。

下降調の「うん」とは、継続時間が短く（100ms から 300ms 前後）、下降する前に全く上昇が見えないものである。この類の「うん」の F0 曲線は、以下の図 4.8 で示したものである。

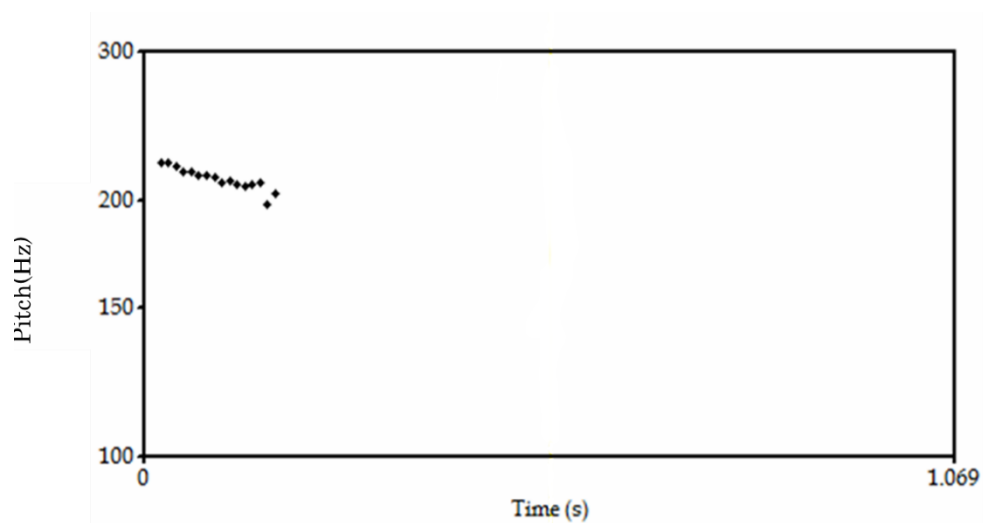


図 4.8 下降調の「うん」の F0 曲線

緩やかな下降調の「うん」は、下降調の「うん」より継続時間が長く（500ms 以上）、下降する前に微かに上昇するものである。図 4.9 は、このような「うん」の F0 曲線を示している。

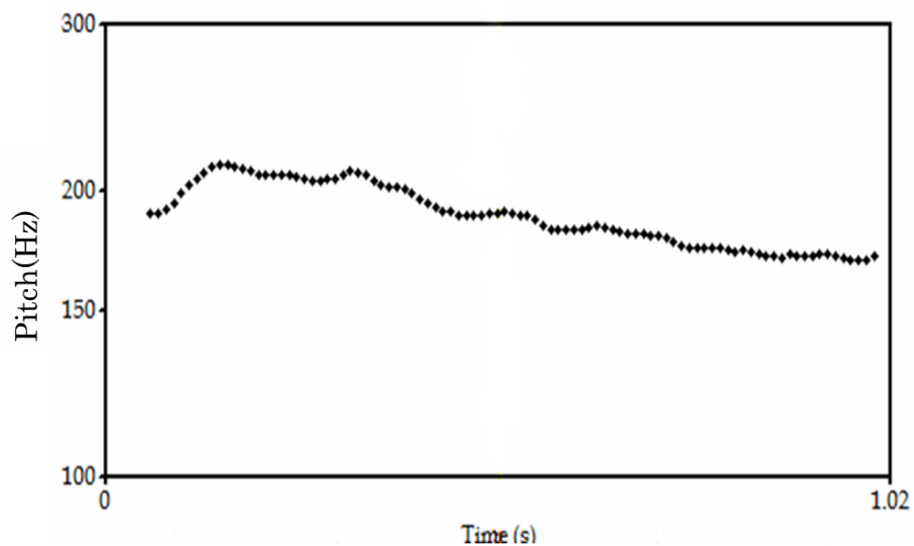


図 4.9 緩やかな下降調の「うん」の F0 曲線

最後に、平坦調の「うん」は F0 曲線が平らかで、全体的な継続時間が長いという特徴がある。図 4.10 は、平坦調「うん」の F0 曲線を示している。

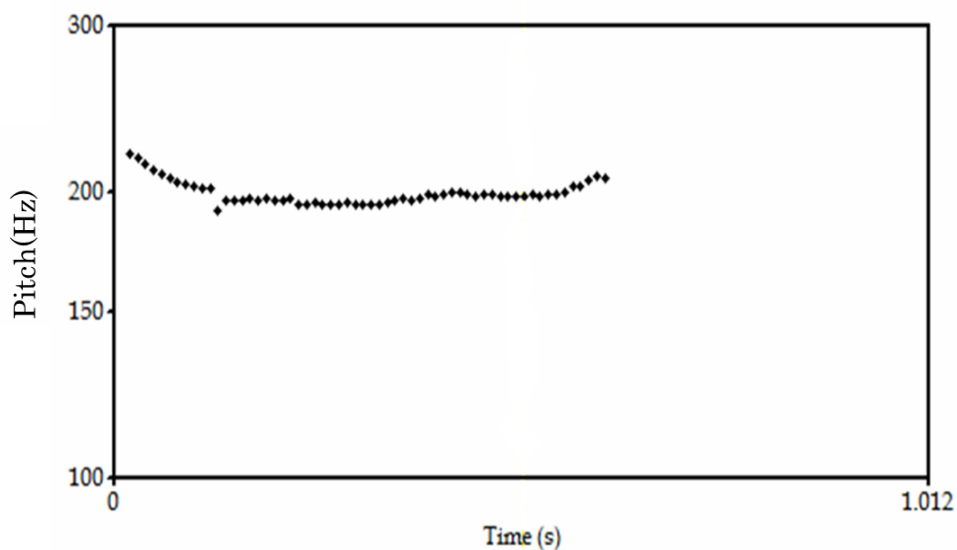


図 4.10 平坦調の「うん」の F0 曲線

各パターンの「うん」の出現頻度に関して、下降調「うん」と平坦調「うん」はそれぞれ 7 つあり、緩やかな下降調は 3 つある。これらの韻律パターンの「うん」の発せられる文脈を次節で細かく紹介する。

4.4. 各韻律パターンの遅延した相づちの文脈

遅延した相づちが発せられる文脈は、主に 3 つの種類がある。それぞれ「新規話題・新たな概念が提示された際」「相手の発話が 1 つの見解として完結した際」「相手の発話に問題が生じた際」である。以下、それぞれの文脈においてどのような韻律パターンの遅延した相づちが打たれるかを記述する。

4.4.1. 「新規話題・新たな概念が提示された際」に現れた遅延した相づち

会話において話し手と聞き手は 1 つの話題が終了した後、新たな話題が提示されることが常にある。また、言及されるのは、必ずしもお互いの既知の事実あるいは概念とは限らない。新たな話題が話し手によって提示された際に、聞き手はなぜ話し手が急に話題を転換したのかという命題レベルで理解していない際に、遅延した相づちが現れることが多い。また、話し手が新たな概念を提示した際に、聞き手がその概念を染み込む時間がかかるため、相づちを遅れて打つこともある。

この場合の遅延した相づちは、(4.1)の 11 行目の S の発話のような、下降調の韻律パター

ンが圧倒的に多い。

(4.1) 休みの日

1. A たぶん(.)わたし家でメール見れたら、ずっと家におるんちゃうか(h)な(h)は.
2. S ははははは
3. A うん(.)やっぱり(.)学校(.)あの一日一回見なかったら、うん(.)う(.)不安じゃないですか. なんか不[安というか, なん]かもし緊急のメール,
4. S [そうやねえ]
5. S うん[うんうん]
6. A [来てたらと]思うと. (1.2)そうそう(.)だから学校.
7. S 偉いねえ. でもち[ゃん]と朝来とんね.
8. A [う]
- 9.→A 特にね, 休みの日ってね,
10. (1.0)
- 11.→S うん
12. A こう七時ぐらいになったら、もう真っ暗で誰もいないじゃないですか,
13. S うん[うん]
14. A [誰もいない] ことない[けど, めっちゃ]人少ないじゃ[ないですか],
15. S [うんうん] [夜な:] (.)うん
16. A あれがね, い(h)や(h)で(h).
17. S 怖い[な:].
18. A [いやで]っていうか, て(.)ちょっと気味悪いですよ.

(4.1)では2つの話題が見られる。8行目以前では話者Sと話者Aは「学校でしかメールをチェックできないから毎日登校しなければ不安になる」ことについて話している。その後の9行目以降は、「休みの日の夜学校に来たら暗くて気味が悪い」という話題に移行した。遅延した相づちは、11行目のSの先行発話の終了時から1秒が経った後に打たれた相づちである。8行目のA以前に続いた話題は「Aがメールをチェックするために毎日学校に来ている」であったが、7行目のSの「偉いねえ. でもちゃんと朝来とんね」という評価の後9行目のAがいきなり「特にね休みの日ってね」という発話で新たな話題を開始した。そこ

で話者 S が遅延した相づちを発しており、この新たな話題の提示についていけない様子がうかがえる。この場面における遅延した相づちは、「なぜいきなり話題を転換したか」という命題レベルで相手の発話を理解していないことにつながると考えられる。一部の場面では、難しい概念が提示された際にも同様な遅延した相づちが現れる。その際の相づちは、提示された概念そのものが良く理解できず、概念レベルで相手の発話を理解していないと言える。ただ、この場合の遅延した相づちは、命題レベルと概念レベルのどちらに関わるかははっきり区分できない場合が多いので、本稿ではその区分をせず、Chafe(1994)の理論で説明を試みる。

Chafe(1994)は人間の意識の中にある情報を活性的・半活性的・非活性的の3つの状態に分類している。活性的な状態の情報は、当該の瞬間において話し手あるいは聞き手の意識の焦点となっている少量の情報である。非活性的な情報は長期的な記憶で、利用可能な大量の情報だが、その時点では焦点化されていない。両者の中間にある半活性的な情報は、さほど焦点化されていないが、非活性的な情報に比べて利用しやすいものであると定義されている。そして発話によって活性的情報に置かれる情報を新情報、発話時点で既に意識の焦点にある情報を旧情報としている。上記の例をみると、「特にね、休みの日ってね、」という発話が、それまで言及されていない話題で、聞き手の S にとって予測できなかった新情報であり、焦点化するのに時間がかかったため、相づちが遅延したのである。

4.4.2. 「相手の発話が1つの見解として完結した際」に現れる遅延した相づち

話し手がしばらく発話を続け、自分自身の意見について述べ終えた際に、聞き手による遅延した相づちがたまに打たれる。その際の遅延した相づちの韻律は、平坦調のものがほとんどであり、場合によって下降調のものもある。(4.2)の断片には、平坦調の「う：：ん」がある。

(4.2) アイデンティティ

1. U 実は問題で(.)その(.)その個人個人によってその文化を受け入れようと思ったら、そういうところまで、ウキ(.)あの(.)自分の.h 母国文化では、マイナ(.)逆にマイナスだと思っても、
2. M うん
3. U 生きてくためだ(.)とか(.)その(.)自分がここで(.)日本でこういうことをするためだっ

- ていうふうに考えて.h 受けいる方もいらっしゃるだろう[し],
4. M [う]ん
5. U そうじゃない. (0.4) や(.)いくら日本語しゃべっていても, 自分のアイデンティティは, 自分の母国文化だからっ[て言うかたちで],
6. M [うん]
7. M ふ : : ん
8. U [いろんな(.)いろんな表現出てくるんですよね. (0.5) 同じ中国人であっても, 韓国[人であっても]
9. M→ [う : : ん](.) なん[もね(.)うち]ー
10. U [そこのところの](.)[日本人]の
11. M [う : : ん]
12. U その捕らえ方の(.)わ(.)枠ぐみを少し広げていくっていうふうな.
13. (1.0)
- 14.→M う : : ん

断片(4.2)においては、話し手 U は 1 行目から 12 行目まで留学生のアイデンティティをどのように認識し、さらに表出するかについて自身の考え方を述べていた。U の話が 12 行目で 1 つの見解としてまとまり、その後 1 秒が経ってはじめて聞き手の M がやや継続時間が長い平坦調の「う : : ん」を打っていた。会話の流れを見れば、話者 M は話者 U が発話している途中、「うん」という形式の相づちを打ち続けた。9 行目で話者 M は「なんもね(.)うち」と発話権を取ろうとしていたのだが、10 行目で U によって打ち切れ、自らの意見を述べるのをやめた。

グリーンバーグ (2010) は、会話にある各韻律の「うん」とそれに後続する同一話者の発話を抽出し、被験者の聴覚印象を分析している。分析の結果、下降調ではない「うん」の聴覚印象は、「疑念」あるいは「否定」に結び付きやすい。また、継続時間が長いほど、このような傾向が強くなると報告されている。

従って、(4.2)の 14 行目の M の遅延した平坦調の「う : : ん」は、話者 M が話者 U の意見に少なくとも一部に対して疑念あるいは否定の印象を持っていることをほのめかす。つまり、反論のレベルまでは達していないが、完全に賛成するとも言えない状態である。

下降調の遅延した相づちを、(4.3)に示す。

(4.3) 髪染め

1. S すごいよ、高校ぐらいから髪染めたりとか。
2.→(1.9)
3.→A うん
4.→S [ああそんなすごくないか、A ちゃんにとった[らはははははは
5.→A [はははははははまあまあ、まあまあ。
6.→S なんかでも一回緑とか赤[にしたこ]と[あって、
7. A [あ:] [そらすごいですね:。
8.→S なんか美容師に、今も美容師の見習いの[仕事し]てんねんけど、
9. A [うん]
10.→S 美容師なりたかったみたい[で:。
11. A [うん]

(4.3)で話者 S は話者 A に対して自分の知り合いのことについて話している。S が 1 行目でその人に関して「あの人すごいよ、高校ぐらいから髪を染めるんだ」と自らの観点を述べた後、話者 A が「うん」と相づちを打つ前に 1.9 秒の無声空間が生じた。その後 3 行目で A が「うん」という相づちを打ったのだが、4 行目で S が「やはりあなたにとって、高校時代から髪を染めることは大したことではないよね」と相手の意見を確かめ、5 行目で A の承認を得たのち、「実はあの人には緑や赤などのきつい色に染めた」(6 行目)、「あの人美容師になりたいみたい」(8 行目、10 行目)などの説明、解釈を付け加えたことで、A の理解「そらすごいですね」を得た。この断片から推測できるのは、もし S が最初に「(あの人) すごいよ、高校ぐらいから髪染めたりとか」と発した後 A が間もなく「うん」の相づちを打てば、その後のような確認、説明の必要はなくなったのであろう。つまり、一部の場面において、相づちが遅れて発せられれば、相手の発話の進行を変える可能性があるということである。

(4.2)、(4.3)における遅延した相づちは Pomerantz(1984)の「非選好的応答が遅れる傾向がある」という主張と関わっていると考えられる。一部の話題において、話し手と聞き手の見方が必ずしも一致するとは限らない。そのような場合聞き手が、日本語社会において相手の発話に対して何も反応しなかったり、間を置かずに反論したりすれば、その場の雰囲気

壊してしまう可能性が大きい。このような理由で遅延した相づちが発せられると推察される。

4.4.3. 「相手の発話に問題が生じた際」に現れる遅延した相づち

「相手の発話に問題が生じる」こととは、話し手の発話に何らかの形で問題が生じ、すでに話したことをもう一度繰り返すことや、急に発話を止めたり、独り言を言ったりすることを指す。これらの状況では、突然会話の秩序が乱されることによって相づちのタイミングが遅れる。この小節では、3つの状況における遅延した相づちを検討する。

話し手が話したことをもう一度繰り返した際に現れる遅延した相づちについて述べる。例として(4.4)の13Uを挙げる。13Uの相づちの韻律パターンは下降調である。

(4.4) 読書会

1. S 論文やったまだいいけど、本ってなんか一冊読みきことはあんまない[な:]。
2. A [論] 文集があつたらいいですね。ほかい(.)いろんな人が[書いてるやつやった]ら、
3. S [そうやね]。
4. S なんか、短編集って[感じやな(.)あ(h)ふ(h)]
5. A [うんうんうん]
6. (2.0)
- 7.→S [[また読書会しんとあかんなあ]
8. A [[日本語の小説も読まへんからな]
- 9.→A うん
10. (0.4)
- 11.→S 今度(.)読書会しんとあかんねえ、冬休みぐらいに。
12. (1.7)
- 13.→A うん
14. S 前(.)夏やったの(.)どうやった(.)よかった？
15. A よかったですよ。

この断片で話者 S と話者 A が読書に関する話をしている。6行目の2秒間の沈黙まで2

人が「論文集は本より読みやすい」という考え方で一致していた。沈黙の後、SとAが7行目、8行目で異なる内容の発話をしてさらにほとんどの部分が重なっている。話者Sはそれまでの話題を続けて「また読書会しんとあかなあ」という発話をしたが、話者Aは新しい話題「日本語の小説も読まへんからな」と発した。その後、9行目でAの「うん」の後会話が一時的に停止し、11行目でSは7行目の先行発話を繰り返し、会話を再開したのだが、その繰り返しの発話の終了後、1.7秒経ってはじめて下降調の相づちAの「うん」が発せられた（13行目）。

次に、話し手が独り言を言った後の相づちについて述べる。この相づちの例を(4.5)に示す。相づちの韻律は、平坦調である。

(4.5) 山形のそば

1. O あの辺(.)そばどころでもあるでしょ.
2. K 山形のそばは[おいし]いですね.
3. O [ね]
4. O そば食べて,
5. (1.1)
6. K う : ん (力み声で読み取れなかった)
7. (1.3)
8. O また(.)食べ方がすごいね, あの人たちのそばの食べ[方].
9. K [あ](.)[そう]
10. →O [そう(.)なんか]ね(0.5)その(.)有名なところらしいんだけどね(0.6) や(.)山形市からなんか(.)ちょっと電車で, .hなんて駅だったかな,
11. (0.8)
12. →K う : ん
13. O で(.)そこを降りてね, だ(.)く(.)ま(.)山形の(.)し(.)から, ふたつみつつ乗るから,
14. O [[ま(.)郊]外っていうか(.)山形市じゃないんだよ.
15. K [[うん]
16. K うん

この断片では、話者 O と話者 K が山形のそばとその食べ方について話している。10 行目の前の部分では、話者 O が「山形の人のおそばの食べ方がすごい」という話をした。話者 K はその話を聞き、新情報として扱って「あ(.)そう」と発した。その後 O で「有名なところ」について話そうとしていた (10 行目) のだが、話者 O がその地名を忘れてしまい、「なんて駅だったかな」という独り言を発した。それに対して 0.8 秒経って話者 K から平坦調の「うん」が発せられた。

最後に相手の発話が途中で止まった際の遅延した相づちについて述べる。この相づちは下降調と緩やかな下降調の 2 種類の韻律がある。例を(4.6)に示す。

(4.6) 国際学会

1. A で(.)二月(.)ふん(.)そやね. h[二月]
2. Y [去年] 行ったんも二月やった[な].
3. A [そ], 二月のむっちゃ終わ
りぐらいかな(.)でもしんどいかな(.)ほんなときに行ったら.
4. Y 二[月]いいやん.
5. A [ん]
6. Y 休[みや].
7. A [うん](1.0)お :
8. Y ちょうどいいんちゃう. し(.)四[月入ってか]らよう[行かんと]
9. A [学会が] [学会] が二月の真ん中か.
10. Y なんの学[会]?
11. →A [終わりに]あるて, ここのクレストの国際学会.
12. Y はあ
13. →A それが終わってから,
14. (1.0)
15. →Y うん
16. (0.6)
17. A 行きたいな.
18. Y ううん(.)いいんちゃう(1.3) 春休み一番行きやすいやん.

(4.6)で話者 A と話者 Y が「2 月の学会に参加しやすいかどうか」という問題について話している。話者 A が「2 月は春休み中だから、学会に参加するのはしんどい」と言っている。それに対して話者 Y が「4 月になると学会が多く、2 月中に行かないと」と主張している。その後 A で「国際学会」について言及され (11 行目)、話者 Y の相づち「はあ」の後、話者 A が「それが終わってから」という発話をしていた。それに対して 1 秒の沈黙の後、下降調の相づち「うん」が打たれた。A の「それ」は「国際学会」のことを指しており (13 行目)、新規話題や新たな概念ではない。だがその後 A の発話が一時的に止まり、話者 Y による遅延した相づちは、この後現れた。

これらの会話場面は、いずれも新規話題や新たな情報は言及されておらず、話者のお互いの見解もまとまっていない。また、いずれの場合においても話し手の発話途中に問題が生じている。ここで言う問題とは、(4.4)ではすでに一度話した内容を繰り返したこと、(4.5)で駅の名前を忘れてしまい、独り言になったこと、(4.6)でさほど有標ではない内容の発話が一時的に止まったことである。これらの場面に現れる遅延した相づちに「先行発話の内容を理解していない」または、「先行発話に賛成しない」というような語用的効果があるとは考えられない。むしろ話し手の自己修復 (self-repair) を待っていると推測できる。このような相づちは、相手の発話に対する理解度や態度というレベルの問題ではなく、単に自身がその場に存在することを相手に提示している可能性が大きい。従って、この際に遅延した相づちの語用的効果は、「後続発話に対する催促」や「念押し」といった中立的なものだという考えが適切であろう。

4.5. 非常に早いタイミングで打たれる相づち

第 4.3 節と第 4.4 節で、遅延した相づちの現れる文脈と語用的効果について分析した。一方、第 4.2 節の実験結果から、相手の発話に賛成しない際に、非常に早いタイミングで相づちを打つ被験者もいることが分かった。このような非常に早いタイミングで発せられる相づちは、どのようなものであろう。

富樫 (2002) では、日本語母語話者は相手の自慢話を何度も聞いて、これ以上聞きたくない場合には、次のように相づちを打つと指摘されている。

(4.7) 相手の発話を早く終わらせたい際の相づち

A : 私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…

B: はい はい はいはい はい

このような「はい」は、「あなたが言っていることは分かっている」という会話に対する抵抗感をあからさまにし、「食い気味」でこれ以上聞きたくないという姿勢が窺える。また、このような相づちは話し手の発話が始まって間もなく打たれる非常に早いタイミングの相づちであり、第 4.2 節の実験で明らかにした「理解はしたが、賛成しない」という場面で打たれるものにあたると考えられる。

また、(4.7)の「はい」は、相手発話に対する理解を示しているが、「感じの良い相づち」とは言えない。富樫 (2002) によれば、このような「はい」は韻律的に非常に特徴的である。

「はい」は 1 回で発せられた際に継続時間が短く、イントネーションが平板である。「はいはい」のように 2 回繰り返して発せられる際に、後の「はい」の方が、ピッチの開始点が高く、富樫 (2002) では「低い山→高い山」のイントネーションパターンと呼ばれている。このような相づちは、「賛意を意味する」とは考えられないため、「感じの悪い相づち」と言える。

では、相手の発話に賛成しない際に、遅延した相づちと非常に早いタイミングで打たれる相づちは、どのように異なっているのでしょうか。ここでは、相手の発話に対する「否定」のレベルの違いと推測する。前者の遅延した相づちは、まさに Pomerance(1984)と同様な傾向で、相手の言っている内容、意見にあまり賛成できない際に、「非選好の反応」(非否定的な応答詞「うん」) をするのに抵抗感を覚える理由で遅れて発せられる。一方、後者は、「もうあなたの言っていることは分かっている。でも賛成できないからここまでにしよう」という感覚で発せられるのではないかと推測される。つまり、この 2 種類の相づちとも、相手の意見に賛成しない際に打たれるが、前者は、相手の発話の内容レベルでの否定であるが、後者は、相手の発話の言語行動レベルでの否定だと考えられる。

では、このような非常に早いタイミングで打たれる「賛意を意味しない」相づちは現代日本語社会に特有のものであろうか。それとも、他の言語にも存在するものであろうか。この問題を第 7 章で、日本語と同様に、相づちの頻度が非常に高い中国語の天津方言を対象として検証する。

4.6. 考察

4.2 節から 4.5 節では、相手の先行発話に対する理解度・態度が異なる際に、相づちのタ

イミングと韻律がどのように変化するかについて実験心理学と会話分析の方法で検討した。実験の結果から、日本語母語話者は相手の先行発話をあまり理解していない、あるいは相手の発話に賛成しない際にも相づちを打つことがあるが、その際に相づちの打たれるタイミングは遅くなるか、非常に早くなることが分かった。

また、遅延した相づちの韻律と打たれる文脈を分析することで、以下のことが明らかになった。一部の文脈（話し手の発話に問題が生じた際）における遅延した相づちには「理解していない」「賛成しない」といった否定的な語用的効果がない可能性もある。一方、「新規話題・新たな概念が提示された際」において「理解していない」、「相手の発話が1つの見解として完結した際」において「賛成しない」という印象属性が結びついている。

相手の発話に賛成しない際に、非常に早いタイミングで相づちを打つ被験者もいる。分析の結果、相手の発話を言語行動レベルで否定する場合は、このような相づちが打たれる。

このような結果から、相づちは必ずしも理解・賛成につながるとは限らないことが分かった。形式的に肯定応答する際に用いられる「うん」「はい」が発せられても、必ずしもプラスの効果が生じないのである。

先行研究および本稿における調査の結果から、韓国語母語話者、中国語母語話者は相手の発話を理解していないあるいは相手の発話に賛成にしない際に相づちを打たなくなるという傾向があり、一方、日本人は理解していない、賛成しない際にも相づちを打ち、その際のタイミングと韻律は理解した際、賛成する際と顕著に異なっていることが分かった。これらの相づちは、肯定応答する際の感動詞と同様の形式を持っているのだが、実際の会話で生じる語用的効果は、肯定ではなく、むしろ弱い否定である。従って、遅延した相づちの受け手は、必ずしも自らの発話を続けられるのではなく、例(4.3)のように、自分の意見の説明を加え、修復 (repair) を行うこともみられる。このような相づちは「理解」「賛成」といった語用的効果とは無縁で、本稿の第3章の基準で見れば「感じの悪い相づち」の類に入るべきである。

4.7. まとめ

本章では、相づちには「理解・賛意を意味する」ものだけでなく、発せられるタイミング、韻律パターン、文脈によって、「理解していない」「賛成しない」といったマイナスのものも存在することを明らかにした。このような相づちは、「感じの悪い相づち」という類に入れるべきである。

では、これらの「感じの悪い相づち」を除いていけば、相づちは「相手の発話の進行を促すためのもの」と言えるのであろうか。第7章では、現代日本語の「うん」と「はい」、現代中国語の天津方言の「嗯」と「啊」を比較することでこの問題を解明していく。

第5章 「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」に関する検討¹³

本章では、「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」という見方について検討する。前章では、相づちは必ずしも「理解」や「賛意」を意味する「感じの良いもの」に限らず、「理解していない」あるいは「賛成しない」といったマイナスの印象を招くものも存在することを提示した。本章と次章は、相づちの頻度について検討していく。

これまで数多くの研究で、日本語社会において相づちの頻度が高いということが報告されている。このことから、日本語学習者の日本語能力を測定する際に、相づちの使用の頻繁さを基準の1つになったという報告がある（大河原 1989）。しかし、このような考えは、果たして限界がないのであろうか。本章では、相づちの頻度は話し手の発話量と発話速度の2つの要素に影響されているということを証明することにより、「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」ということは無条件に成立するとは限らないことを示す。

第5.1節では、先行研究の問題点をまとめ、研究目的を述べる。第5.2節と第5.3節では、相づちの頻度と相手の発話速度に関する実験と会話データの観察の結果を示す。

5.1. 問題提起

これまで数多くの研究で、日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれるということが報告されている。このことから、日本語学習者の日本語能力を測定する際に、相づちの使用の頻繁さが基準の1つになったという報告がある（大河原 1989）。しかし、日本語母語話者は高頻度で相づちを打つということは果たして限界がないのであろうか。本章では、この問題について検討する。

従来の研究では、相づちの頻度を算出するには、主に2つの方法が使われている。1つはある時間単位での相づちの打たれる回数を算出するという方法である（例えば小宮 1986；水谷 1988）。もう1つはメイナード（1993）で提示された1つのPPUという発話単位で打たれる相づちの回数を算出する方法である。PPU(Pause-bounded Phrasal Unit)とは、話し手の発話において、ポーズによって区切られる語句のことを指し、メイナード（1993）に

¹³ 本章は、羅（2016a）に基づいて作成したものである。

よれば、PPU 末付近で相づちが打たれやすいという。後者の算出方法は、話し手の発話速度が異なっているという問題を避けることができ、話し手の発話量に焦点を当てるため、より信頼性が高いと評価されている。しかし、この方法は、果たして本当に発話速度の問題を避けられたのであろうか。

メイナード (1993) の方法を採用する場合、話し手の発話速度が遅いほど、単位時間内の PPU の数は多くなりがちだと考えられる。たとえば早口に「それで田中さんと山田さんが相談して一緒にお金を出すことになって、」と言う場合と、ゆっくり「それで、田中さんと、山田さんが、相談して、一緒に、お金を、出すことに、なって、」と発音する場合を比べると、PPU の個数は後者の方が遙かに多く、その差を覆すほどの早口は通常生じない。以上のことから、発話の速度が遅いほど、その発話に対する相づちの量は増える傾向があるのではないかとも思われる。だが、これは本当に正しいのであろうか。反対に、相手発話が非常に速い場合、相づちを打つことがためらわれ、頻度が低くなる可能性があると思われるが、このことはこれまで言及・検証されていない。

相づちの頻度と話し手の発話速度の関係する研究は、現在のところ、中里 (2002) 以外にほぼ見当たらない。中里 (2002) では、聞き手が意図的により早く（不自然な程ではない）相づちを打つ際に、話し手の後続発話の発話速度が上がる傾向が見られた。しかし、話し手の発話速度が如何に相づちに影響するかという点に関しては未だに不明である。本章では、相づちの頻度が相手の発話速度に影響されるかどうかについて実験で確かめる。

5.2. 相づちの頻度と相手の発話速度に関する実験

筆者は、相手の発話速度が非常に速い場合と非常に遅い場合について、相づちの打たれやすさを調べる実験を行った。

実験では、同じ内容で異なる速度の 3 つの発話を被験者に聞かせ、それぞれの発話中に相づちが打たれる可能性・必要性があるかどうかを判断させた。

実験刺激に用いた発話は「海も別に見えないし、住宅街やし、学生もいっぱい通るしね」である。この発話はネット上で無料公開されている文字・時間情報付きの自然会話音声データベース KOBE Crest FLASH (<http://www.speech-data.jp/taaba/kobedata/>) 内に実際に存在する。この発話を選んだ理由は、理解しにくい表現と話者の価値判断を含んでいないことになる。

この発話を日本語母語話者 1 名（女性）に「早口」「普通」「非常に遅い速度」の 3 つの速

度で自然発話のように明るい口調で読んでもらった。音声データベースをそのまま使わず、同じセリフの読み上げ音声を使用した理由は、データベースの音声を速度調整すると、音声が非常に不自然になったということである。読み上げ文の発話速度に関して、「早口」は 9.9 モーラ/s、「普通」は 7.4 モーラ/s、「非常に遅い速度」は 4.2 モーラ/s である。また、ポーズの長さという変数をコントロールするため、「普通」に沿い、各々のポーズの長さを一律に発話長全体の 9% に調整していた。

3 つの発話の呈示順序はランダムとした。最初の教示は「この発話に対して相づちを打つと、発話のペースを乱し、邪魔になるでしょうか」とし、作成した音声刺激を被験者に一度聞かせた。このように、その発話の継続時間内に相づちの出現が可能かどうかを判断してもらった。被験者が「邪魔になる」という判断をした場合そのまま次の刺激を聞かせ、被験者が「邪魔にならない」と回答すれば再度発話の音声を流し、それと同時に図 5.1 のような発話内容のローマ字（音声分析ソフト wavesurfer-1.8.8p4-win-i386 を用いて作成したもの）を被験者に呈示し、被験者に「相づちが打たれる時点」を選択させた（複数選択可）。

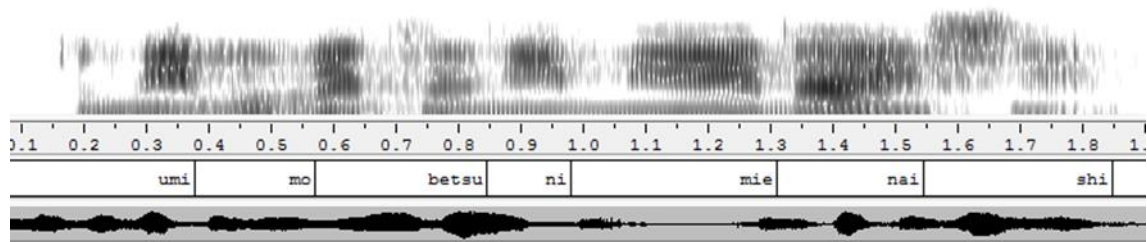


図 5.1 被験者に呈示した視覚刺激

被験者は 20 代から 30 代の日本語母語話者計 20 人である。実験の結果を図 5.2 に示す。図 5.2 の縦軸は、被験者が答えた、各発話における相づちの挿入可能箇所の総数である。

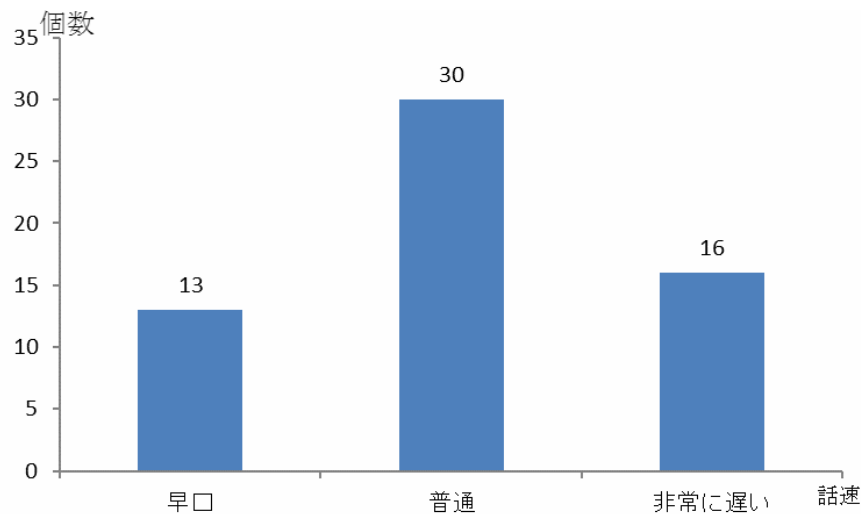


図 5.2 実験の結果

実験の結果は、発話速度が「普通」の場合（平均発話速度¹⁴が 7.4 モーラ/s の場合）相づちが最も打たれやすく、相手発話速度が非常に早い場合（9.9 モーラ/s）も、非常に遅い場合（4.2 モーラ/s）も相づちは打たれにくいというものであった。

しかし、この実験に問題がないわけではない。なぜかという、実験で使用した刺激は、複数の節を含む発話であり、「発話中のポーズの長さをどう設定するか」という問題が避けられないからである。実験を行った際、筆者はポーズの長さという変数をコントロールするため、各々のポーズの長さを一律に発話長全体の 9% に調整していたが、それでも実験の結果がポーズの長さに影響されていた可能性がある。なぜかという、ポーズの長さが発話長全体の 9% 以外である場合にも実験と同様の結果になるという保証はないからである。より正確な結果を得るために改めて追試を行った。

追試で使用した刺激は、実験で使用した発話を改善したものである。追試では、発話刺激を複数の節を含む文ではなく、途中にポーズの無い単一の節とした。より具体的には、実験で使用した「海も別に見えないし、住宅街やし、学生もいっぱい通るしね」という発話の中から文頭の節「海も別に見えないし」を選び、発話刺激とした。その上で、この節を「早口」「普通」「非常に遅い」という 3 つの速度で発した発話刺激を用意した。発話の速度は、「早口」が 8.9 モーラ/s¹⁵、「普通」が 6.5 モーラ/s、「非常に遅い」が 3.9 モーラ/s であり、発話

¹⁴ 平均発話速度の算出法は杉藤（1999）にならい、「ポーズからポーズまでを発話時間としてその時間に何拍（大体仮名文字にして何個）入るか」を速度の単位（〇〇モーラ/s）、複数のポーズを含む一文では「全拍数をポーズの時間をのぞいた総発話時間で割ったもの」を「平均発話速度」とした。

¹⁵ 「8.9 モーラ/s」という速度は少なくとも文頭の速度としては「早口」と考えられる。文頭の速度が文

者は実験の発話者と同じである。被験者は 20 代から 30 代の日本語母語話者計 20 人であり、実験の被験者とは重なっていない。

追試では、異なる速度の発話に対して相づちを打つことの可否を被験者に判断させた。指示は「この発話に対して相づちの「うん」あるいは「はい」を打つと、後続発話のペースを乱し、邪魔になるかどうか判断してください」とし、作成した音声刺激を被験者に二度聞かせた。

次の図 5.3 は追試の結果を示したものである。縦棒グラフは 3 つの速度の発話において、被験者が判断した「相づちの挿入可能箇所の総数」を示している。

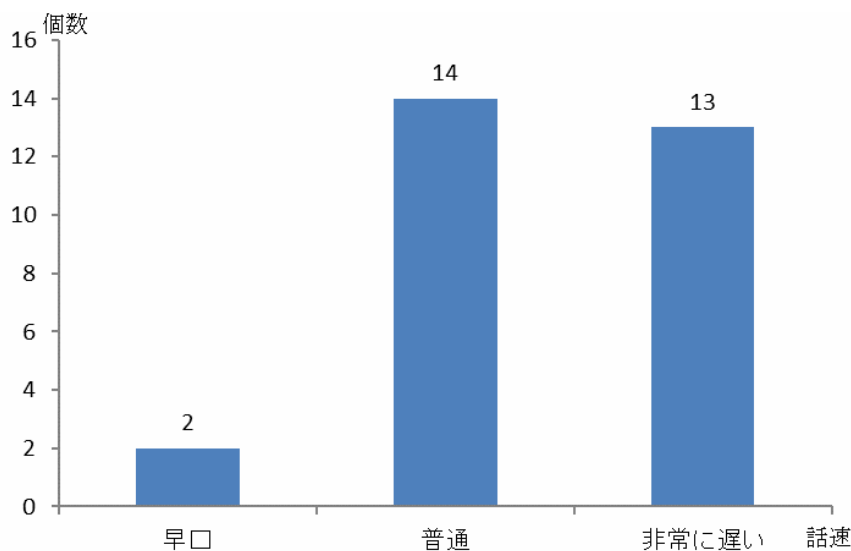


図 5.3 追試の結果

この図を見ると、実験の結果と同様に、「早口」の速度において相づちが打たれる可能性が最も低いことが分かる。それに対して、「普通」と「非常に遅い」の場合では、実験と異なる傾向が見られた。実験では「非常に遅い」の場合において挿入可能の相づちの個数は、「普通」の場合のおよそ半分しかなかったが（カイ二乗検定で分析した結果、 $\chi^2(1)=6.021$ 、 $p<.05$ ）、追試では有意な差は認められなかった（カイ二乗検定で分析した結果、 $p>.05$ ）。

一方、追試で「普通」と「非常に遅い」の間に差が見られなかったことは、実験との大きな違いである。この結果は、阪田・広瀬（1995）の調査に関わると考えられる。阪田・広瀬

中に比べてやや遅いことに関しては後述の阪田・広瀬（1995）を参照されたい。実験において被験者には刺激音声を「発話の始まり」として呈示した。

の調査によると、会話する際の発話速度は文頭ではやや遅く、文中（文の 1/3 あたり）になると速くなる傾向がある。このことから、「非常に遅い速度」の発話は、長く（一節以上）続く場合は相づちが打たれにくい、文頭だけなら遅さが際立たず、相づちは打たれやすいと考えられる。

以上のように、追試の結果から、ポーズという変数を抜いた場合でも、実験と変わらず「早口」の速度の発話に相づちを打ちにくいことが明らかになった。

5.3. 実際の会話データの観察

以上の実験で得られた結果に対応する現象は、現実の会話データにも見られるのであろうか。以下では、ある人物が複数の人と会話する際に打つ相づちの頻度が、相手の発話速度に影響されるかどうかを観察する。

第 5.2 節の実験と追試の結果から、発話内容が同じであれば、「早口」の速度の発話に対して、相づちを打つことが非常に困難であることが分かった。そのことが実際の会話に反映されるかどうかを確認するために、発話速度が非常に早い（平均 9 モーラ/s 以上）20 代の日本語母語話者の女性 2 名（A と S）を研究対象とし、彼らが相手と会話する際の相づちの頻度が発話速度が普通の人と会話する際に比べて低くなるかどうかを検証した。検証する際は、できる限り同じ年齢層、同じ親密度の話者との会話に限定し、類似度の高い話題を選択した。また、実験では、相づちの「うん」と「はい」の形式で実施したため、検証の際も「うん」と「はい」だけ取り扱うようにする。

相づちの頻度を算出する際には PPU という概念を使用した。メイナードは PPU をポーズによって区切られる語句という単位と定義しており、「その確認は客観的になされ得るので、分割の基準として使う際信頼できるものと思える」（メイナード 1993 : 96）と述べている。本稿では「相づちの打たれる回数/PPU の個数」という方法で相づちの頻度を算出する。すなわち、相手発話の 1 つの PPU に対して相づちが何回打たれるかを調べる。

抽出した会話の一部(5.1)から(5.4)の話題は、経験した出来事が述べられるという点で共通している（以下「／」はポーズを表す¹⁶）。(5.1)と(5.2)は、発話速度が普通である話者 H(5.1)、発話速度が非常に速い話者 S(5.2)と会話する際に、話者 A の相づちの頻度の違いを示す。

¹⁶ ただし、本稿では話し手のポーズの直前の発話のイントネーションに上昇や下降の変化がなく、話し手が自分の言い間違いを修復する際に生じさせる 0.2 秒以下の空白は、ポーズとして扱わないこととする。

(5.3)よ(5.4)は発話速度が普通である話者 K(5.3)、発話速度が非常に速い話者 A(5.4)と会話する際に。話者 S の相づちの頻度の違いを示す。

(5.1) 会話の特訓

1. H でたい(.)大連の↓：／
2. A うん
3. H ん外国語学院で[いうと]こ(.)大学って[いうとこ]に行って↓：／
4. A [うん] [うん]
5. H なんか社会人向けの↓[：／
6. A [うん]
7. H 会話の特訓[ていうのが]あってんやん[か／
8. A [おお] [はいはい]
9. H それすごいお金使って[ね↑：／
10. A [うん]
11. H すごい使うのになんか知らんけど／[こ：]行くって言うてておか(.)
12. A [うん]
13. A う[ん]
14. H [親にお／
15. A [うん]
16. H [お金もらって.

(5.2) 猫

1. S なんか／(.)そんなん最初分から[へんか]らさ：／
2. A [うん]
3. S .h ガタゴトって音するやんと外で／
4. S で(.)いやなんかおる(.)と思って／(0.6)で／(0.9)いや隣もでも両隣もみんな／(0.2)
今日は帰ってる[はず]やしと思って／
5. A [うん]
6. S ガタゴトってまた音すんねんやで／.h.h
7. S へ：どうしよ[うと]思ってもうすごいこ：身を固くして／.h

8. A [うん]
9. S 待ってるやんそしたらしばらく音せんくなるからな：↑／.h(0.4)なんやろうと思っ
て／(.)ドア開けるやん．／ほしたら、／そのときに猫は、／.h ゴミ箱の中で↓：／
色々作業[してはって]んな：／
10. A [うん]

(5.3) 書き取り

1. K あ前に後ね↑：なんか、／○○○○の部屋に↓：／
2. S うん
3. K 行ったことがあってしばらく／
4. S う[ん]
5. K [あの研究室でちょっとお留守番を／
6. S うん[うん]
7. K [さして／(.)頂いてたことがあって／
8. S うん
9. K ○○○○もね↑：／意外となんかね↑：そういう言葉を書き取って／
10. S うん
11. K 書き取ったり自分で作った言葉をなんか紙に書いたりとかし[て／
12. S [うんうん]
13. K 貼ってたりとか↓：／
14. S うん
15. K しましたね：／
16. S う：：ん

(5.4) 混雑時間

1. A じゃ：↓／(.)あのわたしが／(.)す(.)スチューデントで入ろうと思ってるんですけど
[夜七時]=
2. S [うん]
3. A =八時って言ったら：／どんなあの混んでますかって今よりもっと混んでますか
って聞いてあ僕その時間ちょっと入ってないんでね：↓／(.)って言われて[ね↑：

- ／
4. S [うん]
5. A んで：↓／
6. S ははは
7. A あそうですかって言って↓：／
8. S うん
9. A えっと何時かなじゃ朝(0.8)／
10. A 朝／(0.2)も混んでますかみたいな[こと聞いた]んですよ↓：[午前]中(.)って言った
ら＝
11. S [うん] [うん]
12. A ＝あその時間はちょっと／(0.2)おじいちゃんおばあちゃん／(0.3)多いですね／
13. S あ

(5.1)～(5.4)における、相づちを打たれる相手の発話速度（モーラ/s）と相づちの頻度（回/PPU）を、次の表 5.1 にまとめる。

表 5.1 (5.1)～(5.4)の相手の発話速度と相づちの頻度

会話例	7.1	7.2	7.3	7.4
相づちの打ち手	A	A	S	S
相づちの打たれる相手	H	S	K	A
相手の発話速度（モーラ/s）	7.2	9.3	7.9	9.9
相づちの頻度（回/PPU）	1.3	0.3	0.7	0.4

表 5.1 から、話者 A が発話速度が普通である話者 H と会話する際に、相づちの頻度は 1.3 回/PPU である。それに対して、発話速度が非常に速い話者 S と会話する際の相づちの頻度はわずか 0.3 回/PPU まで下がっている。話者 S の 2 つの会話例にも同様な傾向が現れ、発話速度が普通である話者 K と会話する際に、相づちの頻度が 0.7 回/PPU であり、発話速度が非常に速い A と会話する際に、相づちの頻度が 0.4 回/PPU であることが分かる。

このように、話者 A も話者 S も、発話速度が 9 モーラ/s を越える「早口」の相手（S・A）よりも、発話速度が 7～8 モーラ/s におさまる「普通」の相手（H・K）との会話の方が、

相づちを高頻度で打つということが分かった。これらの会話では、「早口」の相手発話に対しては相づちは打たれにくかったということである。この観察は、実験と追試の結果を裏付けるものと言える。

5.4. まとめ

本章では、相づちの頻度と相手の発話速度に関する実験と会話データの観察の結果を示した。実験の結果から、発話の長さが一節でも、複数の節の場合でも、速度が非常に速いと、相づちは打たれにくいことが分かった。それに対して、非常に遅い速度の発話は、複数の節が続く場合相づちは打たれにくいが一節の場合はそうでない。また、このような現象は、同一人物が異なる発話速度の人と会話する際のデータで確かめられた。従って、「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」という考えは必ずしも正しいのではなく、相づちの頻度で日本語学習者の日本語能力を判断することが必ずしも精確ではない。本章で示したように、相づちの頻度は、話し手の発話量と発話速度の 2 つの要素に影響されているのである。これからの第二言語習得研究の分野で、これらの要素も考慮すべきである。

本章では、「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」という考えの限界について述べてきた。次章では、「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まない」という見方の限界について検討していく。

第 6 章 「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」に関する検討¹⁷

前章で検討した「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」と同様に、「中国語母語話者にとって静かに相手の話を聞くことが礼儀だ」といった結論が、数多くの研究において報告されている。しかし、中国語社会における相づちの研究は、共通語の「普通話」を対象とするものが多く、方言のレベルにはまだ及んでいない。

本章では、現代中国語の天津方言の会話を観察し、天津方言における相づちを検討することで、「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」という結論はいつでも成立するとは限らないことを示す。

6.1. 問題意識

第 2 章で言及されたように、「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」という結論が広く浸透している。また、中国語母語話者は相手の発話途中ではなく、相手の 1 つのまとまった発話に対して相づちを打つことが多いと指摘されている(劉他 2010)。(6.1)は劉他 (2010) で挙げられている一例である。

(6.1) 劉他 (2010 : 134)

1B 机会赶得不错，这一点我必须得承认，而且从这个角度来讲我是一个很幸运的人，正好赶上了这几个浪潮。像美国的互联网商业化时正好是我进入工业界开始工作了，中国互联网起来的之后就是我回来创业的时候，就发现缺这么一个中文搜索引擎，然后就做起来了。很多时候这个机会想一想，没准也有些巧合的东西。有些机会我自己也觉得“哟，挺可惜的，这个机会我没抓着”。比如说在 90 年代中期的时候，其实我们周围的一些朋友已经开始回国。他们那个时候回国主要就被他们的美国公司派回中国去做中国代表什么的，比如说他是一个汽车工厂或者说什么造纸厂搞化工的，中国这些东西都发展很快，也很需要人，那么美国公司会考虑到你正好是中国人，那就派你回去吧。我也挺想回去的，但是没人派我回去。我后来一想，人一生当中你这个机会丢了，可能下个机会会比这个机会更

¹⁷ 本章は、羅 (2016b) に基づいて修正して作成したものである。

好，如果你是有新人的话，总能抓住一些机会。你也不用抓太多，抓住一些机会就能够做得很好。

2A 对，上帝观赏一扇门一定会打开另外一扇窗¹⁸。

日本語訳¹⁹

1B 折から良いチャンスに巡り合ったということを言わなければなりません。この意味で私は本当に運が良い人間で、この流れに巡り合いました。アメリカのネット業界が商業化したところでちょうど私は工業の世界で仕事を始めました。そして私が中国に戻って創業するころ、中国のネット業界は発展し始めましたが、検索サイトが大変欠けている時代でした。そこで私はそれを作り上げました。私がいつも思うのは、チャンスというのは本当に偶然のものだということです。以前は「惜しい、このチャンスを見逃してしまった」と思うことも何度かありました。実は 90 年代の半ば、周りに帰国した友人が次第に出てきました。彼らは、アメリカの会社に雇われ、そして海外赴任で中国に戻って中国側の管理職を命じられました。例えば車の工場や製紙の工場などがあります。当時の中国では、これらの業界が急速に発展し、人材が全く足りていない状況にあったため、アメリカ側はこのような状況に配慮し、中国人の社員を派遣していました。そのころ私も帰りたくてたまらなかったのですが、派遣されませんでした。後になって考えたことですが、1 つのチャンスを見逃してしまっても、次に来るチャンスがもっと良いかもしれません。できる人ならば、いつか必ず 1 つのチャンスをつかむと思います。そんなにたくさんは要りません。少しだけつかんだらちゃんと出世できます。

2A そうですね。神扉閉じ給う時窓開け給うということですね。

このような例と先行研究の結果から、中国語母語話者は会話する際に、水谷（1984）の概念を借りて言えば、日本語母語話者のように、「共話」をするのではなく、「対話」をするのだという結論に結びつきやすい。さらに、一部の研究者は、中国語社会において、「沈黙は金」「相手の話を静かに最後まで聞くことが礼儀だ」といった主張をしている（Clancy et.al 1996；劉他 2010）。筆者の知る限りでは、これらの見方は管見の限り反論はないと思われる。しかし、このような主張は果たして全面的に正しいのであろうか。

¹⁸ 下線原文。

¹⁹ 日本語訳は筆者による。

従来の研究では、自然録音・録画による会話のデータが使用されているのだが、会話参加者の中国国内での出身地域がほぼ考慮されてこなかった。共通語の「普通話」で会話すると要求されることが多く、会話参加者の第一言語である出身地の方言でデータを取った研究は見当たらない。従って、会話参加者が地元の人と方言で会話する際と、「よそ者」と共通語で会話する際の言語行動が異なる恐れがあり、この可能性はこれまで見落とされてきたのである。

本章では、中国語の天津方言を対象として取り上げ、天津方言の会話における相づちの観察結果から、「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」という結論は必ずしも全面的に正しいとは限らないことを示す。また、本稿では、中国語の天津方言という一方に目を向けるが、中国語のそのほかの方言や、日本語の方言については、従来の研究と同様に、取り上げられていない。これは本稿が専ら「中国語は相づちの頻度が低い」という従来の考えの検証という一点にのみ集中しているためである。共通語だけでなく諸方言にも綿密な観察の目を向けなければならないということは筆者自身も今後肝に銘じていきたい。

次節からは、北京・天津地域で流行している話芸「相声」を通してこの問題を検討していく。

6.2. 話芸「相声」における言語行動

中国の首都である北京、またその隣の都市の天津では、約 200 年前から、「相声」という話芸が人気を博している。相声は様々な形式があり、日本の落語のように面白い話を 1 人で語るものもあれば、漫才のように 2 人や 2 人以上のやりとりによってオチを作るものもある。その中で、最も流行しているのは 2 人で語るものである。相声を語る 2 人は、漫才と同様、「逗^{ドウゲン}眼（ボケ役）」と「捧^{ボンゲン}眼（ツッコミ役）」に分かれているが、「捧^{ボンゲン}眼」は「相手の話にツッコミを入れる」というより、「語りの進行を助ける」ことを常に行っている²⁰。というのは、「捧^{ボンゲン}眼」は、非常に豊富な聞き手行動を取るからである。(6.2)で示しているのは、非常に代表的な相声「^{ジュウフエン}纠纷（喧嘩）」²¹の一部である。この断片において L は「逗^{ドウゲン}眼」であり、R は「捧^{ボンゲン}眼」である。

²⁰ ここで言う「捧」は、「話を盛り上げる」という意味である。

²¹ [redacted]

(6.2) 「^{ジュウフェン}糾紛 (喧嘩)」の断片とその日本語訳

A horizontal bar chart comparing the percentage of respondents who answered 'Yes' to various statements for two groups: 'People who have been vaccinated' (left) and 'People who have not been vaccinated' (right). The y-axis lists 20 statements, and the x-axis shows percentages from 0% to 100%.

Statement	People who have been vaccinated (%)	People who have not been vaccinated (%)
1. I am confident that the vaccine will be effective	85	75
2. I am confident that the vaccine is safe	80	70
3. I am confident that the vaccine will be distributed quickly	75	65
4. I am confident that the vaccine will be affordable	70	60
5. I am confident that the vaccine will be effective for all people	65	55
6. I am confident that the vaccine will be safe for all people	60	50
7. I am confident that the vaccine will be distributed quickly to all people	55	45
8. I am confident that the vaccine will be affordable for all people	50	40
9. I am confident that the vaccine will be effective for all people	45	35
10. I am confident that the vaccine will be safe for all people	40	30
11. I am confident that the vaccine will be distributed quickly to all people	35	25
12. I am confident that the vaccine will be affordable for all people	30	20
13. I am confident that the vaccine will be effective for all people	25	15
14. I am confident that the vaccine will be safe for all people	20	10
15. I am confident that the vaccine will be distributed quickly to all people	15	5
16. I am confident that the vaccine will be affordable for all people	10	0
17. I am confident that the vaccine will be effective for all people	5	0
18. I am confident that the vaccine will be safe for all people	0	0
19. I am confident that the vaccine will be distributed quickly to all people	0	0
20. I am confident that the vaccine will be affordable for all people	0	0



この断片から、「逗^{ドウゲン}喂」は1つのまとまった文ではなく、常に細切れに発話しており、また、「捧^{ボンゲン}喂」は、統語的・意味的にまとまっていなくても、ポーズがあれば相づちや他の聞き手行動を取っていることが分かった。つまり、少なくとも相声に対する観察の結果から、中国人は一律に相づちを打たないとは言いにいく、「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」という結論と矛盾が生じたと言えよう。また、この話芸の形式は、北京・天津地域の方言話者の会話の実態を反映している可能性も否定できない。そこで、この地域の方言話者も話芸と同様に高頻度で相づちを打つという仮説を立て、調査を行った。

6.3. データの概要

本稿で使用するデータは、2016年2月に天津で収録したものである。データは、1対1の自然会話計7組である。会話参加者は、すべて天津地元出身の方言話者である。データおよび参加者の情報を、表6.1に示す。

表 6.1 データの概要

番号	年齢層	関係	性別	長さ	話題
1	高年×高年	親しい友人	男×男	約 30 分	日常的（中国の新年の民俗など）
2	高年×高年	親しい友人	女×女	約 30 分	日常的（中国の新年の民俗など）
3	中年×中年	姉妹	女×女	約 30 分	日常的（兄弟の生活など）
4	中年×中年	バイト先の同士	女×女	約 30 分	日常的（お互いの生活について）
5	中年×高年	近隣・親しい友人	女×女	約 30 分	日常的（病院での体験談）
6	中年×中年	義理の兄弟	男×男	約 30 分	日常的ではない（中国の経済、政治など）
7	若年×中年	取引先の知り合い	男×女	約 30 分	日常的（民俗、ペットなど）

6.4. 天津方言話者の会話における相づちの現れ方

天津方言話者の会話データを観察することで、以下の2つのことが分かった。まず、天津方言話者の会話において、相づちの頻度が非常に高いということが極めて目立っている。また、話し手の発話が統語的・意味的にまとまっていなくても聞き手が頻繁に相づちを打つ。

前章の検討からは、相づちの頻度は話し手の発話速度に関わっていることを明らかにしたため、本稿では、量的に頻度を算出するのではなく、個別事例の質的研究という方法で分析を行う。

(6.3) 歳末の掃除

- 1.L 哎(.)要是说咱过去那家具,
2.Y→啊:
3.L 它不那大铜活,
4.Y→啊:
5.L 咱们弄那个炉灰;
6.Y 是:
7.L 打么铜活那:[打么倍儿亮倍儿亮的搁]点儿水[掺和擦呀擦]那是多少活儿.
8.Y→ [哎哟:: [嗯 [啊: [对对对对.
9.L 诶忙年不就心气儿吗.
10.Y 是捏.

日本語訳

- 1.L あ:昔の家具を思い出すとね,
2.Y→はい:
3.L 銅のやつばかりね,
4.Y→はい:
5.L その中の燃え殻をかきだして,
6.Y そう:
7.L 銅のやつを拭いて[ピカピカになるまで拭いて[水を少し[つけて拭いて[大変な作業だったよね.
8.Y→ [おや:: [うん [はい: [そうそうそう
そう.
9.L あでもやはり準備するうちに正月気分になるでしょう.
10.Y そうね.

(6.3)は歳末の掃除に関する話題である。話者 L は、昔の家具は銅製のものが多く、燃え殻をかき出してピカピカにすることが非常に大変な作業だということについて話している。話者 Y は話者 L の発話が進行している途中、2 行目、4 行目、8 行目で「うん」と「はい」²²で相づちを打っており、これは高頻度と言える²³。また、話者 L の「昔の家具を思い出すとね」(1 行目)、「銅のやつばかりね」(3 行目)、「ピカピカになるまで拭いて」「水を少しつけて」(7 行目)などの統語的あるいは意味的に完結していない発話に対して、話者 Y が積極的に相づちを打つという姿勢が観察された。

(6.4) 民俗

- 1.Y 有时候我告你啊，我要把这个 :: 现在这个 : [那个嘛玩意儿网上发的 ;
 2.L→ [啊 :
 3.L→啊[:
 4.Y [呃 : 风俗那些[个内容,
 5.L [啊啊啊啊对对对对对.
 6.Y 我有时候儿给我们孩子发过[去啊 ;
 7.L→ [啊啊啊啊
 8.Y 你看[孩子说多眼儿啊,
 9.L→ [啊
 10.L→[[啊
 11.Y [[好家伙，还那个嘛玩儿(.)想着过去那一[套 :
 12.L [诶 : 对对对

日本語訳

1. Y 時々はね、私はこれ : : 今のこれ : [あのなんかネットにある文章をね : ,
 2. L→ [はい :
 3. L→はい[:

²² 天津方言において、「啊」という相づちがある。「啊」は「うん」と「はい」と同様に、話し手が話をしている途中で聞き手によって打たれる。また、相手の続きの発話を強く促すという点で、「はい」の方に近く、ここでは「はい」に訳した。「啊」に対する詳しい考察は、第 7 章で行う。

²³ また、6Y の「そう」、8Y の「おや」「そうそうそうそう」、10Y の「そうね」は本稿の研究範囲外ではあるが、多くの研究において相づちとして取り扱われている。次の(6.4)もそうである。

- [illegible]

(6.4)で話者 L は話者 Y に、インターネットにある民俗に関する文章を自分の子供に送って見せて子供に笑われたことについて話している。話者 Y の発話「ネットにある文章をね:」「民俗とかの内容のやつをね」「子供たちに送ったらね:」「ほら」「おかあさん面白いねって言ってね」から見れば、上記の(6.3)の L と同様に、細切れに話す傾向がある。それに対して話者 L は Y の発話のポーズ付近で相づちを打っている。

(6.5) 火鍋

1. O 其实有嘛，不就一火锅。
2. W→嗯
3. O 大白菜垫底儿，搁点儿豆腐粉条儿，
4. W→嗯
5. O 山药：，
6. W→嗯
7. O 呃：：叫鸳鸯蛋，
8. W→嗯
9. O 那前儿是鸡蛋，
10. W→嗯
11. O 半拉鸡蛋半拉肉馅儿，
12. W→嗯

13. O 炸一下儿，搁里一煮：肉片儿，是不是.

日本語訳

1.O 実は珍しいものではなく、ただの火鍋にすぎないじゃないか.

2.W→うん

3.O 白菜を一番下に入れて、それから豆腐と春雨.

4.W→うん

5.O 長芋,

6.W→うん

7.O えっとオシドリたまご²⁴,

8.W→うん

9.O その時はにわたりのたまごを使って,

10.W→うん

11.O そのオシドリたまごは半分のたまごをミンチにくっつけて,

12.W→うん

13.O 1つにしたお団子を油で揚げて、それから鍋で煮る：. 薄切りにしたお肉を入れる，
ね.

(6.5)で話者 O は話者 W に、火鍋の作り方について説明している。話者 O が火鍋に入れる材料「豆腐や春雨」「長芋」「オシドリたまご」「その時はにわたりのたまごを使って」「半分のたまごをミンチにくっつけて」を1つ1つ挙げ、それに伴い、話者 W は「うん」と相づちを打ち続けた。

この3つの会話の断片のいずれにおいても聞き手による相づちの頻度は高く、話し手の発話が統語的あるいは意味的に完結していないうちに打たれる。

6.5. 考察

前節で取り上げた例と同様な現象は、収集したデータの中に多数現れている。このように、

²⁴ 天津の伝統的な食べ物である。ゆで卵を半分に切って片方はそのまま、もう片方はつぶしてお団子にする。そのまましておいた片方をお団子をくっつけて、1つのお団子にする。そのお団子を油で揚げて食べる。

天津方言話者の会話において、話し手は相声の芸人のように、連続的に文単位で話すのではなく、常に間合いを取って細切れに話していることが分かった。また、聞き手による相づちの頻度が高く、話し手の発話が統語的・意味的にまとまっていなくても常に打たれていることも明らかになった。このことから、これまで指摘されてきた「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」「中国人は静かに相手の話を聞くことが礼儀だ」といった主張は必ずしも正確ではなく、少なくとも部分的には間違っていると言えよう²⁵。

これまで、中国語の共通語「普通話」を研究対象とするものが数多く存在し、これらの研究により一部の現象が確実に解明されてきたことは確かである。しかし、「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」という考えは、果たして中国語社会全体の現状を反映しているのだろうか。本章の調査結果からみれば、少なく天津方言話者の会話において、相づちの頻度が低いとはいえないのである。この結果が、天津方言の話者に限ったものなのか、他の地域の方言話者と共通したものなのかは断言できないのではないだろうか。今後、各地域の方言話者の会話をさらに調査する必要があると考えられる。

本章では、天津方言は「頻度が高い」「統語的・意味的に完結していなくても打たれる」といった点で日本語に非常に類似しているということが分かった。従って、この 2 つの言語における相づちを比較する価値があると思われる。また、天津方言では、話し手が発話している途中、聞き手が「嗯」「啊」などの相づちを常に打っているため、本稿の第 7 章では、日本語の相づち「うん」「はい」と中国語の天津方言の相づち「嗯」「啊」を比較していく。

6.6. まとめ

本章では、北京・天津地域で流行している話芸「相声」に対する観察から、「天津方言における会話で、相づちの頻度が高い」という仮説を立てた。収録した会話のデータを分析した結果、天津方言話者は、話し手の発話が統語的・意味的に完結していなくても高頻度で相づちを打つということが明らかになった。

本章では「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」という考えに対して、例外となる天津方言を分析したことで、この考えは必ずしも全面的に正しいとは限らないことを示した。また、天津方言の相づちを分析する際に、日本語の「うん」「は

²⁵ 本稿における相づちの研究範囲は、他の先行研究に比べて多少狭いのだが、「話し手の発話の繰り返し」「話し手の発話の言い換え」「話し手の発話を補足する」などの他の研究で相づちとみなされているタイプの発話も数多く発見できた。

い」と類似している「嗯」「啊」の存在に気づき、次章では、天津方言の会話で数多く打たれるこの2つの相づち「嗯」「啊」を取り上げ、日本語の相づち「うん」と「はい」を比較することで、日本語社会と天津方言社会における相づちの共通点と相違点を明らかにする。

第7章 「相づちは相手の発話の進行を促すためである」に関する検討²⁶

第4章から第6章までの検討で、以下のことを明らかにした。まず、相づちは必ずしも「理解」「賛意」を意味するのではなく、「理解していない」「賛成しない」といったマイナスの語用的効果を帯びているものもあることを提示した。また、従来の研究で論じられている「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」といった結論の限界を述べた。

第6章の考察から、中国語の天津方言の会話において、相づちが高頻度で打たれることが分かった。また、天津方言の会話において、話し手の発話が統語的・意味的に完結していなくても相づちの「嗯」「啊」が打たれる。この点は、日本語の「うん」「はい」に類似し、比較する価値があると思われる。比較することで、日本語社会、中国語社会において、相づちは「相手の発話の進行を促進するためのものであるかどうか」を検討し、その共通点と相違点を明らかにする。

比較する際には、相づちとなるそれぞれの感動詞の用法に焦点を当てることで、相づちのニュアンスを解明することができる。そこでまず、それぞれの感動詞の自己志向性と他者志向性を明らかにするために、独り言と対話において現れるこれらの感動詞の語用的効果を考察する。その後、これらの感動詞が相づちとして発せられる際の異同を観察していく。さらに、「非常に早いタイミングで打たれる相づち」は日本語社会に特有のものなのか、それとも中国語の天津方言にもあるかを検討する。本章の最後では、日本語社会と中国語社会における相づちを総合的に考察することで、それぞれの言語社会において「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」のあり方を解明し、相づちの位置づけを提示する。

7.1. 問題提起

従来の研究で、「相づちは相手の発話の進行を促すためである」ということが常に言及されている。確かに、日本語母語話者の日常生活で、自分が発話している際に、聞き手が「うん」「はい」などの相づちを完全に打たなければ、会話が非常に続けにくくなるということが直感的に判断できるのである。と同様に、中国語の天津方言の話者も、高頻度での相づち

²⁶ 本章は、2016年9月第7回「中日韓日本言語文化研究国際フォーラム」で筆者の発表に基づいて作成したものである。

を期待している可能性がある。しかし、このような理由で、相づちは「発話の進行を促すためのもの」と言い切れるのであろうか。

第4章で検討で、日本語の相づちは全て「理解」「賛成」といった肯定的な語用的効果を帯びているものではなく、場合によっては「理解していない」「賛成しない」などのマイナスの語用的効果を生じる可能性があることを明らかにした。では、このような「感じの悪い相づち」を除けば、「感じの良い相づちなら、発話の進行を促すためのものである」ということが言えるのであろうか。

この問題を明らかにするために、日本語と同様に、相づちの頻度が非常に高い中国語の天津方言の会話を対象として取り上げて比較する。

7.2. 天津方言に「感じの悪い相づち」は存在するか

第4章では、2種類の「感じの悪い相づち」を提示した。1つは、相手の発話をあまり理解していない際、または相手の発話に内容レベルで賛成しない際に打たれる「遅延した相づち」である。もう1つは、相手の発話に言語行動レベルで賛成しない際に、非常に早いタイミングで打たれる「食い気味の相づち」である。この2種類の相づちは、天津方言にも存在するのであろうか。前章で考察した結果、天津方言の会話において、日本語の「うん」「はい」に類似している「嗯」「啊」が存在することが分かったため、この2つの表現を対象として分析する。

そこで筆者は、収録した天津方言の会話（計210分）を観察し、その結果、「遅延した相づち」も「食い気味の相づち」も発見できなかった。「遅延した相づち」を発見できなかったのは、先行研究の結論、そして本稿の第4章の実験結果である、中国語母語話者は相手の発話を理解していない際、または相手の意見に賛成しない際に相づちを打たないのと一致している。

しかし、「食い気味の相づち」は、会話の場面が極めて非協調の際に現れるもので、収録することが非常に困難であると見て取る。従って、天津方言の会話において「食い気味の相づち」が存在するかどうかは、内省で検討するのに適すると考えられる。

では、もし天津方言の「嗯」と「啊」が、非常に早いタイミングで打たれれば、「はい」と同様の効果が生じるのであろうか。

(7.1) (4.7)再掲

A : 私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…

B : はい はい はいはい はい

(7.2)

A : 我现在能这么成功，主要是因为学生时期的努力还有…

私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…

B : 嗯 嗯 嗯嗯 嗯
 うん うん うんうん うん

(7.3)

A : 我现在能这么成功，主要是因为学生时期的努力还有…

私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…

? B : 啊 啊 啊啊 啊

(7.2)の話者 A の発話に対して話者 B は早いタイミングで何度も相づち「嗯」を打っていたが、相手の発話を阻害し、終了させる効果は生じない (劉 2013)。また、天津方言の会話において、(7.3)の話者 B のように、相手が発話している途中、連続的に「啊」を発する場面は考えにくい。では、なぜ日本語の「はい」を早いタイミングで高頻度に打たれると、「感じの悪い相づち」になり、天津方言の「嗯」と「啊」はそうならないのであろうか。また、日本語の「感じの良い相づち」と天津方言の「嗯」と「啊」は、発話の進行を促すためのもの」と言えるのであろうか。

次節からは、まず中国語共通語に存在しない天津方言の「啊」の韻律特徴と発せられる文脈を紹介し、その後、先行研究の結果を参照しながら、日本語の「うん」と「はい」、天津方言の「嗯」と「啊」がそれぞれ、各場面において発せられる可能性と達成される言語行動の違いを考察し、その考察を通して問題を解明していく。

7.3. 天津方言における感動詞「啊」について

第 6 章で言及されたように、筆者が収集した天津方言の会話において、従来の研究で言及されておらず、日本語に訳しにくい感動詞「啊」が数多くみられる。ここの「啊」は、ひとまず「はい」に訳す。

(7.4) 歳末の掃除（断片（6.3）再掲）

- 11.L 哎(.)要是说咱过去那家具,
12.Y→啊:
13.L 它不那大铜活,
14.Y→啊:
15.L 咱们弄那个炉灰;
16.Y 是:
17.L 打么铜活那:[打么倍儿亮倍儿亮的搁]点儿水[掺和擦呀擦]那是多少活儿.
18.Y→ [哎哟:: [嗯 [啊: [对对对对.
19.L 诶忙年不就心气儿吗.
20.Y 是捏.

日本語訳

- 11.L あ(.)昔の家具を思い出すとね,
12.Y→はい:
13.L 銅のやつばかりでね,
14.Y→はい:
15.L その中の燃え殻をかきだして,
16.Y そう:
17.L 銅のやつを拭いて[ピカピカになるまで拭いて]水を少し[つけて拭いて]大変な作業だったよね.
18.Y→ [おや:: [うん [はい: [そうそうそう
そう.
19.L あでもやはり準備するうちに正月気分になるでしょう.
20.Y そうだね.

この例は、歳末の掃除に関する会話の一部である。話者 L は、昔の家具は銅製のものが多く、燃え殻をかき出してピカピカにすることが非常に大変な作業だということについて話している。聞き手である話者 Y は、話者 L と同様の経験を持っているため、話者 L の発話を聞きながら「そう」「そうそうそうそう」といった賛成、共感の言語行動をしている。

また、話者 Y の発話（2 行目、4 行目、8 行目）は「啊」という相づちを含んでいる。この「啊」は話し手の発話途中で聞き手が発する肯定応答であり、第 6 章の考察結果によれば、日本語の「うん」と「はい」に類似しており、話し手の発話が統語的・意味的に完結しなくても聞き手によって打たれていることがある。

さらに、日本語に訳す際に、「啊」によって達成される言語行動が似た「はい」に置き換えたが、「はい」と完全に同義とは言えない。従って、この「啊」が発話においてどのようなニュアンスを持つのか、相づちとしてどのような語用的効果を生じさせるのかを明らかにする必要がある。

天津方言の「啊」を考察する前に、ひとまずこの「啊」と中国語共通語の「啊」とが異なっているという事実を提示したい。中国語共通語にも「啊」という感動詞が存在するが、それは韻律的・発話文脈的に天津方言の「啊」と異なっている。韻律的な違いを、図 7.1 と図 7.2 に示す。

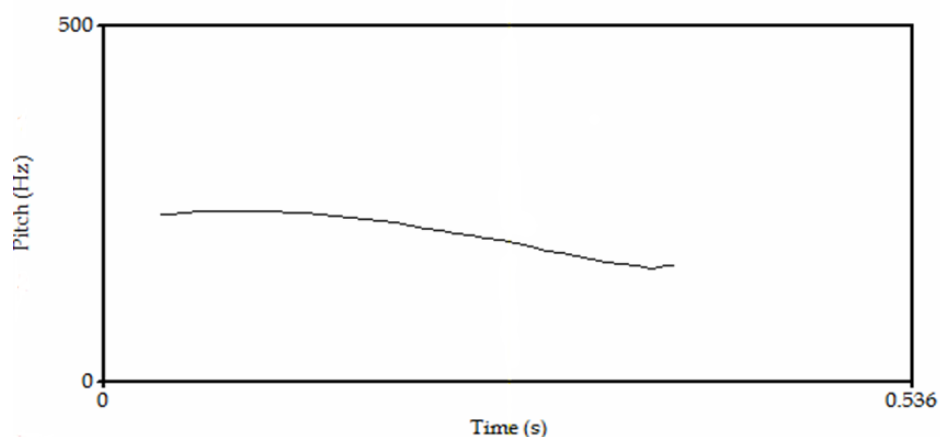


図 7.1 中国共通語の「啊」の F0 曲線

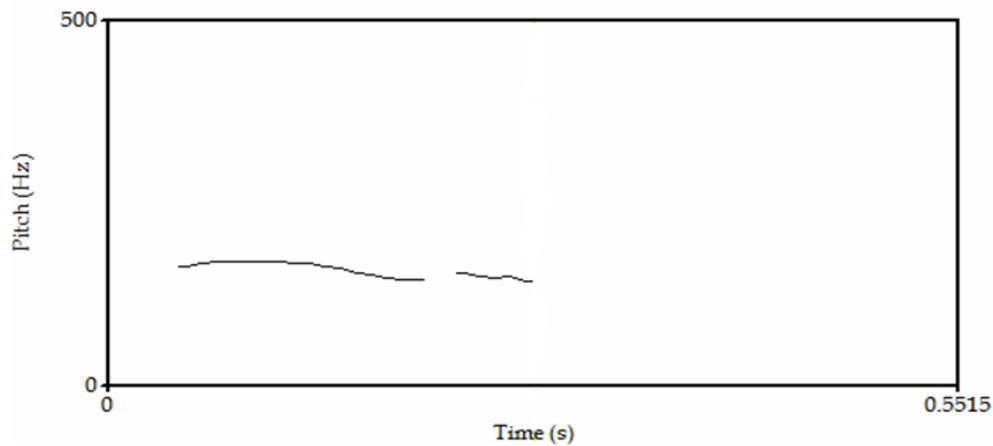


図 7.2 天津方言の「啊」の F0 曲線

この 2 つの図の比較から、共通語の「啊」は継続時間がより長く、イントネーションが高いところから緩やかに下降していく特徴があることが見て取れる。それに対して、天津方言の「啊」は継続時間がより短く、イントネーションが最初から低く、変化がさほどない。

また、発話文脈的には、中国語共通語の「啊」は、ある情報を求めている場面で、分からない状態から分かった状態になった際、つまりある新情報に遭遇し、頭にあるデータベースに貯蔵している情報量が増えた際に発せられることが多い。次の(7.5)は、中国語共通語の「啊」の作例である。

(7.5) 中国語共通語の「啊」が発せられる文脈

A：请问王老师在吗？

B：王老师出差了，最近都不来学校了，可能要过几个星期才能回来。

A：啊，原来是这样。谢谢你。

日本語訳

A：すみませんが、王先生はいらっしゃいますか。

B：王先生はただいま出張中で、ここ最近では学校に来ていません。戻ってくるのは数週間後になると思いますよ。

A：あー、なるほど。ありがとうございました。

(7.5)で話者 A は、会話の開始の際に王先生の現状を知らず、話者 B に尋ねた。話者 B が王先生に関する情報を話者 A に説明し、話者 A はその情報を受け取り、「啊」を発した。つまり、この「啊」は、相手の発話を最後まで聞かなければ発しにくい。一方、天津方言の「啊」は必ずしもそうではない。(7.4)を見ると、聞き手である話者 Y が発した 3 つの「啊」はいずれも相手の発話が終わった後に現れるのではなく、相手発話が意味的・統語的にまとまっていないうちに発せられている。この点は、日本語の「うん」と「はい」、天津方言の「嗯」²⁷と同様である。

では天津方言の「啊」はどのように発せられているのであろうか。また、他の感動詞とどのように異なっているのであろうか。次節からは、現代日本語の「うん」と「はい」、天津方言の「嗯」と比較することで、天津方言の「啊」のニュアンスを明らかにする。

7.4. 現代日本語の「うん」「はい」と天津方言の「嗯」「啊」との比較研究

本節では、まず、現代日本語の「うん」「はい」、また天津方言の「嗯」「啊」が感動詞として会話のどのような場面で発せられるか、どのように異なっているかを比較し、この 4 つの感動詞が相づちとして発せられる際の異同を明らかにする。第 7.4.1 小節と第 7.4.2 小節では、それぞれの感動詞の「自己志向性」と「他者志向性」²⁸を考察する。つまり、これらの感動詞は独り言で発せられるか、対話場面でどのように発せられるかを考察する。

7.4.1. 独り言で発せられる際の容認度の比較

本小節では、それぞれの感動詞の自己志向性を比較するために、まず独り言の場面を考察する。考察する際に、定延（2002）の検討を参照し、主に「決断」と「状況受容」の 2 つの場面から判断する。「決断」とは、話者が決断する際に発せられるものであり、「状況受容」は、「何らかの状況を話し手が受容しようとする際に、これに反応して発せられる」（定延 2002 : 96）ものである。

定延（2002）によれば「うん」は「決断」と「状況受容」の両方の場面で発せられる。話者があることについていろいろ思索した後、かろうじて決断した際に独り言「うん」が発せられる²⁹。

²⁷ 天津方言での「嗯」は、中国語共通語の「嗯」と大きな差が見当たらない。

²⁸ 本稿での「自己志向性」と「他者志向性」は、話者がある感動詞を発する際に、意識が内面あるいは外面に向いているという性質のことを指す。

²⁹ 定延（2002）は「うん」を記述する際に、より細かく音の特徴を記述するために「ふーん」「ん」「ん

(7.6) 決断の「うん」³⁰

(色々考えた後) そうしないとだめか、うん、やっぱりそうしないと。

さらに、状況受容の際、反応の内容によって韻律が異なるが、「感心」「あきれ」「不満」「気づき」「迷い」「疑念」「納得」といった7つの場面において、独り言「うん」あるいは「うーん」が発せられる(定延 2002)。

(7.7) 感心の「うん」

(研究方法が優れた論文を読んで) うーん！このやり方、素晴らしいね！

(7.8) あきれの「うん」

(信じられないことが起こった際に) うーん！なんじゃこりゃ！

(7.9) 不満の「うん」

(ゲーム機を隠された子供) うーん。

(7.10) 気づきの「うん」

(使ったことのない掃除ロボットの操作を試し、やっと動かすはじめた際に) うん、うん、うん、うん、なるほど。

(7.11) 迷いの「うん」

(晩御飯の材料を買いにスーパーに行った際) うーん、大根とキャベツ、どっちがいいかな？

(7.12) 疑念の「うん」

(参考書が見つからない際) うん？どこに置いていたんだろう？

～」などの表記を使用しているが、本稿は便宜上すべて「うん」あるいは「うーん」で表記する。

³⁰ 例(7.6)～(7.13)は筆者が定延(2002)に基づいて作成した例である。

(7.13) 納得の「うん」

(おいしいものを食べて) うん! うまい!

一方、日本語の「はい」は、独り言で発せられるかどうかについて包括的な研究が見当たらないので、ここでは先行研究で言及されていることと筆者自身の検討に基づいて考察を行う。

富樫 (2002) には、独り言の「はい」について以下の記述がある。

(7.14) はい、終わりっと。(富樫 2002 : 128)

(7.14)の「はい」は、「決断」の際の「うん」に類似していると考えられる。つまり、発話に先行する文脈や動作を一段落する際に、終わりを告げるものである。また、富樫 (2001) では、(7.10)の「気づきの『うん』」と非常に似ている例が挙げられている。

(7.15)

(一人で論文を読みながら) はい、はい、³¹なるほど。(富樫 2001 : 34)

富樫 (2001) では、このような「はい」は対話における相手の発話に対する応答の「はい」と異なっていると主張されている。従って、本稿では、このような「はい」は「うん」と同じ、「状況受容」の際に発せられるとみなす。ただし、「うん」と異なり、「はい」は発せられる文脈と韻律が限られ、(7.7)「感心」、(7.8)「あきれ」、(7.9)「不満」、(7.11)「迷い」(7.12)「疑念」、(7.13)「納得」などの場面での記述が見当たらない。従って、日本語において独り言の場面において「うん」は「はい」より多くの場面で発せられると言えよう。

天津方言の「嗯」は日本語の「うん」と形式的に似ており、独り言で発することができる。

(7.16) 決断の「嗯」

(色々考えて) 嗯，这事就得这样办。

うん、やはりそうしないと。

³¹ 下線筆者。

(7.17) 納得の「嗯」

(おいしいものを食べて) 嗯！真好吃！

うん！うまい！

(7.18) 疑念の「嗯」

(参考書が見つからない際) 嗯？书到哪里去了？

うん？どこに置いていたんだろう？

(7.19) 迷いの「嗯」

(晩御飯の材料を買いにスーパーに行った際) 嗯ー，今天晚上吃什么好呢？

うーん、今夜は何を食べようかな？

このように、天津方言の「嗯」は「決断」の際にも「状況受容」の際にも発することが可能である。ただし、「嗯」は日本語の「はい」と同様に、日本語の「うん」に比べて発せられる場面が限られている。

最後に、天津方言の「啊」について考察する。「啊」は他の3つの感動詞に比べてやや特殊であり、独り言では発せられない。

(7.20) 決断

？（色々考えて）啊，这事就得这样办。

やはりそうしないと。

(7.21) 状況受容

？（おいしいものを食べて）啊，真好吃！

うまい！

本節の考察で、日本語の「うん」「はい」、天津方言の「嗯」は独り言で発せられるが、天津方言の「啊」は独り言で発せられない。

7.4.2. 肯定応答とする際の比較

本小節から、対話場面で発せられる「うん」「はい」、天津方言の「嗯」「啊」を比較していく。まず、肯定応答として発せられる際の、これらの感動詞の共通点と相違点を明らかにする。(7.22)から(7.25)までは、筆者の作例である。

相手の肯否質問あるいは請求に対しては、「うん」も「はい」も発せられる。

(7.22)

A：この大学は難関ですか？

B：うん。難しいと思いますよ

(7.23)

A：今日一緒に図書館に行ってもらえますか？

B：うん。いいですよ。

(7.24)

A：この大学は難関ですか？

B：はい。難しいと思いますよ。

(7.25)

A：今日一緒に図書館に行ってもらえますか？

B：はい。いいですよ。

(7.22)、(7.24)の話者 B の、話者 A の質問「この大学は難関ですか」に対する「うん」と「はい」は、どちらも肯定的な応答表現である。また、(7.23)、(7.25)の話者 B は話者 A の「一緒に図書館に行く」という請求に対して、「うん」あるいは「はい」を発して引き受けることが可能である。この場合の「うん」と「はい」の選択は質問の答えに対する自信度の違い（富樫 2001）³²、あるいは相手への待遇性の違いを反映している（水野 1988）。

天津方言の「嗯」も、日本語の「うん」と「はい」と同様に肯否疑問に対する答える際、

³² 富樫（2001）によれば、「高度の推論を経た」（p.36）ということである。

または請求を引き受ける際に発せられる。

(7.26)

A：这所大学难考吗？

この大学は難関ですか？

B：嗯。挺难考的。

うん／はい。難しいと思いますよ。

(7.27)

A：今天能和我去下图书馆吗？

今日一緒に図書館に行ってもらえますか？

B：嗯。好啊。

うん／はい。いいですよ。

(7.26)の話者 B の「嗯」は、話者 A の質問に対する肯定応答であり、(7.27)の話者 B の「嗯」は、話者 A の請求に対する引き受けである。日本語に訳す際に、状況によって「うん」と「はい」のいずれにも対応する可能性がある。

一方、「啊」は他の 3 つの感動詞と異なっている。「啊」は質問に対する肯定応答として発せられるが、場面は他の 3 つの感動詞より限定されている。

(7.28)

A：这所大学难考吗？

この大学は難関ですか？

B：？啊。挺难考的。

難しいと思いますよ。

(7.29)

A：今天能和我去下图书馆吗？

今日一緒に図書館に行ってもらえますか？

B：？啊。好啊。

いいですよ。

(7.28)話者で A の質問に対して話者 B が肯定応答をした後「挺难考的（難しいと思いますよ）」と続ける際、「啊」という感動詞は発せられにくい。(7.29)も、話者 A の請求に対して同意し、「好啊（いいですよ）」という引き受ける場合、前置きの肯定応答が「啊」だと、発話の自然度が落ちる。

しかし、次の(7.30)、(7.31)の場合では、「啊」の容認度が高くなる。

(7.30)

A：这所大学难考吗？

この大学は難関ですか？

B：啊。这还用问吗？

はい。それは決まっているでしょう？

(7.31)

A：今天能和我去下图书馆吗？

今日一緒に図書館に行ってもらえますか？

B：啊。当然没问题了。

はい。もちろんです。

(7.30)と(7.28)、(7.31)と(7.29)の最も大きな相違点は、肯定応答の後の発話である。(7.25)での話者 B の返答は単なる命題の真偽に対する判断であり、(7.29)も単なる相手の誘いに対する引き受けである。それに対して、(7.30)、(7.31)における話者 B の発話には「それは当然だ」あるいは「それは聞くまでもないことだ」といった強い気持ちが含まれている。つまり、話者が肯定応答をする際に、強い気持ちがなければ「啊」が発せられにくいということである。

以上の考察から、日本語の「うん」「はい」、天津方言の「嗯」「啊」は肯定応答として発することが可能である。また、「啊」は「それは当然だ」という強い気持ちがなければ不自然だが、「うん」「はい」「嗯」はそのような制限がないことが分かった。この点については、命令文に対する承諾の応答でも確かめられる。

(7.32)

A：宿題をしないといけないよ！

B：うん。

(7.33)

A：宿題をしないといけないよ！

B：はい。

(7.34)

A：你不写作业可不行！

宿題をしないといけないよ！

B：嗯。

うん／はい。

(7.35)

A：你不写作业可不行！

宿題をしないといけないよ！

B：啊。

(うんざり) 分かっている。

(7.32)から(7.35)までの例文から、相手の命令に応じる際に、この4つの感動詞のいずれをも発することができることが分かる。「うん」は命令の内容を理解した際に発せられるが、「うん」と応答するだけでは理解のレベルにとどまり、命令の内容を実際に行うかどうかというレベルまで含まれない。「はい」と応答した場合であれば、命令の内容の理解にとどまらず、「実行の約束」という言語行動にもなる(森山 1989)。また、天津方言で「嗯」と発せられる際は、日本語の「うん」と「はい」の両方の言語行動となる。一方、「啊」と応答する際に、「そのようなことは言われなくても分かっている」というニュアンスがあり、当たり前のことを命じられて不快に感じるという気持ちをほのめかしている。

7.4.3. 発話途中、発話末尾で話し手によって発せられる際の比較

対話場面において、話し手が発話している際に、発話途中の句末、あるいは発話末尾でこれらの感動詞を発することがある。(7.36)は、日本語の「うん」の一例である。

(7.36)

一仕事終えた後のビールがうまいんだよ、うん³³。(富樫 2002 : 138)

また、「はい」に関して、金田 (2015) では(7.37)のような例が挙げられている。

(7.37)

昨日お送りした資料の中にですね、ハイ。会場までの地図とですね、ハイ。行き方の書いた紙がですね、ハイ。入っていたかと思うんですよ、ハイ…³⁴ (金田 2015 : 25)

このような話し手の発話途中の統語的に終わった部分、あるいは末尾に現れる「うん」と「はい」は、富樫 (2002) と金田 (2015) では、発話の終点 (ターンやセッション) あるいはトピックの切れ目を示すものとなると指摘されている。また、「はい」の場合は、「ビジネスの場での真摯な態度の現れ」(金田 2015 : 25) でもある。

天津方言「嗯」も、このような場面で日本語の「うん」「はい」と類似した現れ方をすることがある。筆者が収集したデータの中に、(7.38)のような例がある。

(7.38) この前から割とちゃんと勉強していた

1. O 嗯, 我觉得今年哪, 比去年好点儿了。横是大点儿了, 是[吧。

2. W [嗯嗯

3. O 学习认点儿头了。

4. W 嗯: [: -

5. O [那前儿,

6. W 嗯

7. O 有脑子, 他不用啊。

³³ 下線は筆者。

³⁴ 下線は原文。

8. W 嗯
9. →O 这前儿倒是行，嗯.
10. →W 我觉着小孩儿们现在千万别：玩儿手机上瘾.

日本語訳

1. O うん、私は今年は去年よりだいぶましになった気がする。ちょっとは大人になっただろう、だろう[ね.
2. W [うんうん
3. O 勉強に力を入れるようになった.
4. W うん: [: -
5. O [昔はね,
6. W うん
7. O 頭はいいけど、全然頑張らなかった.
8. W うん
9. →O この前から割とちゃんと勉強していたのよ、うん.
10. →W 私はやはり子供たちにスマホをあまりいじらせないようにした方がいいと思う.

(7.38)では話者 O は話者 W に対して自分の孫について話している。話者 O は、自分の孫は昔から賢く、あまり勉強しなかったが、今年になってきちんと勉強するようになったと言っている。9 行目の話者 O は「この前から割とちゃんと勉強していたのよ、うん」と言って自らのターンを終了させた。その後 10 行目で話者 W は発話権を取り、自分がスマホに対する意見を述べている。この例から、天津方言の「嗯」は日本語の「うん」「はい」と同様に、話し手の発話に現れ、ターンあるいはセッションの終了をほのめかしていることが分かる。

「啊」も、ターンあるいはセッションの終了時に現れることがある。筆者が収集したデータの中から一例として(7.39)を挙げる。

(7.39) 窓のガラスを拭いた

1. W 咱这辈儿人哪，有点儿意思.
2. O 嗯

3. W 现在又 : (.) 又又伺候小的,
4. →O 可 : 不[是.
5. W [过去伺候老的.
6. →O 对对对对.
7. →W 年前那个玻璃, 那都是 :: 我们儿子那边儿都我擦的, 啊.
8. →O 你看.

日本語訳

1. W 私たちの世代の人は、本当に面白いね.
2. O うん
3. W 今は : (.) 下の世代の面倒を見て,
4. →O それは確[かに.
5. W [昔は上の世代の面倒を見ていた.
6. →O そうそうそうそう.
7. →W お正月の前にね, うちの息子の家の窓のガラスを私が全部拭いたのよ.
8. →O ほらそうなるのよ.

(7.32)で話者 O と話者 W は自分たちの世代はいつも人の面倒を見ているという話題について話している。話者 O が自分の意見「私たちの世代の人は昔上の世代の面倒を見て、今は下の世代の面倒を見ている」を述べている途中から、聞き手の話者 W は「それは確かに」「そうそうそうそう」などの発話でその意見に対する賛意を表している。つまり、6 行目が終了した時点で、2 人の話者がそれ以前のやり取りでお互いの意見が一致していることを知っているということになる。その後の 7 行目で話者 O は「お正月の前に息子の家のガラスを全部拭いた」というエピソードを語り、発話の末尾に「啊」を発した。さらに 8 行目で話者 W は「ほらそうなるのよ」と共感を示した。

このように、日本語の「うん」「はい」、天津方言の「嗯」「啊」のいずれも話し手の途中あるいは末尾に現れることが分かった。しかし、(7.36)から(7.39)までの 4 つの例を観察すれば、「啊」と他の 3 つの感動詞が異なっていることは明らかである。というのは、「啊」を発するには、次の 3 つの条件を満たさなければならないからである。①話者が自分の発話内容が真であることを強く確信している、②話者が聞き手もそのように思っていると確信

している、③「啊」を発することによって話者が聞き手と同じ認知状態であることを相互顕在的にしようとする。一方、「うん」「はい」「嗯」はそのような状況に現れるものではなく、単なるターンあるいはセッションの終点を示すだけである。次の作例は、このような仮説に対する証明になるのであろう。

(7.40)

確か日本のサッカーは韓国より成績が良かったですね、うん。

(7.41)

確か日本のサッカーは韓国より成績が良かったですね、はい。

(7.42)

好像日本足球的成绩比韩国要好吧，嗯。

確か日本のサッカーは韓国より成績が良かったですね、うん／はい。

(7.43)

? 好像日本足球的成绩比韩国要好吧，啊。

確か日本のサッカーは韓国より成績が良かったですね。

(7.40)から(7.43)までの4つの発話は、話者が自分の考えにさほど自信を持っていない際の例である。このような発話の末尾に、(7.40)で「うん」、(7.41)で「はい」、(7.42)で「嗯」をつけることは自然だが、(7.43)で「啊」をつけるのは不自然である。つまり、「啊」は自分の発話に自信を持っていない際に発せられにくいということが言える。

(7.44)

あなたはそう思わないかもしれませんが、私は地球温暖化が進んでいると思います、うん。

(7.45)

あなたはそう思わないかもしれませんが、私は地球温暖化が進んでいると思います、はい。

(7.46)

可能你不是这么想的，我觉得地球温室化越来越严重了，嗯。

あなたはそう思わないかもしれませんが、私は地球温暖化が進んでいると思います、うん／はい。

(7.47)

？可能你不是这么想的，我觉得地球温室化越来越严重了，啊。

あなたはそう思わないかもしれませんが、私は地球温暖化が進んでいると思います

(7.44)から(7.47)までの4つの発話は、話者が自分の考えが聞き手と異なっていると予測している際に発せられるものである。これらの発話において、末尾に(7.44)で「うん」、(7.45)で「はい」、(7.46)で「嗯」をつけることは自然だが、(7.47)で「啊」をつけることは不自然である。

以上の考察では、発話途中あるいは発話末尾で話し手によって発せられる日本語の「うん」「はい」、天津方言の「嗯」「啊」の共通点と相違点を明らかにした。考察により、「啊」は他の3つの感動詞に比べて発せられる文脈が限られており、自らの意見に強い自信を持っているか、お互いの意見に強い共感がなければ、不自然だということが分かった。

7.4.4. 感動詞としての「うん」「はい」「嗯」「啊」の共通点と相違点に関する考察

7.4.1から考察を通して、現代日本語と現代中国語の天津方言の会話で数多く打たれる相づちの「うん」「はい」「嗯」「啊」のそれぞれの感動詞としての特徴を明らかにした。考察の結果から、それぞれの感動詞の共通点と相違点が解明された。

この4つの感動詞の共通点は肯定応答する際、そして発話途中、発話末尾で話し手によって発せられることが可能だということである点である。

相違点は、まず、「うん」「はい」「嗯」は独り言として発することが可能だが、「啊」はそうではない。

また、肯定応答として発せられる際に、「うん」「はい」「嗯」は単なる命題の真偽や、請求の引き受けの判断になるが、「啊」が発せられる際は「それは当然だ」「それは決まっていることだ」「言われなくても分かっている」といった強い気持ちでなければ不自然である。

発話途中、発話末尾で話し手によって発せられる「うん」「はい」「嗯」は、発話の全体あ

るいは部分的に完結した心内操作の標識であり、相手と考えが一致するかどうかに関わらず発せられるのだが、「啊」は先行する文脈や相手との先行発話に緊密につながっているため、相手と考えが一致しないと予測される際には発せられないのである。

これらの使用場面から、「うん」「はい」「嗯」は強い自己志向性を持っており、話者が新情報や、既知の情報との遭遇、あるいは確立した情報あるいは確立していない情報の取り出しなどの認知状態の調整が行われる際に発せられることが分かる。日本語の「うん」と「はい」の性質について富樫（2002）は次のようにまとめている。天津方言の「嗯」も、この点において日本語の「うん」と「はい」と同様であろう。

(7.48) 「はい」「うん」発話の前提として、「聞き手」の存在を特別視して設定することは難しいといえる。聞き手は（話し手にとって）情報の出所の一つに過ぎない。話し手が情報をどう処理するのかということと、その情報の出所がどこかということは、一旦、切り離して考えていかなければならない。したがって、「はい」「うん」の本質を心的操作の標識、話し手の心内における情報処理を示すものとして位置付けることができる。

[富樫 2002 : 144]

また、日本語の「うん」は「はい」より、独り言で発せられる場面が多いので、自己志向性がより強いと言える。それに対して「はい」は一部の場面で情報の受け取りだけでなく、実行の約束などの言語行動も達成するので、「うん」より強い他者志向性を帯びていると言えよう。

一方、「啊」は独り言で発せられない点からみて、自己志向性はなく、他者指向性しか持っていないと言える。また、「啊」は「うん」「はい」「嗯」と異なって、既知の情報との遭遇や確立した情報の取り出しなどの認知状態の調整が行われる際に発せられる。この 2 点を合わせると、「啊」は認知状態の調整を表面化し、当該の情報が既に心内にある、あるいは確立していることを対話する相手と相互顕在にする語用的効果があるということが分かる。また、「啊」が既知の情報との遭遇の認知状態の調整が行われる際に発せられるという感動詞の特徴から、「啊」は相づちとして発せられる際に、「催促」の効果が強く、日本語の「はい、で？」に対応するのであろう。

7.4.5. 相づちとしての「うん」「はい」「嗯」「啊」の共通点と相違点に関する考察

前節で検討した感動詞としての日本語の「うん」と「はい」、天津方言の「嗯」と「啊」の共通点と相違点を考察した。この節では、その考察の延長線上、相づちとしての「うん」「はい」「嗯」「啊」の共通点と相違点を総括する。そして、なぜ天津方言の「啊」は意味的に日本語の「はい」に似ているが、「感じの悪い相づち」にならないのかを分析する。

7.4.5.1. 相づちとしての「うん」「はい」「嗯」「啊」に対する考察

「うん」「はい」「嗯」「啊」のいずれも話し手が発話している途中、聞き手によって発せられることができる。その場合、話し手の発話が統語的・意味的にまとまっていなくても特に不自然ではない。

(7.49)

A: 私の学校でね、もう喫煙が全面禁止になってね、…

B: うん うん

(7.50)

A: 私の学校でね、もう喫煙が全面禁止になってね、…

B: はい はい

(7.51)

A: 我们学校呀, 已经全面禁烟了, 所以……

B: 嗯 嗯

日本語訳

A: 私の学校でね、もう喫煙が全面禁止になってね、…

B: うん／はい うん／はい

(7.52)

A: 我们学校呀, 已经全面禁烟了, 所以……

B: 啊 啊

日本語訳

A: 私の学校でね、もう喫煙が全面禁止になってね、…

B: はい、で? はい、で?

(7.49)から(7.52)までは、話し手 A が新規話題を開始しようとする際の会話である。話し手 A が発話している途中に、聞き手は(7.49)では「うん」、(7.50)では「はい」という相づちを打っている。この場合の「うん」と「はい」は短くそして下降調であり、さらに話し手の発話終了時から 350ms 経過時点の前に打たれると仮定する。この場合の「うん」と「はい」の区別は以下の 3 つである。「はい」が打たれる場合、①会話の場面はより正式である（水野 1988）、②聞き手は話し手の発話内容に対して興味がある（富樫 2002）、③聞き手は話し手によって言及された内容により多くの情報量を持っている（富樫 2001, 2002）。

また、天津方言の「嗯」と「啊」には、日本語の「うん」と「はい」のような待遇性の違いがなく、「嗯」は日本語の「うん」と「はい」のいずれにも対応することが可能である。ただし、「啊」が発せられる際に、①聞き手は話し手の発話内容の展開により把握できている；②「催促」という言語行動を果たしている。この結論は、収集したデータで次の(7.53)と(7.54)で検証することができる。

(7.53) 孫の放課後

1. O 我们哪，我们这孙子今年上初中，这功课不紧点儿吗，
2. →W 嗯
3. O 原先也像您那样儿似的，都上我这吃饭来。
4. →W 嗯
5. O 吃完饭三口叽里咕噜走了，
6. →W 嗯
7. O 是：，走了。这小不点儿进门儿：，看报，对吧？
8. →W 嗯
9. O 嗯是：，得弄手机，
10. (0.6)
11. →W 嗯

12. O 带上厕所，
13. →W 嗯
14. O 诶折腾折腾，到点吃饭了。
15. →W 嗯
16. O 你说吃完饭能走吗马上，再冲着风呢，
17. →W 嗯
18. O 待一小时吧，耽误工夫。看到现在怎么办，就叫他们啊，下学直接回家。

日本語訳

1. O うちの孫はね，今年中学校に進学して，勉強が忙しくなったじゃないですか，
2. →W うん
3. O 昔はWさんのところと同じで，みんな私の家に集まって晩御飯を食べてた。
4. →W うん
5. O 晩御飯を食べたら彼らはまた急いで家に帰っていく。
6. →W うん
7. O で：，家に帰っていく。孫は学校が終わって家に来たら：，まずは新聞を読む：：
　　でしょう？
8. →W うん
9. O うんで：：携帯をいじって，
10. (0.6)
11. →W うん
12. O トイレに行って，
13. →W うん
14. O いろいろやっているうちに，晩御飯の時間になった。
15. →W うん
16. O 食べたらすぐ帰っていくわけじゃないでしょう，風邪をひいてしまうし，
17. →W うん
18. O 一時間待つのも，時間の無駄だよ。じゃどうしようかと考えて，放課後直接家に帰るようにさせた。

(7.54) 目眩

1. R 哎哟：：我告您没把我给[晕死
2. L [结果哪您(.)啊：：[照相去了
3. R [一回来，我就(.)我就不能这么回头儿
4. →L 啊[：
5. R [这么回头儿就能把我给晕死.
6. →L 嗯

(86 行省略)

92. R 两个眼儿不能睁，[只能闭一个眼[才能拐这个弯儿，[你知道吗
93. →L [啊： [啊 [结果哪？去了？
94. R 上医院啦[：
95. →L [啊：

日本語訳

1. R もう：：目眩で死にそう[になったよ
2. L [結局あなた(.)あ：：[診査しに行ったよね.
3. R [帰ってきたら，もう(.)もう首をこう回
すことができなくなったね，
4. →L 啊[：
5. R [首を回すだけで目眩で死にそうになったよ.
6. →L うん

(86 行省略)

92. R 2つの目を同時に開くことができなくて，[1つの目を閉じないと，[体を回すこと
ができないのよ，[分かるでしょう.
93. →L [啊： [啊
[結局行ったよね？病院？
94. R 病院に行ったよ[：
95. →L [啊：

(7.53)も(7.54)も話し手の体験談の話である。(7.53)の話し手 O は自分の孫が自宅に晩御

飯を食べに来た際のエピソード、(7.54)の話し手 R が目眩で病院に行ったというエピソードである。この 2 つの例の最も大きな違いは、それぞれの聞き手が話し手の発話内容を把握する程度にある。(7.53)の聞き手 W は「嗯」という相づちだけを打っているが、(7.54)の聞き手 L は「啊」を打つことが多い。(7.53)で話し手 O は自分の孫の生活についての情報について、以前言及したことがなく、聞き手の W にとってそれは完全な新情報である。一方、(7.54)の場合、話者 R は自分が「目眩で死にそうになった」という情報を最初から提示し、その後「目眩で首や体を回すことができない」「2 つの目を同時に開くことができない」ことについて言及する際に、聞き手の L はある程度それが分かっているため、「啊」という相づちが打てるのである。93 行目では、聞き手の L は 2 つの「啊」を打った後、さらに「結局行ったよね？病院」という催促の質問をした。つまり、相づちの「嗯」と「啊」は「ここまでの内容への理解」という点で共通しているが、「嗯」が多用される話題では、聞き手は話題の内容に対して明確な態度を示さず、それに対して、「啊」が多用される話題では、聞き手は話題の全体の内容をある程度把握できていると言えよう。前節で指摘されたように、「嗯」は独り言で発せられることが可能だが「啊」はそれができない。肯定応答の「嗯」は単なる命題の真偽の判断だが、「啊」はそれ以上の認識、そして気持ちを持っている。この 2 点相づちの「嗯」は聞き手の内面に強く関わり、単なる情報の受け入れの際に発せられるが、それに対して「啊」は対人的側面が強く、話し手に言われる前にある程度の情報が把握でき、そしてこのことを表面化することで、相手発話の進行を促す語用的効果があると言えよう。

このように、日本語の「感じの良い相づち」の「うん」と「はい」、そして天津方言の「嗯」と「啊」は「相手発話に対する理解」という部分で共通していると言える。ただし、「うん」「はい」「嗯」は聞き手の内面により関わっており、相手の発話を聞いて「分かっていない」状態から「分かった」状態に変化した際に打たれる。また、場合によって、相手の発話内容を既に承知していることもあるのだが、その場合にも「うん」「はい」「嗯」が打てるのは、聞き手の心内にある「これは分かっている」ということを表面化しないからである。一方、聞き手が「啊」と打つ際には、相手の発話を聞く前に言及された話題や概念をある程度把握でき、「啊」を発することで、「分かっている」ということを表面化し、話の展開を期待して、「続きを言ってください」という「催促」の言語行動を達成する。

以上のとおり、従来の研究で指摘されている「相づちはここまでの内容を理解した、先に進めてくださいという機能を果たしている」のは、天津方言の「啊」には当てはまるが、日

本語の「うん」と「はい」にはあてはまりきれないということが分かった。というのは、話し手の発話の終了時から 350ms 経過時点の前に下降調で打たれる「うん」と「はい」は、本質的には情報を受け取る際に認知状態の調整を反映するものであり、「続けてください」というのはあくまで相づちの受け手が「うん」「はい」を聞いた後、「相手が分かったから、話を続けても大丈夫だろう」という「二次的解釈」と言えるからである。一方、天津方言の「啊」は、聞き手の「それは分かっている」という認知状態の調整を表面化したものであり、それ自体「催促」という言語行動を達成することができる。

7.4.5.2. なぜ天津方言の「啊」は「感じの悪い相づち」にならないのか？

そこで本章の最初で提示された問題に戻るが、なぜ非常に早いタイミングで高頻度で打たれる日本語の相づち「はい」は会話を打ち切る効果があり、天津方言の「啊」にはならないのか。

(7.55) (4.7)、(7.1)再掲

A：私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…

B： はい はい はいはい はい

(7.55)の「はい」は、富樫 (2002) によれば、韻律的に非常に特徴的である。「はい」は 1 回で発せられた際に継続時間が短く、イントネーションが平板である。「はいはい」のように 2 回繰り返して発せられる際に、後の「はい」の方が、ピッチの開始点が高く、富樫 (2002) では「低い山→高い山」のイントネーションパターンと呼ばれている。前節でまとめたように、「はい」は「うん」より他者志向性が強いが、あくまで話者自身の認知状態の調整を反映するものであり、直接に対話する相手に働きかけるものではなく、そこまでの話が一旦終了する「文脈の断絶」(金田 2015) でもある。従って、このような早いタイミングで高頻度で打たれる「はい」により、「分かっている」という意味合いが生じ、早めにセッションを終了させる効果が生じる。

一方、「啊」も「分かっている」ことを表面化する効果があるが、「はい」のようなセッションの終点を示す特性を帯びていないため、相手の発話途中に現れる際には「催促」という言語行動しか達成しない。

では、天津方言で、相手の発話を打ち切ろうとする際には、どのような発話をするのであ

ろうか。(7.56)の B の発話はその一例である。

(7.56)

A : 我现在能这么成功, 主要是因为学生时期的努力还有…

私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…

B : 行了／好了 行了／好了 行了／好了
 もういいよ もういいよ もういいよ

(7.56)で B の発話の「行了／好了」は、日本語に訳すと「もういいよ」という意味である。

「行了」と「好了」はいずれも意味論的「意味」がある表現である。すなわち、天津方言の母語話者は、相手の発話を打ち切ろうとする際に、相づちではなく、意味論的「意味」がある発話を発しなければ、「中断させる」という言語行動を達成できないのである。

このことから、「相づちは相手の発話の進行を促すためである」という考えは、実は日本語社会には完全に当てはまるとは限らず、中国語の天津方言の「啊」こそ、相づちとして発せられる際、この考えに一致するのである。

7.5. 両言語社会の相づちに関する総合的考察

従来の研究では、「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」といった頻度に関する側面、そして相づちの「理解・賛成を意味する」という意味の側面と「相手の発話の進行を促す」という印象の側面を重んじてきたが、本稿の考察を通して、相づちには、これらの記述は全面的とは言えないことが分かった。

まず、第4章では、従来注目されていなかった「感じの悪い相づち」の存在を提示した。心理学実験と会話分析の手法で、日本語社会において、相づちは必ずしも相手に対する「理解」あるいは「賛成」といった言語行動を達成するのではなく、遅いタイミングあるいは非常に早いタイミングで打たれると、マイナスの語用的効果を帯びてしまうということが分かった。それに対して、本章の考察の結果からは、このようなマイナスの語用的効果を帯びる「感じの悪い相づち」は、少なくとも肯定応答の感動詞という品詞の範囲で、中国語社会（中国語・天津方言）に存在しないと言えるのであろう。

また、本章では、従来の研究で述べられている「相手の発話の進行を促すため」の相づち

は、日本語社会には存在せず、現代中国語の天津方言には存在することも明らかになった。従来の研究で言及されてきた「相手の発話を促す」という効果は、日本語の相づち「うん」と「はい」の考察を通して、あくまでも相づちの受け手の「二次的解釈」によるものであり、「うん」と「はい」の本来の性質ではない。一方、天津方言における相づち「啊」は、「理解・賛成」を示す効果を持ち、またそれ自体「催促」という性質を帯びているため、「相手の発話の進行を促す」相づちと言える。

これらの考察結果から、日本語の相づちはタイミング・韻律が多様に変化することで、様々な言語行動を達成することができるが、中国語の天津方言はそうではなく、タイミング・韻律はほぼ定まっており、特定の言語行動しか達成できない。また、中国語社会において、相手の発話を中断しようとする際には、相づちではなく、意味論的「意味」がある表現を用いなければ達成できないことを示した。従って、日本語の相づち「うん」と「はい」はタイミングや韻律の変化によって、「理解した—理解していない」「賛成する—賛成しない」「促進する—阻害する」といった連続的な聴覚印象を生じさせるが、天津方言の「嗯」と「啊」はそうではない。「理解していない」「賛成しない」「打ち切る」を表す際には相づちではなく他のタイプの発話を選ぶ必要がある。このことを、図 7.3 に示す。

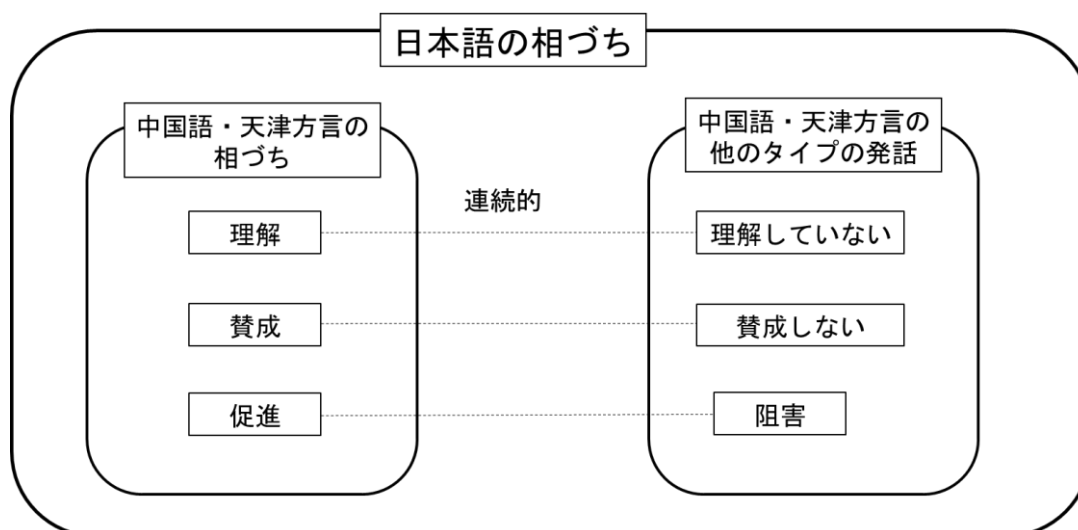


図 7.3 日本語社会と中国語・天津方言社会における相づちの含む範囲

さらに、本稿の第 3 章で取り入れられた「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」といった概念から、日本語社会における相づち、中国語・天津方言社会における相づちは以下

のように分類することができる。

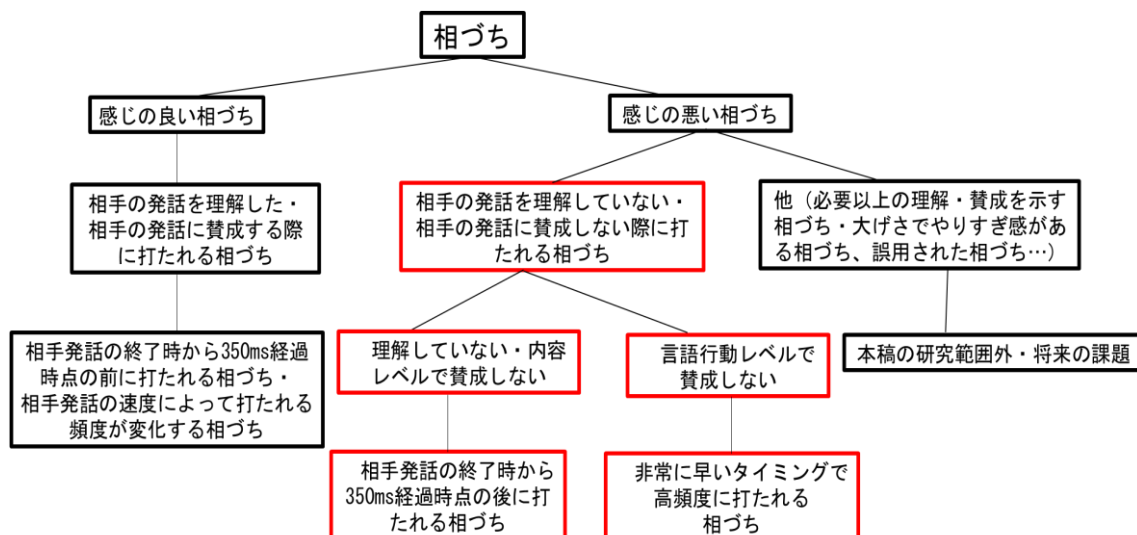


図 7.4 日本語社会における「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」の体系

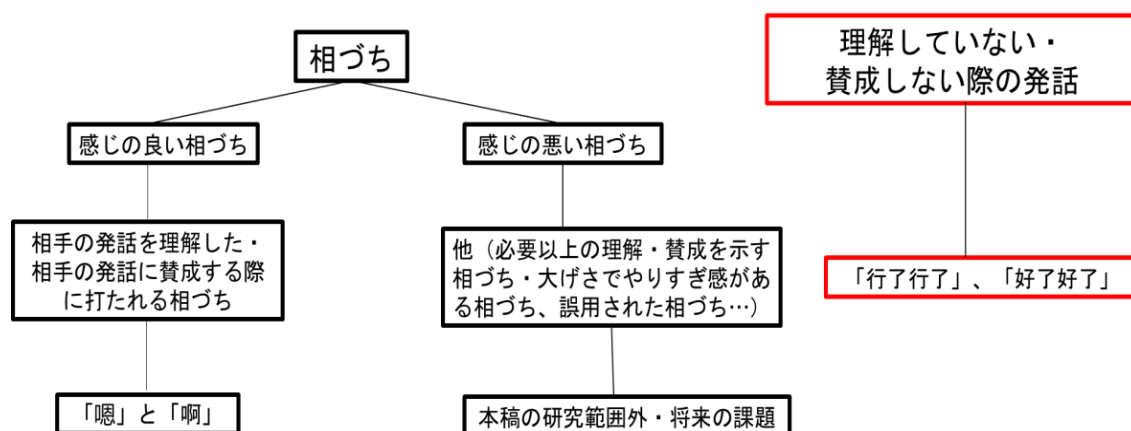


図 7.5 中国語・天津方言社会における「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」の体系

7.6. まとめ

本章では、現代日本語の感動詞「うん」「はい」と現代中国語の天津方言における「嗯」「啊」を比較することで、それぞれの感動詞が相づちとして発せられる際にどのような共通点と相違点があるかを明らかにした。考察の結果、「感じの悪い相づち」は中国語・天津方言社会に存在しないことが分かった。また、「相づちは相手の発話を促進するためのもの」

という考えは、実は日本語社会の相づち「うん」と「はい」には当てはまり切れず、現代中国語の天津方言「啊」に当てはまるということを指摘した。

第4章から本章までの考察の結果から、従来の研究における相づちの記述は、完全とは言えず、部分的な事実しか提示していないと言える。本稿では、相づちに対する事実をできる限り補足し、異なる言語社会における相づちの範囲と体系が変わってくることを示した。最後に、日本語社会と中国語社会において、「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」のあり方を解明し、それぞれの言語社会における相づちの位置づけを提示した。

第 8 章 結論と今後の課題

本章では、まず、第 8.1 節で第 4 章から第 7 章までの結論を要約する。そのうえで、考察の限界と今後の課題を述べる。

8.1. 第 4 章から第 7 章までの結論

8.1.1. 第 4 章の結論

第 4 章では、「相づちは理解・賛意を意味する」について考察した。相手の先行発話に対する理解度・態度が異なる際に、相づちのタイミングと韻律がどのように変化するかについて実験心理学と会話分析の方法で検討した。実験の結果から、日本語母語話者は相手の先行発話をあまり理解していないあるいは相手の発話に賛成しない際にも相づちを打つことがあるが、その際に相づちの打たれるタイミングは遅くなるか、非常に早くなることが分かった。

また、遅延した相づちの韻律と打たれる文脈を分析することで、以下のことが明らかになった。一部の文脈（話し手の発話に問題が生じた際）における遅延した相づちには「理解していない」「賛成しない」といった否定的な語用的効果がない可能性もある。一方、「新規話題・新たな概念が提示された際」において「理解していない」、「相手の発話が 1 つの見解として完結した際」において「賛成しない」という印象属性が結びついている。

相手の発話に賛成しない際に、非常に早いタイミングで相づちを打つ被験者もいる。分析の結果、相手の発話の言語行動レベルで否定する場合は、このような相づちが打たれる。

このような結果から、相づちは必ずしも理解・賛成につながるとは限らないことが分かった。形式的に肯定応答する際に用いられる「うん」「はい」が発せられても、必ずしもプラスの効果が生じないのである。

先行研究および本稿における調査の結果から、韓国語母語話者、中国語母語話者は相手の発話を理解していないあるいは相手の発話に賛成しない際に相づちを打たなくなるという傾向があり、一方、日本人は理解していない、賛成しない際にも相づちを打ち、その際のタイミングと韻律は理解した際、賛成する際と顕著に異なっていることが分かった。これらの相づちは、肯定応答する際の感動詞と同様の形式を持っているのだが、実際の会話で生じる語用的効果は、肯定ではなく、むしろ弱い否定である。従って、遅延した相づちの受け手は、

必ずしも自らの発話を続けられるのではなく、自分の意見の説明を加え、修復 (repair) を行うこともみられる。このような相づちは「理解」「賛成」といった語用的効果とは無縁で、本稿の第3章の標準で見れば「感じの悪い相づち」の類に入るべきである。

このように、第4章では「相づちは理解・賛意を意味する」という考えの限界と、「マイナスの印象」を与える相づちの存在を提示した。

8.1.2. 第5章の結論

第5章では、これまでの研究で提示された「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」という考えの限界を考察した。

第5章でまずは、相づちの頻度と相手の発話速度に関する結果を示した。実験の結果から、発話の長さが一節でも、複数の節の場合でも、速度が非常に早ければ、相づちは打たれにくいことが分かった。それに対して、非常に遅い速度の発話は、複数の節が続けば相づちは打たれにくい、一節の場合はそうではない。さらに、この実験の結果は、同一人物が異なる発話速度の人と会話する際のデータによって確かめられた。従って、日本語社会において、相づちは高頻度で打つことが必ずしも好まれないということを明らかにし、相づちの頻度で日本語学習者の日本語能力を判断することが必ずしも精確ではなく、改善する余地があることが分かった。

8.1.3. 第6章の結論

第6章では、第5章の続きで、これまで数多くの研究で報告されてきた「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」という見方に対して、例外となる天津方言を分析したことで、この考えは必ずしも全面的に正しいとは限らないことを示した。

先行研究で取り上げている会話の例から、確かに中国語共通語の会話の一部の場面において、相づちはほぼ打たれていないことが示されている。しかし、そのような観察結果は中国語社会に共通しているとは言い切れない。というのは、中国の北京・天津地域で約200年前から流行してきた話芸「相声」において、相づちなどの聞き手行動が頻繁に取られており、この話芸の形式は北京・天津地域の方言話者の話し方を反映している可能性があるからである。そこで、「北京・天津方言における会話で、相づちが高頻度で打つことが期待されている」という仮説を立て、会話のデータを収録した。

収録した会話のデータを分析した結果、天津方言話者の会話において、話し手は相声の芸

人のように、連続的に文単位で話すのではなく、常に間合いを取って細切れに話していることが分かった。また、聞き手による相づちの頻度が高く、話し手の発話が統語的・意味的にまとまっていなくても常に打たれていることも明らかになった。このことから、これまで定見とされてきた「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」といった考えは必ずしも正確ではなく、少なくとも部分的には間違っていると言える。

8.1.4. 第7章の結論

第7章では、「相づちは相手の発話の進行を促すためである」という見方について検討した。検討で用いられる対象は、日本語の「うん」「はい」、そして中国語の天津方言の会話において相づちとして高頻度で打たれる「嗯」と「啊」である。

第7章ではまず、遅延した相づちと、非常に早いタイミングで打たれる相づちといった、マイナスの語用的効果を帯びる「感じの悪い相づち」は、少なくとも肯定応答の感動詞という品詞の範囲で、中国語社会に存在しないということを提示した。

また、日本語社会と同様に相づちが高頻度で打たれることが好まれる中国語の天津方言の相づちを比較対象として取り上げ、日本語の相づち「うん」と「はい」、そして中国語の天津方言の相づち「嗯」と「啊」のそれぞれの感動詞の用法を比較した。日本語の相づち「うん」と「はい」、天津方言の「嗯」は、強い自己志向性も持っており、話者が新たな情報や、既知の情報との遭遇、あるいは確立した情報や、確立していない情報の取り出しなどの認知状態の調整が行われる際に発せられる。それに対して天津方言の「啊」は、自己志向性を持っておらず、他者志向的であり、既知の情報の遭遇や確立した情報の取り出しなどの認知状態の調整が行われる際に発せられる。従って、「啊」は認知状態の調整を表面化し、当該の情報が既に心内にある、あるいは確立していることを対話する相手と相互顕在的にする語用的効果がある。

その後、相づちとして発せられる際の「うん」「はい」「嗯」「啊」を比較した。比較の結果、「感じの良い相づち」の場合、日本語の「うん」と「はい」、天津方言の「嗯」と「啊」は、「相手の発話をここまで理解した」という語用的効果がある点で共通していることが分かった。ただし、感動詞の用法から、「うん」「はい」「嗯」は聞き手の内面により関わっており、相手の発話を聞いて「分かっていない」状態あるいは「聞いたことがない」状態から「分かった」状態に変化した際に打たれるという性質があることが分かっている。一方、聞き手が「啊」と打つ際には、相手の発話を聞く前に言及されていた話題や概念をある程度把

握でき、「啊」を発することで、「分かっている」ということを表面化し、話の展開を期待して、「続きを言ってください」という「催促」の言語行動を達成する。

また、日本語の「はい」は早いタイミングで高頻度で打たれると「相手の発話を中断する」という否定的な効果をもたらし、「感じの悪い相づち」になるのだが、「はい」と類似している天津方言の「啊」はそうではなく、「催促」という肯定的な効果しか持っていない。その理由は、「はい」は、話者自身の認知状態の調整を反映するものであり、直接に対話する相手に働きかけるものではなく、「文脈の断絶」(金田 2015)でもあったため、早いタイミングで高頻度で打たれれば、「分かっている」という意味合いが生じ、早めにセッションを終了させる効果が生じるからである。一方、「啊」も「分かっている」ことを表面化する効果はあるが、「はい」のようなセッションの終点を示す特性を帯びていないため、相手の発話途中に現れる際に「催促」という言語行動しか達成しない。

さらに、従来の研究で述べられている「相手の発話の進行を促すため」の相づちは、日本語社会には存在せず、現代中国語の天津方言には存在することも明らかになった。従来の研究で言及されてきた「相手の発話を促す」という効果は、日本語の相づち「うん」と「はい」の考察を通して、あくまでも相づちの受け手の「二次的解釈」によるものであり、「うん」と「はい」の本来の性質ではない。一方、天津方言における相づち「啊」は、「理解・賛成」を示す効果を持ち、またそれ自体「催促」という性質を帯びているため、「相手の発話の進行を促す」相づちと言える。

これらの考察結果から、日本語の相づちはタイミング・韻律が多様に変化することで、様々な言語行動を達成することができるが、中国語の天津方言はそうではなく、タイミング・韻律はほぼ定まっており、特定の言語行動しか達成できない。また、中国語社会において、相手の発話を中断しようとする際には、相づちではなく、意味論的「意味」がある表現を用いなければ達成できないことを示した。従って、日本語の相づち「うん」と「はい」はタイミングや韻律の変化によって、「理解した—理解していない」「賛成する—賛成しない」「促進する—阻害する」といった連続的な聴覚印象を生じさせるが、天津方言の「嗯」と「啊」はそうではない。「理解していない」「賛成しない」「打ち切る」を表す際には相づちではなく他のタイプの発話を選ぶ必要がある。

本稿の考察から、相づちは一見万国共通のものと考えられがちだが、実は異なる言語社会における相づちの範囲と体系が変わってくることが分かった。日本語社会、中国語天津方言における相づちの含む範囲と体系は、次の図(8.1)~(8.3)のように異なっている。

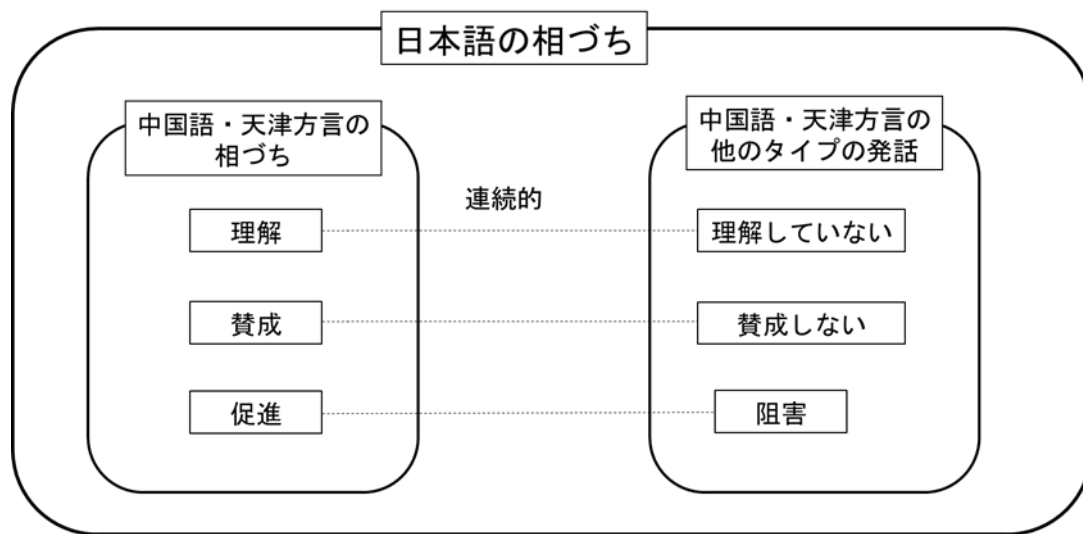


図 8.1 日本語社会と中国語・天津方言社会における相づちの含む範囲（図 7.3 再掲）

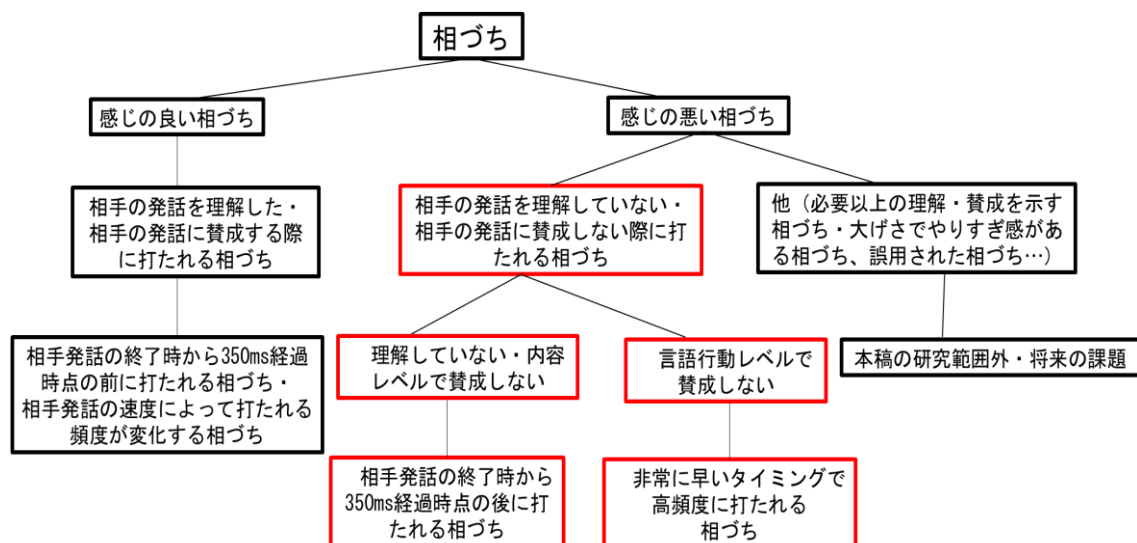


図 8.2 日本語社会における「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」の体系（図 7.4 再掲）

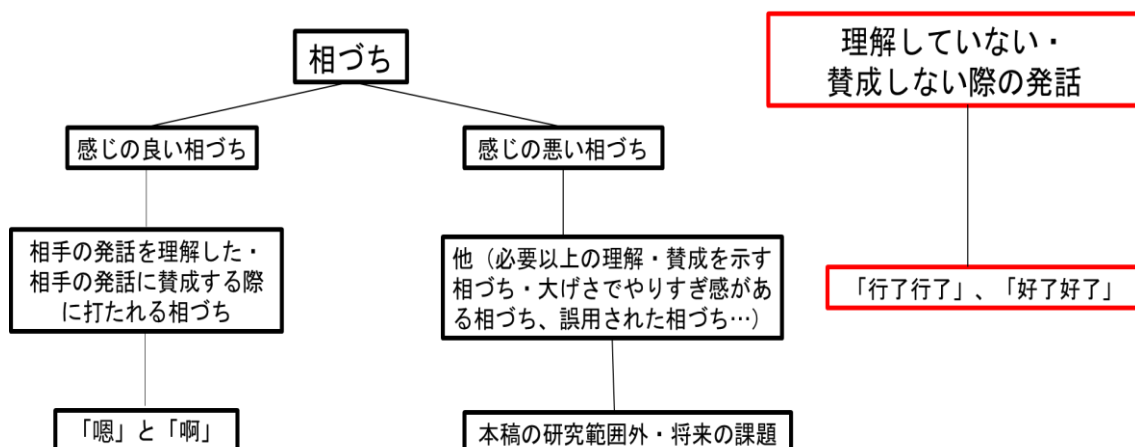


図 8.3 中国語・天津方言社会における「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」の体系（図 7.5 再掲）

8.2. 本研究の問題点と今後の課題

本稿では第 8.1 節でまとめたように、第 4 章から第 7 章まで相づちの意味、頻度、印象、といった 3 つの側面から従来の相づち論を検討した。「相づちは理解あるいは賛意を意味する」（第 4 章）、「日本語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれる」（第 5 章）、「中国語社会において相づちは高頻度で打つことが好まれない」（第 6 章）、「相づちは相手の発話の進行を促すためである」（第 7 章）といった考えの限界と改善の余地を示した。

今回の研究では、従来の研究で分析されていない中国語の天津方言を取り上げて、日本語の相づちと比較したが、中国語の他の方言において、相づちはどのように打たれているか、日本語の相づちとどのような共通点と相違点を持っているかは考察していない。将来は、中国語社会における様々な方言話者の会話を収録し、現状を記述したい。

また、「感じの悪い相づち」に関して、本稿ではその中の 1 種、「理解」「賛意」を意味しないものに焦点を当てて分析したが、「必要以上の理解あるいは賛成を示す大げさな相づち」や「学習者が誤用した相づち」といったコミュニケーションストラテジーのレベルにおける「感じの悪い相づち」を全く研究対象としなかった。今後、「感じの良い相づち」と「感じの悪い相づち」の全体図を明らかにするために、さらに広く、深く現象を考察する必要がある。

さらに、本稿で提案している相づちの分類方法は、それ以外の現象、例えばフィラーに援用することができるかどうかについて、今後研究を進めていきたいと考えている。

謝辞

本稿の作成にあたっては、多くの方々のご指導・ご助言を頂きました。ここでまず、3人の恩師、津熊良政先生（修士論文、立命館大学）、中川正之先生（修士論文、立命館大学）、定延利之先生（博士論文、神戸大学）に心より深く感謝を申し上げます。修士課程（2011－2013）が始まったばかりの頃に、津熊先生に励まされ、縦断的分析の手法を使用して留学生の滞日期間と発する相づちの変化との相関関係を明らかにしようと決意しました。津熊先生には、文献の調べ方や調査手法だけでなく、人との付き合い方やストレスの解消法など色々とお世話になりました。修士課程に在籍していた2年間はずっと、実の父のように、厳しいながらも暖かく見守って下さいました。中川先生とは、日中の言語・文化の比較分析の授業でご指導頂いたのをきっかけに、指導教官ではありませんでしたが、研究の問題や相談を聞いてくださり、励まして下さいました。また、中川先生の励ましで博士課程に進学することに決めました。その後2013年に中川先生のご紹介で定延先生にお会いすることができ、それが神戸大学に入学するきっかけとなりました。博士課程（2014－2017）の指導教官である定延先生は、言語学、音声学、コミュニケーション論などの分野で新たな発想や手法を取り入れた研究活動に導いて下さいました。定延先生は、「研究では、常識や定見に縛られず、当たり前の上に疑問を持ち続ける」ことの大切さを身をもって示して下さいました。愚鈍な私に対しても全く怒ることなく辛抱強く指導して下さいました。また、定延先生のお陰で、様々な場で発表するチャンスに恵まれ、たくさんのコメントを頂くことができました。

本稿の執筆中、集団指導で有益なコメントとアドバイスを与えてくださった神戸大学の林良子先生、松本絵里子先生、米谷淳先生、水口志乃扶先生、山田玲子先生に厚く御礼を申し上げます。また、科学研究費助成事業の会議で匂坂芳典先生、朱春躍先生、砂川有里子先生、友定賢治先生、ニック・キャンベル先生などの先生方からも、たくさんのアドバイスを頂きました。ここに伏して感謝申し上げます。また、感性コミュニケーションコースの先輩、後輩の皆さんとの議論は多くの示唆を与えてくれました。そして、お忙しい中、丁寧に統計処理の手法を教えくださった林萍萍さん、日本語の文章をチェックして下さった甲藤瞳さん、宿利由希子さん、相づちのタイミングのテストページを作成して下さった田畑安希子さん、中国語の会話のデータを提供して下さった遠藤智子さん、天津方言の会話を収録する際にご協力を頂いた方々に心よりお礼を申し上げます。

また、2015－2016 年度はロータリー米山記念奨学会の奨学金のご支援のお蔭で、生活費を心配することなく研究に専念することができました。深く感謝いたします。

なお、本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金・特別研究員奨励費（課題番号：16J02620、課題名：「状況に埋め込まれた相づちのタイミングと韻律」）、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A)「状況に基づく日本語話しことばの研究と、日本語教育のための基礎資料の作成」（課題番号：23242023、研究代表者：定延利之）、日本学術振興会科学研究費補助金による挑戦的萌芽研究「日中対照に基づく感動詞の理論的基盤構築に関する調査研究」（課題番号 15K12887、代表：友定賢治）の助成を受けています。ここに記して謝意を表します。

最後に、いつも励ましてくれた父と母、そして気分が沈んだ時にいつもそばにいて慰めてくれた揣迪之さんに深く感謝します。

参考文献と資料

<参考文献>

- 稲井文（2005）「あいづちの心的効果について」『京都大学大学院教育研究科紀要』51, 218-231.
- 今石幸子（1993）「聞き手の行動：あいづちの規定条件」『阪大日本語研究』5, 95-109.
- 今石幸子（1994）「話し手の発話とあいづちの関係について」『大阪大学日本学報』13, 107-121.
- 今石幸子（1998）「日本語学習者のチュートリアルにおけるあいづちとその周辺—フォローアップ・インタビューによる談話分析を中心に」『阪大日本語研究』10, 111-127.
- 上里美樹・吉野幸一郎・高梨克也・河原達也（2014）「傾聴対話における相槌の韻律的特徴の同調傾向の分析」『第70回言語・音声理解と対話処理研究会資料 SIG-SLUD-B303』, 7-13.
- 榎本美香（2009）『日本語における聞き手の話者移行適格場の認知メカニズム』ひつじ書房
- 大河原真美（1989）「堪能な日本語の要因について」『平成元年度日本語教育学会大会発表論文集』, 39-44.
- 大野誠寛・神谷優貴・松原茂樹（2010）「タグ付けの安定性を備えた音声対話コーパスに基づくあいづち生成タイミングの検出」『電子情報通信学会技術研究報告（音声）』110(357), 19-24.
- 大浜るい子（2006）『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』溪水社
- 金田純平（2015）「文末の感動詞・間投詞—感動詞・間投詞対照を視野に入れて」友定賢治編『感動詞の言語学』ひつじ書房, 15-37.
- 金秀芝（1994）「日・韓両語における「あいづち」の対照研究—電話の会話を中心に」『平成6年度日本語教育学会春季大会予稿集』85-90.
- 窪田彩子（2000）「日本語学習者の相づちの習得-日本人との初対面における会話資料を基に」『南山日本語教育』7, 76-114.
- 黒崎良昭（1987）「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について」『国語学』150, 122-109.
- グリーンバーク陽子（2010）「語彙の印象属性にもとづく対話韻律生成」早稲田大学博士論文
- 小宮千鶴子（1986）「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺」『語学教育研究論叢』3, 43-

62.

阪田真弓・広瀬啓吉（1995）「対話音声の韻律的特徴の分析と合成」『信学技報』SP95-17, 55-62.

定延利之（2002）『「うん」と『そう』に意味はあるか』定延利之編著『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房, 75-112.

定延利之（2016）『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房

佐々木泰子（2002）「相談場面におけるあいづちの機能」『日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究—文章・音声の母語別比較』平成 13 年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)(1)研究成果報告書, 24-33.

ザトラウスキー・ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版

神谷優貴・大野誠寛・松原茂樹（2010）「あいづち生成タイミング制御のための音声対話コーパスの構築と利用」『情報学ワークショップ 2010 論文集』, 195-200.

神谷優貴・大野誠寛・松原茂樹（2011）「音声対話コーパスに基づくあいづち生成タイミングの検出とその評価」『言語処理学会第 17 回年次大会発表論文集』, 103-106.

杉戸清樹（1987）「発話の受け継ぎ」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析』三省堂, 68-106.

杉戸清樹（1989）「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現」『日本語教育』67, 48-59.

杉藤美代子（1999）「ことばのスピード感とは何か」『言語』28(9), 30-34.

塚原渉・ワード・ナイジェル（1997）「理解を介さない会話現象としてのあいづち」『言語』26(10), 90-97.

辻本桜子（2007）「あいづちの男女差に関する一考察—トーク番組における司会者の相づちを通して」『日本言語文化研究』11, 33-45.

筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版

寺尾綾（2008）「ある中国語を母語とする日本語学習者の言語的あいづち—日本語の習熟度からみた縦断的分析」『阪大日本語研究』20, 91-117.

富樫純一（2001）「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6, 19-41.

富樫純一（2002）『「はい」と『うん』の関係をめぐって』定延利之編著『「うん」と『そう』の言語学』ひつじ書房, 127-157.

- 中里収 (2002) 「あいづちのタイミングと、話し手の発話速度との相関について」『言語・音声理解と対話処理研究会』 34, 57-62.
- 中島悦子 (2003) 「発話上におけるあいづちの出現位置とその分布—自然談話録音資料にもとづいて」『21 世紀アジア学会紀要』 1, 65-78.
- 登里民子 (1993) 「相づち習得の縦断的研究」お茶の水女子大学修士論文
- 藤井桂子 (2001) 「学習者の滞日中における『聞き手発話』の変化」『横浜国立大学留学生センター紀要』 8, 79-91.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』 64, 13-25.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- 本田明子 (1997) 「発話の重なりと談話進行」『女性のことば・職場編』 ひつじ書房
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集』 第 2 巻言語学編, 261-279.
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』 7(12), 4-11.
- 水野義道 (1988) 「中国語のあいづち」『日本語学』 7(13), 18-23.
- 村田晶子 (2000) 「学習者のあいづちの機能分析—『聞いている』という信号、感情・態度の表示、そして **turn-taking** に至るまで」『世界の日本語教育』 10, 241-260.
- メイナード (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』 16(12), 88-92.
- メイナード (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』 1, 63-88.
- 羅希 (2014a) 「中国人留学生が日本語に適應する過程の縦断的分析—留学一年間の相づちの使用状況の変化から」『言語と言語教育をめぐって』 7, 131-160.
- 羅希 (2014b) 「会話の雰囲気に影響する相づち—留学生と日本人の会話データの観察より」『信学技報』 114(189), 19-24.
- 羅希 (2016a) 「日本語の相づちの頻度とタイミングに関する総合的考察」『日本語音声コミュニケーション』 4, 23-47.
- 羅希 (2016b) 「中国の北京・天津方言話者のコミュニケーション行動に関する一観察」『社会言語科学会第 38 回大会発表論文集』, 66-69.
- 李善雅 (2001) 「議論の場におけるあいづち—日本語母語話者と韓国人学習者の相違」『世界の日本語教育』 11, 139-152.

- 劉潔・大橋真 (2010) 「会話におけるあいづちの日中比較:あいづちの頻度から見る日中比較文化論的考察」『言語文化研究』 18, 131-142.
- 劉建華 (1987) 「電話でのアイズチ頻度の中日比較」『言語』 16(21), 93-97.
- 柳川子 (2003) 「台湾人日本語学習者におけるあいづち表現—滞日経験のない上級学習者」『言語文化と日本語教育』 25, 66-76.
- 劉丹丹 (2012) 「勧誘会話における中日あいづちの対照研究」大阪大学修士論文
- 劉丹丹 (2013) 「勧誘会話における日本語の『うん』と中国語の『嗯』の使用について」『日本語・日本文化研究』 23, 106-117.
- 呂萍 (2010) 「中日語の電話による会話におけるあいづちの使用—頻度と出現位置に着目して」『国際文化研究』 16, 109-121.
- 山中鉄斎 (2012) 「中国人技能実習生による日本語あいづち習得の縦断的習得研究」『日本語支援教育研究』 1, 37-51.
- 楊晶 (1997) 「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態、頻度、タイミングを中心に」『言語文化と日本語教育 平田悦朗先生退官記念号』 13, 117-12.
- 楊晶 (1999) 「中・日両言語の相づちに関する一考察—頻度とその周辺」『人間文化研究年報』 23, 28-38.
- 楊晶 (2006) 「相づちのタイミングにおける中日の比較—異なる会話場面での相づちの先行発話に対する分析を通して」『人間文化論叢』 9, 305-313.
- Chafe, W. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clancy, P., Thompson, S., Suzuki, R. & Tao, H. (1996) The conversational use of reactive tokens in English, Japanese and Mandarin, *Journal of Pragmatics*, 26, 355-387.
- Duncan, S. (1972) Some Signals and Rules for Taking Speaking turns in Conversation, *Journal of Personality and Social Psychology*, 23, 283-292.
- Endo, T. (2010) Epistemic stance marker as a disagreement preface: Wo jue de 'I feel/think' in Mandarin conversation in response to assessments 『京都大学言語学』, 29, 43-76.

- Fries, C. (1952) *The Structure of English*. New York: Harcourt Brace.
- Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Garden City, New York. (浅野敏夫訳 (2002) 『儀礼としての相互行為<新訳版>—対面行動の社会学』法政大学出版局)
- Jefferson, G. (1983/1993) Caveat speaker: Preliminary Notes on Recipient Topic-Shift Implicature, *Research on Language and Social Interaction*, 26(1), 1-30.
- Jefferson, G. (1984) Notes on a System Deployment of the Acknowledgment Tokens ‘Yeah’ and ‘Mm hm’, *Papers in Linguistics*, 17(2), 197-216.
- Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge University Press. 57-101.
- Sacks, H. (1992) *Lectures on Conversation, Volumes I and II*, Edited by G. Jefferson with Introduction by E.A. Schegloff, Blackwell, Oxford.
- Sacks, H., Schegloff, A. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language*, 50(4), 696-735. (西坂仰訳 (2010) 『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織—』世界思想社)
- Sweetser, E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press. (澤田治美訳 (2000) 『認知意味論の展開—語源学から語用論まで』研究社出版)
- White, S. (1986) *Functions of Backchannels in English: A cross-cultural analysis of American and Japanese*. Unpublished doctoral dissertation, Georgetown University.
- Yngve, V. (1970) On getting a word in edgewise, *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 567-577.

<資料>

『KOBE Crest FLASH』 (<http://www.speech-data.jp/ta/kobedata/>参照)

